富士市埋蔵文化財調査報告　第53集

静岡県　富士市

富士市内遺跡発掘調査報告書

—平成11・12年度—

◆沖田遺跡 第111・116・118次

◆天神塚古墳 第2次

◆伊勢塚古墳 第4次

・舟久保遺跡 第42地区

・沢東A遺跡 第5次

・柏原遺跡 第3地区

・その他の試掘確認調査

2012年3月

富士市教育委員会

1. 墳丘全景（北から）

2. 2-1Tr 全景（北西から）

3. 2-1Tr 土層（G-G'①）

4. 2-1Tr 土層（G-G'②）

5. 2-1Tr 土層（H-H'）

H12-6　中里 2 古墳群　天神塚古墳 2 次

資料報告　行僧遺跡　出土赤彩壺

H12-9　伝法 1 古墳群　伊勢塚古墳 4 次　出土埴輪

※中扉裏に報告番号対応図を掲載

富士市埋蔵文化財調査報告　第53集

静岡県　富士市

富士市内遺跡発掘調査報告書

—平成11・12年度—

◆沖田遺跡 第111・116・118次

◆天神塚古墳 第2次

◆伊勢塚古墳 第4次

・舟久保遺跡 第42地区

・沢東A遺跡 第5次

・柏原遺跡 第3地区

・その他の試掘確認調査

2012年3月

富士市教育委員会

例　言

1．本書は、静岡県富士市内において富士市教育委員会が平成 11 年度・平成 12 年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。調査名については、調査当時の包蔵地範囲に準拠して呼称している。なお、平成 20 年度に旧富士市と旧富士川町が合併しているため、ここでいう富士市内とは旧富士市域を指す。

2．調査は、周知の埋蔵文化財包蔵地およびその近接地における開発行為等に伴い、事業者からの依頼を受けて、富士市教育委員会文化振興課が実施した。

3．本書の編集は藤村　翔（文化振興課主事）がおこない、若林美希（文化振興課臨時職員）がこれを補佐した。執筆は、第１章第２節３（沖田遺跡第 111 次調査地点）小結、第２章第２節６（天神塚古墳２次）、９（伊勢塚古墳４次）、第３章のすべてと、第１章・第２章の出土遺物に関する記述を藤村が、第１章・第２章の上記以外の調査と遺構に関する記述を若林がおこなった。なお、出土土師器の評価については佐藤祐樹（文化振興課上席主事）の協力を得た。

4．本書に掲載した出土遺物実測図は小田貴子・金剌才己・加藤咲子（文化振興課臨時職員）が実測・トレースし、遺物図版作成を稲葉万智子（同）がおこなった。遺物写真は巻頭図版２・PL.38 の行僧遺跡出土赤彩壺を佐藤が、そのほかを小田が撮影した。遺物の接合・拓本は井上尚子・石川都久子・斉藤妙子・渡辺美規子（同）による。調査記録写真は、写真図版表紙の伊勢塚古墳遠景を佐藤が、それ以外は各章第１節に示した調査担当者が撮影したものを使用した。

5．巻頭図版１の天神塚古墳墳丘全景写真については、静岡県教育委員会文化財保護課より提供を受けた。便宜を図っていただきました菊池吉修氏、河合　修氏、井鍋誉之氏、岩名建太郎氏に深謝いたします。

6．近世の陶磁器類については、東京大学埋蔵文化財調査室　堀内秀樹氏より指導を受けた。記して感謝いたします。

7．第２章第２節 6. 天神塚古墳２次調査の期間中には、下記の方々より貴重な指導や助言、協力を得た。明記して御礼申し上げます。
石川　薫、植松章八、佐藤政次、鈴木富男、建部恭宣、中嶋郁夫、平林将信、前嶋秀張、向坂鋼二、山田康雄、山内昭二、山本恵一、渡井英誉（五十音順、敬称略）

8．本書で報告した調査に関わる記録図面・出土遺物等の資料は、すべて富士市教育委員会で保管している。

凡　例

1．本書で示す高度は海抜を、方位は座標北を、それぞれ用いた。

2．各調査報告の冒頭に示す調査地位置図には、『富士市土地計画基本図』を使用した。

3．挿図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺はすべて任意である。

4．本書における標記は次のとおりである。

Tr・TP：トレンチ・テストピット　　SB：竪穴建物跡　　SD：溝状遺構

SX：性格不明遺構　　SK：土坑　　Pit：ピット　　P：土器　　S：石

5．土器の実測図では、断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

縄文土器・弥生土器・土師器　　須恵器　　灰釉陶器・緑釉陶器・陶器

6．土器および土層などの色調は『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修　2000 年版）による。

7．出土遺物の評価については、主として次の文献に基づいて検討した。

・土師器

木ノ内義昭 2002「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相」『東平遺跡　第 16 地区（三日市廃寺跡）、第 27 地区発掘調査報告書』富士市教育委員会

鈴木一有 2002『恒武西宮遺跡　浜松市恒武町 恒武西宮遺跡 3・6・7 次発掘調査報告書』（財）浜松市文化協会

保坂康夫 1992「2．甲斐型土器各器種の状況　甕（大形）」『甲斐型土器研究グループ第 1 回研究集会資料　甲斐型土器 －その編年と年代－』山梨県考古学協会

山本恵一 1995「静岡県下の 6 ～ 7C の土師器 －駿河東部・伊豆北部の現状について」『東国土器研究』第 4 号　東国土器研究会

山本恵一 1999「駿河の古墳時代中期の土器 －東駿河を中心にして－」『東国土器研究』第 5 号　東国土器研究会

渡井英誉 1997「弥生・古墳時代編」『富士宮市文化財調査報告書第 23 集　滝戸遺跡 －市立富士宮第三中学校校舎増改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』富士宮市教育委員会

渡井英誉 1999「中見代式土器小考 －大廓式土器から中見代式土器へ－」『東国土器研究』第 5 号　東国土器研究会

・須恵器

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

鈴木敏則 1998「第 1 章第 4 節　律令時代土器編年の概要」『梶子北遺跡』遺物編（本文）（財）浜松市文化協会

鈴木敏則 2004「第 5 章第 2 節　静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会

・灰釉陶器

城ヶ谷和弘 2010「第 1 章第 3 節　編年及び編年表　土師器・須恵器・施釉陶器（緑釉・灰釉）」『愛知県史』資料編 4 考古 4 飛鳥～平安　愛知県

・陶磁器類

東京大学埋蔵文化財調査室 1999『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類』（1）

大成可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）－器種（小器種）の出土状況－」『東京大学構内遺跡調査研究年報 7　2007.2008 年度』東京大学埋蔵文化財調査室

目　次

例　言
凡　例
目　次

第１章　平成 11 年度の調査
第１節　調査体制と調査件数 …… 1
第２節　発掘調査報告 …… 3

第２章　平成 12 年度の調査
第１節　調査体制と調査件数 …… 25
第２節　発掘調査報告 …… 27

第３章　後　論
第１節　資料報告 …… 80
第２節　古墳時代後期初頭における２つの首長墳とその評価 …… 83

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1章　平成11年度の調査

第1図　平成11年度　調査遺跡の位置と地形区分 …… 1
第2図　H11-1　調査地位置図 …… 3
第3図　H11-1　トレンチ配置図・土層断面図 …… 3
第4図　H11-1　出土遺物実測図 …… 4
第5図　H11-2　調査地位置図 …… 4
第6図　H11-2　土層断面図 …… 4
第7図　H11-3　調査地位置図 …… 5
第8図　H11-3　トレンチ配置図 …… 5
第9図　H11-3　土層断面図 …… 5
第10図　H11-3　3トレンチ平面図・断面図 …… 6
第11図　H11-3　出土遺物実測図 …… 7
第12図　H11-4　調査地位置図 …… 9
第13図　H11-4　土層断面図 …… 9
第14図　H11-5　調査地位置図 …… 10
第15図　H11-5　トレンチ平面図・断面図 …… 10
第16図　H11-6　調査地位置図 …… 11
第17図　H11-6　トレンチ平面図・断面図 …… 11
第18図　H11-6　出土遺物実測図 …… 12
第19図　H11-7　調査地位置図 …… 12
第20図　H11-7　土層断面図 …… 12
第21図　H11-8　調査地位置図 …… 13
第22図　H11-8　トレンチ平面図・土層断面図 …… 13
第23図　H11-9　調査地位置図 …… 14
第24図　H11-9　トレンチ平面図・土層断面図 …… 14
第25図　H11-10　調査地位置図 …… 15
第26図　H11-10　出土遺物実測図 …… 15
第27図　H11-10　トレンチ平面図・土層断面図 …… 16
第28図　H11-11　調査地位置図 …… 17
第29図　H11-11　トレンチ平面図・土層断面図 …… 17
第30図　H11-12　調査地位置図 …… 17
第31図　H11-12　トレンチ平面図・土層断面図 …… 18
第32図　H11-13　調査地位置図 …… 18
第33図　H11-13　テストピット平面図 …… 18
第34図　H11-13　出土遺物実測図 …… 19
第35図　H11-13　テストピット3・5平面図・土層断面図 …… 19
第36図　H11-14　調査地位置図 …… 20
第37図　H11-14　テストピット平面図・土層断面図 …… 20
第38図　H11-15　調査地位置図 …… 20
第39図　H11-15　トレンチ平面図 …… 20
第40図　H11-15　土層断面図 …… 21
第41図　H11-16　調査地位置図 …… 21
第42図　H11-16　トレンチ平面図・土層断面図 …… 21
第43図　H11-17　調査地位置図 …… 22
第44図　H11-17　トレンチ平面図 …… 22
第45図　H11-17　土層断面図 …… 23
第46図　H11-18　調査地位置図 …… 23
第47図　H11-18　トレンチ平面図・土層断面図 …… 24

第2章　平成12年度の調査

第48図　平成12年度　調査遺跡の位置と地形区分 …… 25
第49図　H12-1　調査地位置図 …… 27
第50図　H12-1　トレンチ平面図 …… 27
第51図　H12-1　土層断面図 …… 28
第52図　H12-1　出土遺物実測図 …… 29
第53図　H12-2　調査地位置図 …… 31
第54図　H12-2　トレンチ平面図・土層断面図 …… 31
第55図　H12-3　調査地位置図 …… 32
第56図　H12-3　トレンチ平面図・土層断面図 …… 32
第57図　H12-4　調査地位置図 …… 32
第58図　H12-4　トレンチ平面図・土層断面図 …… 33
第59図　H12-4　出土遺物実測図 …… 34
第60図　H12-5　調査地位置図 …… 37
第61図　H12-5　トレンチ平面図・土層断面図 …… 37
第62図　H12-6　天神塚古墳の位置と周辺の遺跡 …… 38
第63図　H12-6　天神社基壇平面図・断面図 …… 39
第64図　H12-6　天神塚古墳墳丘測量図 …… 40
第65図　H12-6　天神塚古墳　トレンチ配置図 …… 42
第66図　H12-6　天神塚古墳　土層断面図① …… 43
第67図　H12-6　天神塚古墳　土層断面図② …… 45
第68図　H12-6　天神塚古墳　報告遺物の割合 …… 46
第69図　H12-6　天神塚古墳　社殿造成土～墳丘盛土内出土遺物実測図 …… 46
第70図　H12-6　天神塚古墳　下層出土遺物実測図 …… 47
第71図　H12-6　天神塚古墳　出土層位不明遺物実測図 …… 48
第72図　H12-7　調査地位置図 …… 54
第73図　H12-7　トレンチ平面図・土層断面図 …… 54
第74図　H12-8　調査地位置図 …… 54
第75図　H12-8　トレンチ平面図・土層断面図 …… 55
第76図　H12-9　調査地位置図 …… 55
第77図　H12-9　伊勢塚古墳平面図 …… 56
第78図　H12-9　伊勢塚古墳　トレンチ平面図・土層断面図 …… 57
第79図　H12-9　伊勢塚古墳　報告遺物の割合 …… 58
第80図　H12-9　伊勢塚古墳　出土遺物実測図（円筒埴輪） …… 59
第81図　H12-9　伊勢塚古墳　出土遺物実測図（円筒埴輪、形象埴輪、土師器） …… 60
第82図　H12-10　調査地位置図 …… 62
第83図　H12-10　トレンチ平面図・土層断面図 …… 62
第84図　H12-11　調査地位置図 …… 63
第85図　H12-11　トレンチ平面図 …… 63
第86図　H12-11　土層断面図 …… 64
第87図　H12-11　SB1・SB2実測図 …… 65
第88図　H12-11　SB3実測図 …… 65
第89図　H12-11　SB4実測図 …… 66
第90図　H12-11　SB5・SB6実測図 …… 66
第91図　H12-11　SB7実測図 …… 67
第92図　H12-11　出土遺物実測図 …… 67
第93図　H12-12　調査地位置図 …… 68
第94図　H12-12　トレンチ平面図・土層断面図 …… 68
第95図　H12-13　調査地位置図 …… 69
第96図　H12-13　トレンチ平面図・土層断面図 …… 69
第97図　H12-13　出土遺物実測図 …… 70
第98図　H12-14　調査地位置図 …… 71
第99図　H12-14　トレンチ平面図・土層断面図 …… 71
第100図　H12-15　調査地位置図 …… 72

第101図　H12-15　トレンチ平面図 …… 72
第102図　H12-15　トレンチ平面図・土層断面図 …… 73
第103図　H12-15　出土遺物実測図 …… 74
第104図　H12-16　調査地位置図 …… 75
第105図　H12-16　トレンチ平面図・土層断面図 …… 76
第106図　H12-17　調査地位置図 …… 76
第107図　H12-16　土層断面図 …… 77
第108図　H12-18　調査地位置図 …… 77
第109図　H12-18　トレンチ平面図・土層断面図 …… 77
第110図　H12-18　出土遺物実測図 …… 78
第111図　H12-19　調査地位置図 …… 78
第112図　H12-19　トレンチ平面図・土層断面図 …… 78
第113図　H12-20　調査地位置図 …… 79
第114図　H12-20　トレンチ平面図・土層断面図 …… 79

第3章　後論

第115図　資料報告　対象遺跡の位置と地形区分 …… 80
第116図　資料報告　出土遺物実測図 …… 81
第117図　行徳遺跡周辺図 …… 82
第118図　伊勢塚古墳の墳丘と出土遺物 …… 83
第119図　伊豆の国市多田大塚６号墳の墳丘と出土遺物 …… 84
第120図　天神塚古墳復元図・土層図 …… 85
第121図　大源スコリア降下前後の土器 …… 86
第122図　天神塚古墳出土遺物の編年的位置 …… 87
第123図　寺屋敷古墳出土遺物 …… 88
第124図　駿河東部・伊豆地域における古墳の変遷 …… 88
第125図　潤井川流域周辺における
古墳時代中期から後期の集落と古墳 …… 89

挿表目次

第1章　平成11年度の調査

第1表　平成11年度発掘調査一覧 …… 2
第2表　H11-1　出土遺物観察表 …… 4
第3表　H11-3　出土遺物観察表 …… 8～9
第4表　H11-6　出土遺物観察表 …… 12
第5表　H11-10　出土遺物観察表 …… 16
第6表　H11-13　出土遺物観察表 …… 19

第2章　平成12年度の調査

第7表　平成12年度発掘調査一覧 …… 26
第8表　H12-1　出土遺物観察表 …… 30
第9表　H12-4　出土遺物観察表 …… 35～36
第10表　土層観察表 …… 49～51
第11表　H12-6　天神塚古墳　出土遺物観察表 …… 51～53
第12表　H12-9　伊勢塚古墳　出土遺物観察表 …… 61
第13表　H12-11　出土遺物観察表 …… 67
第14表　H12-13　出土遺物観察表 …… 70～71
第15表　H12-15　出土遺物観察表 …… 75
第16表　H12-18　出土遺物観察表 …… 78

写真図版目次

巻頭図版1

H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次
1．墳丘全景（北から）
2．Z-1Tr 全景（北西から）
3．Z-1Tr 土層（G-G′①）
4．Z-1Tr 土層（G-G′②）
5．Z-1Tr 土層（H-H′）

巻頭図版2

資料報告　行徳遺跡　出土赤彩壺
H12-9　伝法１古墳群
伊勢塚古墳４次　出土埴輪

平成11年度　調査写真

PL.1

H11-1　三新田遺跡Ｊ地区
1．1Tr 全景（西から）
2．1Tr 東端土層
3．2Tr 全景（西から）
4．溝状遺構全景（南から）
5．溝状遺構土層（1Tr）
6．溝状遺構土層（2Tr）

PL.2

H11-2　沖田遺跡隣接地（110次調査地点）
1．テストピット土層①
2．テストピット土層②
H11-4　沖田遺跡112次調査地点
1．TP1 土層
2．TP2 全景
H11-5　荻ノ原古墳群
1．1Tr（旧荻ノ原第１号墳．南西から）
2．2Tr 全景（南東から）

PL.3

H11-3　沖田遺跡隣接地（111次調査地点）
1．1Tr 全景（南から）
2．3Tr 南西角　SB1・SB2 土層
3．3Tr 全景（北から）
4．3Tr　SX1（西から）

PL.4

H11-6　児森遺跡１地区
1．1Tr 土層
2．2Tr 東端
3．3Tr 全景（東から）
H11-11　神谷古墳群６地区
1．調査地全景（西から）
2．1Tr 全景（南西から）
3．土層

PL.5

H11-8　岩倉Ａ遺跡３地区
1．4Tr 全景（南から）
2．4Tr 土層
3．2Tr 全景（南から）
H11-9　中原遺跡20地区
1．3Tr 全景（西から）
2．3Tr 土層

PL.6

H11-10　比奈１古墳群５地区-1次
1．1Tr 全景（北西から）
2．1Tr 土層①
3．1Tr 土層②（南端）
4．2Tr 全景（北から）
5．3Tr
6．4Tr（北西から）
7．4Tr 土層

PL.7

H11-13　沖田遺跡 114 次調査地点

1．TP2 土層

2．TP4 土層

3．TP5 西壁土層

4．TP5 南壁土層

5．5Tr 北壁土層　畦畔

PL.8

H11-12　沖田遺跡 113 次調査地点

1．1Tr 全景（西から）

2．1Tr 西端土層

H11-14　沖田遺跡 115 次調査地点

1．TP1 土層

H11-15　中原遺跡 21 地区

1．1Tr 全景（西から）

PL.9

H11-16　鎌硝古墳群 2 地区

1．1Tr 全景（西から）

2．1Tr 土層（地山の落ち込み）

H11-17　舟久保遺跡 41 地区

1．1Tr 全景（東から）

2．2Tr 全景（西から）

3．3Tr 全景（西から）

4．3Tr 西端土層

H11-18　宮添遺跡 F 地区

1．調査地全景（南から）

2．2Tr 土層（C-C′）

平成 11 年度　遺物写真

PL.10

H11-1　三新田遺跡 J 地区

H11-6　兒森遺跡 1 地区

H11-10　北奈良 1 古墳群 5 地区 -1 次

H11-13　沖田遺跡 114 次調査地点

H11-3　沖田遺跡 111 次調査地点

PL.11

H11-3　沖田遺跡 111 次調査地点

平成 12 年度　調査写真

PL.12

H12-1　沢東 A 遺跡 5 次調査地点

1．2Tr 全景（南から）

2．2Tr 土層

3．1Tr 溝状遺構検出（南から）

4．3Tr 全景（北から）

5．3Tr 北端土層

H12-3　中原遺跡 22 地区

1．1Tr 全景（西から）

2．1Tr 東端土層

PL.13

H12-2　石坂 3 古墳群 1 地区

1．1Tr 全景（西から）

2．1Tr　溝状遺構

3．1Tr　土坑

H12-5　船津 7 古墳群 6 地区

1．2Tr 全景（北から）

2．2Tr 土層

3．3Tr（西から）

H12-7　岩倉 A 遺跡 4 地区

1．2Tr 土層

2．3Tr 土層

PL.14 ～ 19

H12-6　中里 2 古墳群　天神塚古墳 2 次

1．「後円部」トレンチ全景（北西から）

2．天神社東石（南から）

3．2-1Tr 中央付近（北西から）

4．2-1Tr 南端（南西から）

5．2-3Tr（南西から）

6．2-2Tr（東から）

7．2-2Tr 土層（I-I′）

8．2-3Tr 土層（F-F′）

9．2-4Tr（南から）

10．2-8Tr（南から）

11．2-8Tr（東から）

12．2-8Tr 土層（E-E′ ①）

13．2-8Tr 土層（E-E′ ②）

14．2-1Tr 土層（G-G′ ①）

15．2-1Tr 土層（G-G′ ②）

16．2-1Tr 土層（G-G′ ③）

17．2-1Tr 土層（H-H′ ①）

18．2-1Tr 土層（H-H′ ②）

19．2-1Tr 土層（H-H′ ③）

PL.20

H12-4　沖田遺跡 116 次調査地点

1．TP4

2．TP1

3．TP6

4．TP8

5．TP11

H12-8　中原遺跡 23 地区

1．1Tr 全景（北西から）

H12-10　善得寺廃寺跡 2 地区

1．3Tr 全景（東から）

PL.21

H12-9　伝法 1 古墳群　伊勢塚古墳 4 次

1．伊勢塚古墳遠景（南から）

2．5Tr（南から）

3．1Tr（南から）

4．1Tr 埴輪片出土状況

5．1Tr 北端土層

PL.22 ～ 24

H12-11　舟久保遺跡 42 地区

1．1Tr 全景（北から）

2．SB7 全景（東から）

3．SB4 土層（西から）

4．SB4 全景（西から）

5．SB1・SB2 検出状況（西から）

6．SB3 全景（東から）

7．SB3 土層（東から）

8．SB3 カマド（東から）

9．SB5・SB6 全景（西から）

10．SB5 土層（北から）

11．SB5 カマド（西から）

PL.25

H12-12　富士例 1 古墳群隣接地

1．1Tr・2Tr（東から）

2．2Tr 東壁土層

H12-16　大坂遺跡 1 地区

1．1-1Tr（西から）

2．2-1Tr 全景（南東から）

3．2-1Tr 土層

4．2-2Tr 土層

5．2-4Tr 東端（西から）

PL.26

H12-13　沖田遺跡 118 次調査地点

1．TP1

2．TP1 南壁土層（畦畔）

H12-14　土手内・中原 2 古墳群 10 地区

1．調査地全景（西から）

2．1Tr 全景（東から）

3．1Tr 土層

PL.27

H12-15　柏原遺跡 3 地区

1．1Tr　SB1 土層（東から）

2．2Tr 北端土層

3．4Tr 全景（南から）

4．4Tr　SB2

H12-20　東平遺跡 29 地区

1．1Tr 土層・ピット

2．1Tr 全景（西から）

PL.28

H12-18　沢東 A 遺跡隣接地（6 次調査地点）

1．1Tr 全景（東から）

2．1Tr 土層

3．2Tr 土層

H12-17　刈蔵地外（松岡）

1．TP1 土層

2．TP3 土層

3．TP4 全景（南から）

H12-19　富士例 1 古墳群 5 地区

1．1Tr 土層

平成 12 年度　遺物写真

PL.29

H12-1　沢東 A 遺跡 5 次調査地点

PL.30

H12-4　沖田遺跡 116 次調査地点

PL.31

H12-4　沖田遺跡 116 次調査地点

H12-9　伝法 1 古墳群　伊勢塚古墳 4 次

PL.32

H12-9　伝法 1 古墳群　伊勢塚古墳 4 次

PL.33 ～ 35

H12-6　中里 2 古墳群　天神塚古墳 2 次

PL.36

H12-18　沢東 A 遺跡 6 次調査地点

H12-13　沖田遺跡 118 次調査地点

PL.37

H12-11　舟久保遺跡 42 地区

H12-15　柏原遺跡 3 地区

資料報告　遺物写真

PL.38

中桁・中ノ坪遺跡 1 地区

東平遺跡 27 地区

行僧遺跡

第１章　平成 11 年度の調査

第１節　調査体制と調査件数

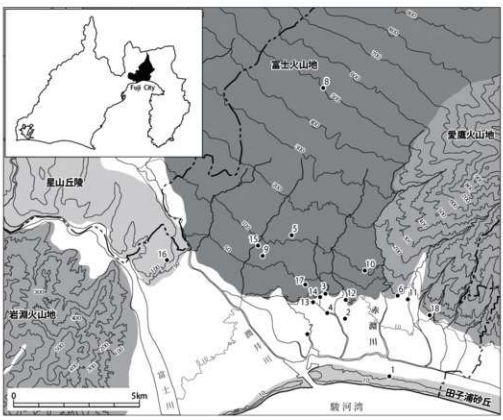
1. 調査体制

平成 11 年度の埋蔵文化財発掘調査体制は次のとおりである。

事務局	富士市教育委員会	教育長	太田　均
		教育次長	仲澤　健一
	文化振興課	課　長	小林　孝征
		課長補佐	殿岡　孝則
調査担当	文化振興課文化財係	係　長	渡井　義彦
		主　査	志村　博
		主　査	木ノ内義昭
		指導主事	田中　淳一
		主　事	前田　勝己
		主　事	仁藤　丈也
		臨時職員	吉田　博子
	中央図書館図書係	主　査	岩辺　均

2. 調査件数

平成 11 年度には、27 件の発掘調査を実施した。概要は第１表のとおりである。なお、網掛けのしてある調査については本報告書刊行済み、あるいは刊行予定であるため、本章での報告は省略する。



第１図　平成 11 年度　調査遺跡の位置と地形区分（1：150,000）

第１表　平成 11 年度発掘調査一覧

両収番号	遺跡名		調査区分	調査期間	所在地	原因・目的	対象(㎡)	調査(㎡)	調査結果概要			調査担当	備考
									時代	遺構	遺物		
1	三新山遺跡 J地区		試掘 確認	H11.4.5 ～4.8	松新田 190-1	宅地造成	781	80	古墳～平安	溝状遺構	土製品	志村・岩辺	
	宮添遺跡 E地区		本発掘	H10.10.20 ～H11.3.19 H11.4.19 ～11.22	増川 718　外	農地改良		1,532	旧石器 弥生～平安	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 溝状遺構 土坑	石器 弥生土器 土師器・須恵器 金属製品・ 古銭(延喜通宝)	山中・前田 吉田	報告書１
2	神田遺跡 隣接地（第 110 次調査地点）		試掘 確認	H11.5.17	比奈 698-1　外	店舗建設	9,377	60		無し	無し	木ノ内・ 仁藤	
3	神田遺跡 隣接地（第 111 次調査地点）		試掘 確認	H11.5.24 ～6.8	宇東川南町 539-7　外	宅地造成	3,066	186	平安 中世・近世	竪穴建物跡？ 住居跡？	須恵器片 陶器片・磁器片	木ノ内・ 仁藤	
4	神田遺跡 第 112 次調査地点		試掘 確認	H11.6.28 ～6.30	今泉 500-1　外	営業所建築	2,516	27		無し	無し	木ノ内・ 仁藤	
5	萩ノ原古墳群		試掘 確認	H11.7.1 ～7.9	大淵 48-1　外	宅地造成	3,813	35		無し	無し	木ノ内・ 仁藤	注１
6	冥倉遺跡 第１地区		試掘 確認	H11.7.12 ～7.15	中里 1638-1　外	製茶工場建設	953	136		無し	無し	木ノ内・ 仁藤	
	中古原遺跡 第５地区		試掘 確認	H11.8.3 ～9.25	瓜島 3817-2　外	事務所・ 倉庫建設	1,892	147	近世	溝状遺構 土坑状遺構	陶磁器・木製品 金属製品	木ノ内・ 仁藤	報告書２
	東平遺跡 第 27 地区	１次調査	試掘 確認	H11.8.10 ～8.27	伝法 2527-1　外	道路建設地 代替地造成	2,504	280	奈良・平安	竪穴建物跡 溝状遺構	無し	木ノ内・ 仁藤	報告書３ 注２
		２次調査	本発掘	H12.1.11 ～1.25				120	奈良・平安	竪穴建物跡	土師器・須恵器	木ノ内・ 仁藤・吉田	
7	中古原遺跡 第４地区		試掘 確認	H11.8.27	八代町 61	事務所・ 駐車場建設	2,076	30		無し	無し	木ノ内・ 仁藤	
	船津７古墳群 第５地区		試掘 確認	H11.9.2 ～9.30	船津 653-1　外	茶畑改植	5,295	1,025	古墳時期	古墳５基	須恵器	渡井・岩辺	注３
8	宮添A遺跡 第３地区		試掘 確認	H11.9.13 ～9.16	大淵 7385-2　外	市道改良	2,200	152		無し	無し	志村	
9	中原遺跡 第 20 地区		試掘 確認	H11.9.27 ～10.1	伝法 300-1　外	倉庫建設	7,137	260		無し	無し	木ノ内・ 仁藤	
	東平遺跡 第 28 地区		試掘 確認	H11.10.4 ～10.14	伝法 3024-1　外	店舗建設	5,447	690	古墳～奈良	竪穴建物跡	土師器・須恵器	木ノ内・ 田中	報告書４
			本調査	H12.2.3 ～5.17				1,008	古墳～奈良 奈良・平安	竪穴建物跡 掘立柱建物跡	土師器・須恵器	木ノ内・ 仁藤	
10	比奈１古墳群 第５地区－１次調査		試掘 確認	H11.10.14 ～10.26	原田 1980　外	農道整備	6,543	513		無し	無し	田中・岩辺 吉田	
	中桁遺跡 第１地区	１次調査	試掘 確認	H11.10.18 ～10.21	伝法 1211-1　外	倉庫建設	6,432	112	古墳～平安	竪穴建物跡	土師器・須恵器	木ノ内・ 仁藤	報告書５ 注４
		２次調査	試掘 確認	H11.12.1 ～12.3				124		無し	無し	木ノ内・ 仁藤	
11	神谷古墳群 隣接地（第６地区）		試掘 確認	H11.10.25	中里 1157-1	市立中学校 プール改築	523	90		無し	無し	田中・吉田	
12	神田遺跡 第 113 次調査地点		試掘 確認	H11.11.15 ～11.19	比奈 854-1　外	事務所新築	471	35		無し	無し	仁藤・吉田	
13	神田遺跡 第 114 次調査地点		試掘 確認	H11.12.14 ～12.24	今泉 3 丁目 146-1　外	宅地造成	21,826	144	古墳後期～ 奈良・平安	永田・畑畔跡	土師器片	木ノ内・ 田中・岩辺 仁藤・吉田	
14	神田遺跡 第 115 次調査地点		試掘 確認	H11.12.20 ～12.27	宇東川西町 11-9　外	大雷主福酒屋 改良	982	43		無し	無し	志村・岩辺	
15	中原遺跡 第 21 地区		試掘 確認	H12.2.24	伝法 565-5	給油所増設	623	162		無し	無し	志村・岩辺	
16	鎌倉古墳群 第２地区		試掘 確認	H12.2.28 ～3.3	宮本 1013-3　外	福祉施設建設	4,208	45		無し	無し	田中・岩辺	
17	魚久保遺跡 第 41 地区		試掘 確認	H12.3.14 ～3.22	依田橋 725-1　外	宅地造成	2,407	94		無し	無し	田中・岩辺	
18	宮添遺跡 F地区		試掘 確認	H11.8.18 ～8.20	増川 721　外	農地改良	750	142		無し	無し	前田	

注１　萩ノ原古墳群（萩ノ原第１～３号墳）登録抹消

２　帯裏土器「布自」出土

３　報告書別途刊行予定

４　平成 15 年本発掘調査実施，遺跡範囲変更（拡大）

報告書１『宮添遺跡（F）』(2011)

２『中古原遺跡　第５地区詳細確認調査報告書』（2002）

３『東平遺跡　第 16 地区（三日市廃寺跡）』第 27 地区発掘調査報告書』(2002)

４『東平遺跡　第 28 地区発掘調査報告書』(2001)

５『中桁遺跡』(2004)

第２節　発掘調査報告

1. 三新田遺跡　J地区

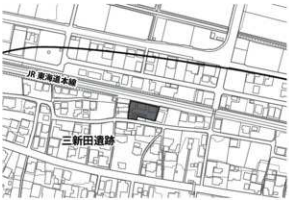
所在地　富士市桧新田 190-1

調査面積　80㎡（調査対象面積 781㎡）

調査期間　平成 11 年４月５日～４月８日

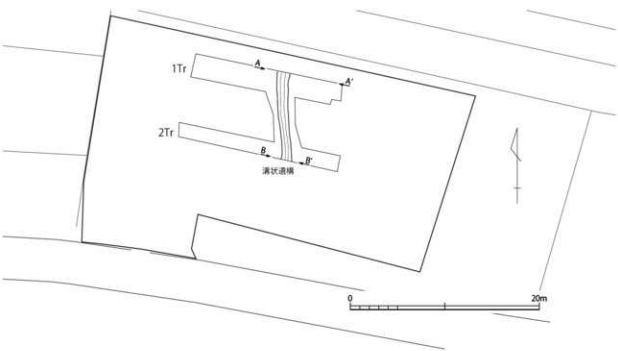
調査原因　宅地分譲

遺跡の概要　三新田遺跡は、海岸と浮島ヶ原低湿地の境に形成された田子の浦砂丘上の平坦面に立地する集落跡である。遺跡範囲は南北約 300m 東西約 1000m にひろがり、これまでの調査で、古墳時代前期と奈良～平安時代の集落跡が検出されている。本遺跡の東には、同じく砂丘上に立地する集落跡である柏原遺跡（H12-15 参照）、庚申塚古墳や山の神古墳を擁する東田子浦砂丘１古墳群が存在する。



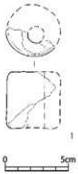
第２図　H11-1　調査地位置図（1：5,000）

調査の概要　調査地に東西方向のトレンチを２本設定し、重機により掘削後、遺構・遺物の検出につとめた。



Ⅰ　暗灰褐色粗砂層　大淵スコリアを含む。表土
Ⅱ　暗灰褐色粗砂層　大淵スコリアを含む。Ⅰ層よりやや黄色。
Ⅲ　黒褐色粗砂層　大淵スコリアを含む。
Ⅳ　茶褐色大淵スコリア層
Ⅴ　濁灰色粗砂層
Ⅵ　青灰色砂層
Ⅶ　黒褐色砂層
1　黒褐色砂層　大淵スコリアを多く含む。茶色味強い。溝状遺構覆土
2　黒褐色砂層　大淵スコリアを多く含む。溝状遺構覆土
3　暗灰褐色粗砂層　大淵スコリアを多く含む。溝状遺構覆土
4　暗灰褐色粗砂層　大淵スコリアを少量含む。溝状遺構覆土

第３図　H11-1　トレンチ配置図（1：400）・土層断面図（1：100）



第４図　H11-1　出土遺物実測図（1：3）

調査の結果

遺構　現地表下 1.0 mほどのⅣ層上面で溝状遺構を確認した。トレンチを拡張して可能な限り平面プランを検出し、約 9.2m 分を完掘した。大淵スコリア層を掘り込んでいることから、古墳時代後期以降に構築されたものと考えられる。

昭和56年度に発掘調査が実施されたB地区において、南北方向に延びる約14mの溝状遺構が検出されており、律令期の遺構であると考えられている[1]。位置関係等から、今回検出された溝状遺構も一連の遺構である可能性も考えられる。

遺物　土師器・土製品などが出土し、土錘１点を図示した。1 は高さ 4.5cm、推定幅 4.2cm、推定孔径 1.3cm を測り、古墳～平安時代に帰属するとみられる。

注

1）平林 将信・志村 博ほか『三新田遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会、1983 年、pp77-78。

第２表　H11-1　出土遺物観察表

番号	挿図	図版	トレンチ遺構	種別	細別	残存率(%)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	胎土	焼成	内面色	外面色
1	第４図	PL.10	不明	土製品	土錘	20	(4.1)	4.5	26.51	精緻、白色粒子	良好	10YR4/4　にぶい黄褐	2.5Y5/3　黄褐

※括弧内の数値　計測値：残存値

2. 沖田遺跡　隣接地（第 110 次調査地点）

所在地　富士市比奈 698-1　外

調査面積　60㎡（調査対象面積 21,826㎡）

調査期間　平成 11 年 5 月 17 日

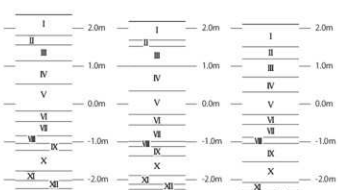
調査原因　店舗建設

遺跡の概要　調査地は沖田遺跡（H11-4 参照）の隣接地である。

調査の概要　テストピットを３ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構・遺物の検出につとめた。

調査の結果　近世～近現代の水田面（Ⅱ～Ⅳ層）を検出した。また、古墳時代後期初頭前後と考えられる層位（Ⅹ Ⅰ層）も現表土下 4 m前後で確認できたが、遺構・遺物は確認されなかった。

第５図　H11-2　調査地位置図（1：5,000）



Ⅰ　煙土
Ⅱ　暗緑褐色粘質土　植物遺体混入。現水田耕作土
Ⅲ　暗黒褐色粘質土　旧水田耕作土
Ⅳ　黒褐色粘質土　鉄分層可能かり。旧水田耕作土
Ⅴ　黒色粘質土　植物遺体多量に混入。湖沼堆積物沈殿層
Ⅵ　青灰色土　海性微砂・シルト層
Ⅶ　茶褐色粘質土　植物遺体多量に混入。湖沼堆積物沈殿層
Ⅷ　川砂利　滝川の氾濫に起因か。
Ⅸ　茶褐色粘質土　植物遺体多量に混入。湖沼堆積物沈殿層
Ⅹ　茶褐色土層　多量の微砂を含む腐植土。河川の氾濫に起因か。
Ⅺ　茶褐色粘質土　大淵スコリアを含む。
Ⅻ　青灰色土　海性微砂・シルト層
ⅩⅢ　茶褐色土層　多量の微砂を含む腐植土。河川の氾濫に起因か。
ⅩⅣ　青灰色土　海性微砂・シルト層

0　4m

第６図　H11-2　土層断面図（1：100）

3. 沖田遺跡　隣接地（第 111 次調査地点）

所在地　富士市宇東川東町 539-7　外

調査面積　186㎡（調査対象面積 3,066㎡）

調査期間　平成 11 年 5 月 24 日～ 6 月 8 日

調査原因　宅地造成

遺跡の概要　調査地は、沖田遺跡（H11-4 参照）と宇東川遺跡の間に位置したため、発掘調査を行った。また、発掘調査の結果を受けて平成 22 年度に包蔵地範囲を変更し、当該地は沖田遺跡の範囲に含まれることとなった[1]。

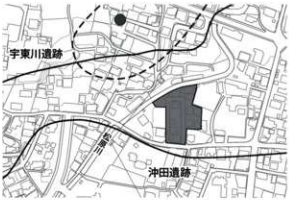
調査の概要　３本のトレンチと３ヶ所のテストピットを設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果

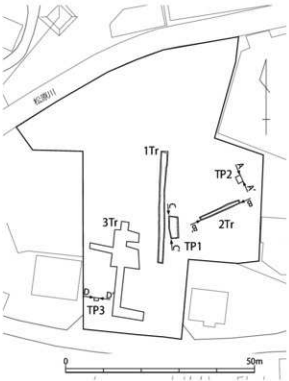
遺構　３トレンチの南西角で、中世のものとみられる竪穴建物跡 SB1 を確認した。床面直上の覆土には多量の焼土が含まれており,焼失建物の可能性が考えられる。また、３トレンチ北半に多量の石の集まり（SX1）が認められた。石の中に土器も混ざっていること、集石の範囲に直線的な区画が認められることなどから、人為的なものとも考えられるが、遺構の性格は不明である。

遺物　３トレンチの SB1 より、１～６が出土した。２～６は土師器の坏または小皿であり、いずれもロクロ成形で底部に糸切り痕を有するものとみられる。２のように口縁が外側に直線的に開くものと、口縁端部外面が肥厚するものがある。

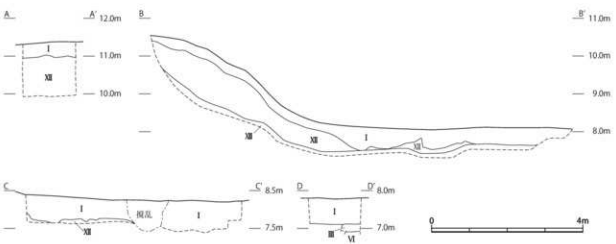
２トレンチ出土の７は模倣坏で、古墳時代後期～奈良時代頃に帰属する。８は灰釉陶器碗であり、三日月高台



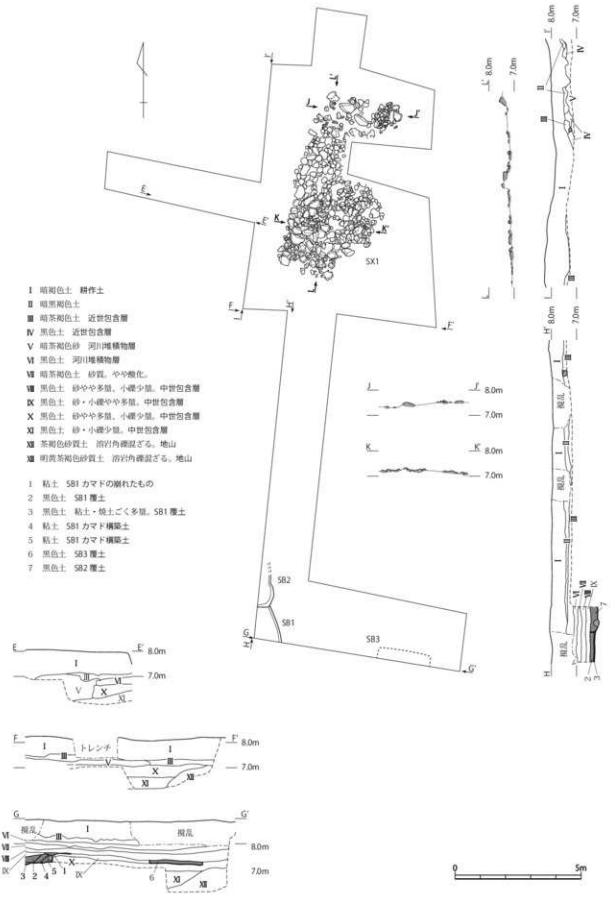
第７図　H11-3　調査地位置図（1：5,000）



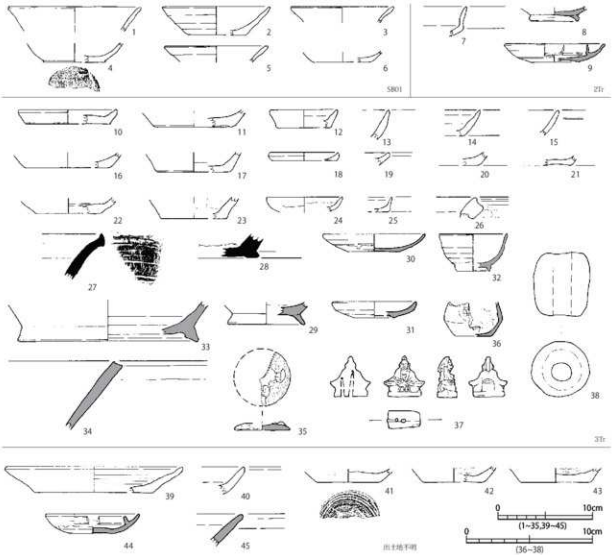
第８図　H11-3　トレンチ配置図（1：1,000）



第９図　H11-3　土層断面図（1：100）



第10図　H11-3　3トレンチ平面図・断面図（1：150）



第 11 図　H11-3　出土遺物実測図（1：4、1：3）

を有する。9 は瀬戸・美濃系陶器の油受け皿であり、受け部と口縁部の高さが等しく、受け部透は両側面を切断したのちに刺ぎ取って成形される。なお出土地点不明の 44 は受け部が低く、9 よりも新しい様相を呈する。前者が 18 世紀後葉、後者が 19 世紀前～中葉の年代が与えられる [2]。

3 トレンチの SX1 からは、若干の混入品もあるものの、多数の遺物が出土した（10 ～ 38）。なかでも主体となるのが土師器の坏や小皿と呼ぶ器種であり、復元径ではあるが大・中・小のさまざまな大きさのものが含まれる。共伴する灰釉陶器（29・33）や富士市・宮添遺跡 E 地区 SB21 出土資料 [3] との類似性を参考とすれば、古代末から中世初頭まで遡上するものも含みつつも、富士宮市・元富士大宮司館跡の堀 4 出土資料等 [4] も勘案すれば、15 世紀頃まで降るものも多いとみられる。一方で、30 ～ 32 の近世瀬戸・美濃系陶器や伏見人形（37）・柚子でんぽ（35）・布袋徳利（36）といった、いずれも 18 ～ 19 世紀代に帰属する遺物も一定量存在しており、当該地周辺が長時間にわたって利用されていたことが窺える。37 は伏見人形の天神で、型押成形（前後合わせ）で中実、底部の 2 ヵ所に型抜きの際の穿孔がある。側面にはバリ取り時に生じた平坦な削り痕が残り、外面には型離れをよくするための雲母が付着する [5]。

小結　沖田遺跡 111 次調査では古代から中世、近世にいたる幅広い年代の遺物が出土した。当該地の東側を中心とする一帯は、明治以降に富士市域でも有数の大地主・資産家に成長した小澤家の敷地部分にあたり、18 世紀以降の遺物については小澤家との関連が指摘できる可能性がある。工藤美奈子氏の研究によれば、近世以前の小澤家は名主や豪農のような有力階層ではなかったよ

うであるが[6]、中世～近世期にかけて、SX1 のような集石遺構周辺で多量の土師器の坏・小皿を用いた行為が執り行われていたことは注目される。

注

1）若林 美希「第３章　埋蔵文化財包蔵地の新規登録と範囲変更」『平成 21 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会、2011 年。

2）近世遺物の年代観については、堀内 秀樹氏より多大なるご教示を得た。

3）佐藤 祐樹ほか『宮沿遺跡Ⅳ』富士市教育委員会、2011 年、pp55-56。

4）馬飼野 行雄ほか『元富士大宮司館跡』富士宮市文化財調査報告書　第 24 集、富士宮市教育委員会、2000 年、p62。

5）原 祐一ほか『農学部生命科学総合研究棟地点発掘調査報告』『東京大学構内遺跡調査研究年報７　2007･2008 年度』東京大学埋蔵文化財調査室、2011 年、pp143-144。

6）工藤 美奈子『平成 14 年度受入資料『小澤家資料』について』『富士市立博物館　館報　平成 14 年度』、2003 年。

第３表　H11-3　出土遺物観察表（1）

番号	検図	図版	トレンチ・遺構	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
1	第 11 図	PL.10	3Tr.SB1・2(北)	土師器	小型甕？	(20)	14.0	(2.0)	－	精緻	良好	5YR5/3	にぶい赤褐	5YR5/3	にぶい赤褐	
2	第 11 図	PL.10	3Tr.SB1・2(北)	土師器	坏	35	11.4	3.0	－	精緻、黒色粒子	良好	7.5YR6/3	にぶい褐	5YR6/4	にぶい橙	底部糸切り痕
3	第 11 図	PL.10	3Tr.SB1・2(北)	土師器	小皿	(20)	11.0	(1.5)	－	精緻	やや軟質	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
4	第 11 図	PL.10	3Tr.SB1・2(北)	土師器	坏	(40)	－	(2.0)	6.6	精緻、黒色粒子少	良好	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙	底部糸切り痕
5	第 11 図	PL.10	3Tr.SB1・2(北)	土師器	小皿	(20)	11.0	(1.5)	－	精緻	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/3	にぶい褐	
6	第 11 図	PL.10	3Tr.SB1・2(北)	土師器	小皿	(20)	－	(1.0)	6.0	精緻、黒色粒子	良好	10YR6/4	にぶい黄褐	10YR7/4	にぶい黄橙	底部糸切り痕
7	第 11 図	PL.10	2Tr.	土師器	坏	－	－	(3.1)	－	精緻	良好	7.5YR7/6	橙	5YR7/6	橙	
8	第 11 図	PL.10	2Tr.	灰釉陶器	碗	(25)	－	(1.6)	5.0	精緻、白色粒子	良好	7.5YR5/2	灰褐	7.5YR5/1	褐灰	
9	第 11 図	PL.10	2Tr.	陶器	油受け皿	(25)	－	(1.9)	5.0	精緻、黒色粒子	良好	5YR4/6	赤褐	5YR5/6	明赤褐	瀬戸・美濃、鉄釉漬け
10	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	小皿	20	10.1	1.5	8.8	やや粗、黒色粒子・赤色粒子・雲母	軟質	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
11	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	小皿	(25)	－	(1.8)	8.0	精緻、白色粒子	軟質	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
12	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	小皿	20	7.0	1.9	5.6	精緻、赤色粒子	軟質	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
13	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	坏	－	－	(3.1)	－	精緻、赤色粒子	軟質	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
14	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	坏	－	－	2.7	－	精緻	軟質	5YR6/6	橙	7.5YR7/6	橙	
15	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	坏	－	－	(2.7)	－	精緻、赤色粒子	軟質	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
16	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	小皿	(20)	－	(1.6)	9.0	精緻、白色粒子・赤色粒子	軟質	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙	
17	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	坏	(20)	－	(2.0)	7.6	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	
18	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	小皿	－	－	1.4	6.8	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	底部糸切り痕
19	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	小皿	－	－	(1.3)	－	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
20	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	小皿	－	－	(1.4)	－	精緻、白色粒子	軟質	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
21	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	小皿	－	－	(1.0)	－	精緻、白色粒子	軟質	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR7/3	にぶい橙	底部糸切り痕
22	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	坏	(25)	－	(1.6)	7.0	精緻、赤色粒子・白色粒子	軟質	7.5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
23	第 11 図	PL.10	3Tr.SX1	土師器	小型甕？	(20)	－	(2.3)	7.0	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	5YR4/4	にぶい赤褐	5YR4/4	にぶい赤褐	底部木葉痕
24	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	小皿	(20)	8.0	(1.5)	－	精緻、白色粒子	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
25	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	小皿	－	－	(1.5)	－	精緻	軟質	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	
26	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	壺	－	－	(2.2)	－	粗、白色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	古墳前期
27	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	須恵器	甕	－	－	(4.8)	－	精緻、白色粒子	良好	2.5Y7/1	灰白	2.5Y6/1	黄灰	口縁部外面に刻み目
28	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	須恵器	壺	－	－	(2.6)	－	精緻、白色粒子	良好	10YR7/2	にぶい黄褐	10YR6/3	にぶい黄褐	
29	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	灰釉陶器	碗	(25)	－	(2.3)	8.0	精緻、白色粒子	良好	10YR4/2	灰褐	10YR4/2	灰褐	
30	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	陶器	小皿	25	10.6	1.9	5.2	精緻	良好	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/4	褐	瀬戸・美濃、鉄釉
31	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	陶器	小皿	20	8.8	1.7	－	精緻、白色粒子	良好	2.5YR5/6	黄褐	2.5YR5/6	黄褐	瀬戸・美濃、鉄釉
32	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	陶器	丸皿	30	7.0	4.0	－	精緻	良好	10YR7/3	にぶい黄褐	10YR7/3	にぶい黄褐	瀬戸・美濃
33	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	灰釉陶器	皿	(20)	－	(4.1)	18.8	精緻、白色粒子	良好	2.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	
34	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	土師器	鉢？	－	－	(7.2)	－	やや粗、白色粒子・8mm 程度の小石	良好	2.5YR5/4	にぶい赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	
35	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	陶器	鉢でんぼう器	(40)	－	(0.9)	6.0	精緻、白色粒子	良好	10YR7/8	黄橙	2.5Y6/8	明黄褐	
36	第 11 図	PL.11	3Tr.SX1	陶器	布袋形有	(25)	－	(2.7)	2.9	精緻	良好	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	円窓内に布袋（右下半身）、円窓内・布袋外側に白色釉？

第３表　H11-3　出土遺物観察表（2）

番号	挿図	図版	トレンチ・遺構	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色	外面色	その他
37	第11図	PL.11	3TrSX1	その他	伏見人形（天神）	100	（幅）3.4	（高）3.2	—	精緻、雲母微光る成分	良好	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	型押成形（前後合わせ）
38	第11図	PL.11	3TrSX1	土製品	土錘	100	（幅）4.4	（長）5.0	（孔径）1.5	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	軟質	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	重量 104.87g
39	第11図	PL.11	出土地点不明	土師器	皿	20	18.7	2.8	12.4	やや粗、黒色粒子・赤色粒子・雲母	やや軟質	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/9 橙	底部糸切り痕
40	第11図	PL.11	出土地点不明	土師器	小皿	—	—	（2.9）	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・雲母	良好	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	
41	第11図	PL.11	出土地点不明	土師器	坏	（4.5）	—	（1.4）	6.4	精緻、黒色粒子・赤色粒子少・雲母	良好	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	底部糸切り痕
42	第11図	PL.11	出土地点不明	土師器	小皿	（20）	—	（1.6）	6.4	精緻、黒色粒子・赤色粒子・雲母	軟質	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	
43	第11図	PL.11	出土地点不明	土師器	小皿	（20）	—	（1.5）	7.2	精緻、黒色粒子・赤色粒子小・雲母	良好	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	底部糸切り痕
44	第11図	PL.11	出土地点不明	陶器	油受け皿	100	9.8	2.1	4.6	精緻、黒色粒子・白色粒子各微少	良好	5YR4/6 赤褐	5YR4/6 赤褐	瀬戸・天遺、錆釉、体部に重ね焼き痕
45	第11図	PL.11	出土地点不明	陶器	鉢？	—	—	（3.3）	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	2.5YR5/2 暗灰黄	5YR3/3 暗赤褐	瀬戸・天遺

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値
※底径：高台のけくものについては、高台径に置き換える。

4. 沖田遺跡　第112次調査地点

所在地　富士市今泉500-1　外

調査面積　27㎡（調査対象面積2,516㎡）

調査期間　平成11年6月28日～6月30日

調査原因　営業所建築

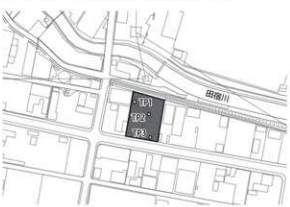
遺跡の概要　沖田遺跡は、浮島ヶ原低湿地の西端に位置し、包蔵地範囲は東西およそ2,400m、南北およそ1,650mを測る広大な遺跡である。昭和20～30年代に行われた開発工事に伴い、地表下3～7mから、弥生時代中期～奈良時代の遺物が発見されており、当該期の集落が埋没している可能性が想定されていた。近年の発掘調査では、古墳時代および奈良・平安時代の水田遺構が検出される事例が多い。奈良・平安時代の水田遺構には、大型の畦畔を伴うものもあり、古代富士郡域における条里区画を考える上で重要な資料となっている[1]。

調査の概要　テストピットを3ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構・遺物の検出につとめた。

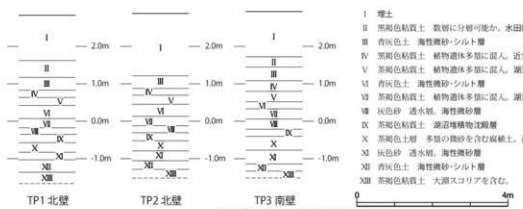
調査の結果　遺構・遺物は検出されなかった。

注

1）前田 勝己　編『沖田遺跡』富士市教育委員会、2000年。



第12図　H11-4　調査地位置図（1：5,000）



I　埋土
II　黒褐色粘質土　数層に分層可能か。水田耕作土
III　青灰色土　海性微砂・シルト層
IV　黒褐色粘質土　植物遺体多量に混入。近世水田耕作土か
V　茶褐色粘質土　植物遺体多量に混入。湖沼堆積物沈殿層
VI　青灰色土　海性微砂・シルト層
VII　茶褐色粘質土　植物遺体多量に混入。湖沼堆積物沈殿層
VIII　灰色砂　透水層。海性微砂層
IX　茶褐色粘質土　湖沼堆積物沈殿層
X　茶褐色土層　多量の微砂を含む腐植土。河川の氾濫に起因か。
XI　灰色砂　透水層。海性微砂層
XII　青灰色土　海性微砂・シルト層
XIII　茶褐色粘質土　大量スコリアを含む。

第13図　H11-4　土層断面図（1：100）

5. 荻ノ原古墳群

所在地　富士市大淵 48-1　外

調査面積　35㎡（調査対象面積 3,813㎡）

調査期間　平成 11 年７月１日～７月９日

調査原因　宅地分譲地造成

遺跡の概要　荻ノ原古墳群は、曽比奈溶岩流Ⅰに起因する緩斜面上の標高 102 ～ 116 mに、溶岩の自然石を用いて築かれたと考えられる３基の古墳（荻ノ原第１～３号墳）が登録されていたが、今回の調査結果を受けて登録抹消となった。

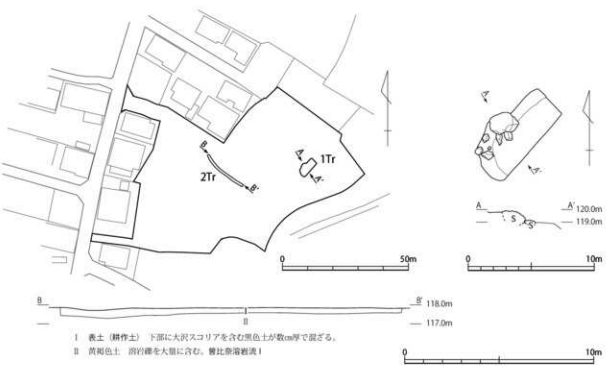
調査の概要　調査対象地には、石室とみられる溶岩礫の並びが確認されており、荻ノ原第１号墳として登録されている。トレンチを２ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　荻ノ原第１号墳の比定地に設定した第１トレンチでは、古墳の石室と考えられていた溶岩礫が地山（曽比奈溶岩流Ⅰ）の露頭であり、古墳ではないことが確認された。丘陵緩斜面縁辺に設定した第２トレンチにおいても、表土下は地山層（曽比奈溶岩流Ⅰ）となっており、遺構および遺物は確認されなかった。

第 14 図　H11-5　調査地位置図（1：5,000）

また、荻ノ原古墳群範囲内を再踏査した結果、第２号墳・第３号墳も第１号墳と同様に溶岩の自然露頭である可能性が極めて高いと考えられた。

この結果を受けて、荻ノ原古墳群（荻ノ原第１～３号墳）は登録抹消とした。



第 15 図　H11-5　トレンチ平面図（1：1,500）・断面図（1：300）

6. 児森遺跡　第１地区

所在地　富士市中里 1638-1　外

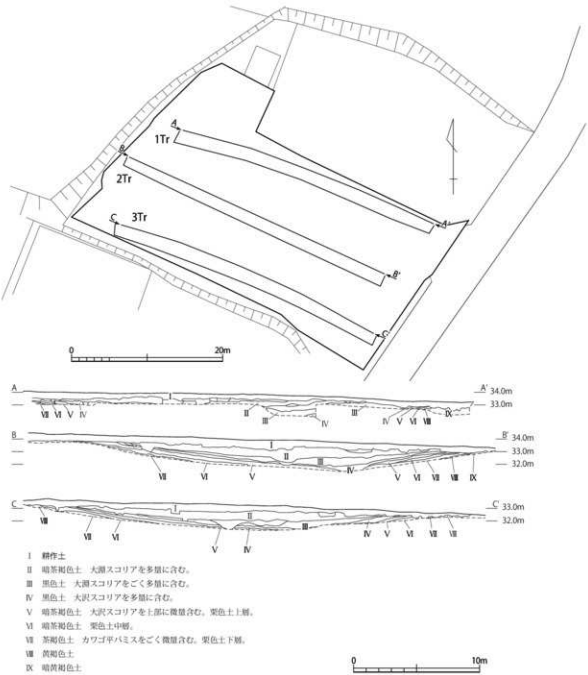
調査面積　136㎡（調査対象面積 953㎡）

調査期間　平成 11 年７月 12 日～７月 15 日

調査原因　製茶工場建設

遺跡の概要　児森遺跡は、赤淵川と須津川に挟まれた愛鷹山山麓の標高 30m 前後に立地する遺物散布地である。平成 13 年度に行われた第２地区の調査では竪穴建物跡１軒が検出されており[1]、古墳時代から平安時代の集落跡である可能性が推測される。

第 16 図　H11-6　調査地位置図（1：5,000）

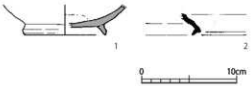


第 17 図　H11-6　トレンチ平面図（1：500）・断面図（1：300）

調査の概要　トレンチを 3 本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　地形に伴う緩やかな谷状の落ち込みが確認された。遺構は検出されなかった。

　遺物　トレンチは異なるが、いずれもⅡ層より出土した遺物を図示した。1 は灰釉陶器の碗、2 は返りの付く須恵器坏蓋または身である。



第 18 図　H11-6　出土遺物実測図（1：4）

注

1）服部 孝信・佐藤 祐樹「児森遺跡」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市埋蔵文化財調査報告　第 51 集、富士市教育委員会、2012 年。

第 4 表　H11-6　出土遺物観察表

番号	陣図	図版	トレンチ	種別	器別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色	外面色	その他
1	第 18 図	PL.10	2Tr	灰釉陶器	碗	(30)	–	(2.8)	8.0	精緻	良好	7.5Y7/2 灰白	7.5YR7/1 明褐灰	
2	第 18 図	PL.10	3Tr	須恵器	蓋	–	–	(1.9)	–	精緻	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	身の可能性あり。

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値
※底径：高台の付くものについては、高台径に置き換える。

7. 中吉原宿遺跡　第 4 地区

所在地　富士市八代町 61

調査面積　30㎡（調査対象面積 2,076㎡）

調査期間　平成 11 年 8 月 27 日

調査原因　事務所・駐車場建設工事

遺跡の概要　中吉原宿遺跡は江戸時代に東海道の宿駅・吉原宿が営まれた場所である。吉原宿跡として、元吉原宿遺跡、中吉原宿遺跡、新吉原宿遺跡の 3 ヶ所が残っているが、これは高波や大風などの自然災害により、吉原宿が二度の所替をしていることによる。史料によれば、中吉原宿遺跡の場所に吉原宿が営まれたのは 1640 年頃から 1680 年のわずか 40 年間である。平成 11 年度に行われた第 5 地区の調査で 17 世紀中葉の陶磁器が出土しており、記述を裏付ける成果が得られている[1)]。

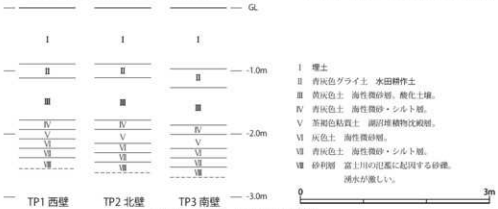
調査の概要　テストピットを 3 ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構や遺物は確認されなかった。

注

1）木ノ内義明　編『中吉原宿遺跡　中吉原宿遺跡第 5 地区詳細確認調査報告書』富士市教育委員会、2002 年。

第 19 図　H11-7　調査地位置図（1：5,000）



第 20 図　H11-7　土層断面図（1：60）

8. 岩倉Ａ遺跡　第３地区

所在地　富士市大淵 7385-2　外

調査面積　152㎡（調査対象面積 2,200㎡）

調査期間　平成 11 年９月 13 日～９月 16 日

調査原因　道路改良工事

遺跡の概要　岩倉Ａ遺跡は、富士山南麓の尾根上、標高 500m 前後の高地に位置する弥生時代の遺物散布地である。過去に壺形土器が採集されており、弥生時代後期前半の時期が与えられている[1]。

周辺の遺跡では、本遺跡の北に位置する岩倉Ｂ遺跡で、同じく市道富士本線改良工事に伴って実施された平成９年度の調査により、平安時代の建物跡２軒が検出されている[2]。本遺跡の西、不動沢を挟んで同一標高上に立地する大坂遺跡は、本遺跡と同様、弥生時代の遺物散布地であり、かつて弥生時代中期の土器片が採集された[3]というが、これまでに調査事例はなく詳細は不明である。

調査の概要　トレンチを４本設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　４トレンチにおいて９基のピットを検出したが、その配置に規則性が認められず、遺物も出土しなかったため、近世以降のピットと判断した。その他のトレンチにおいても、遺構および遺物は確認されなかった。

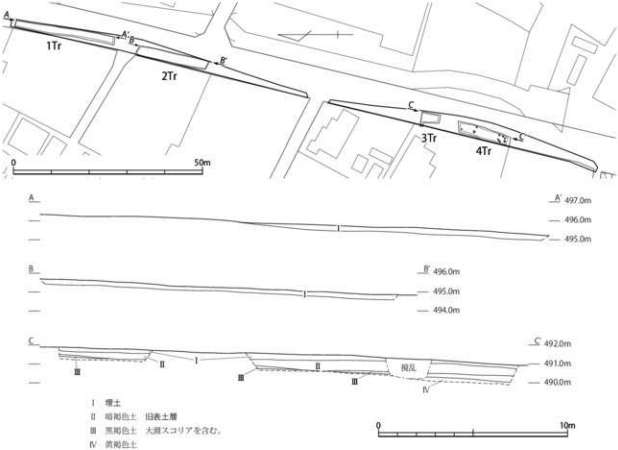
第 21 図　H11-8　調査地位置図（1：5,000）

注

1）佐藤 祐樹「第２章第１節　富士市岩倉Ａ遺跡出土の弥生土器」「平成 21 年度富士市内遺跡発掘調査報告書」富士市教育委員会、2011 年。

2）服部 孝信・佐藤 祐樹「岩倉Ｂ遺跡」「富士市埋蔵文化財発掘調査報告書」富士市埋蔵文化財調査報告　第 51 集、富士市教育委員会、2012 年。

3）中野 国雄「第一章第二節（1）大坂遺跡と沖田遺跡」「吉原市史」上巻、1972 年。



第 22 図　H11-8　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：200）

9. 中原遺跡　第 20 地区

所在地　富士市伝法 300-1　外

調査面積　260㎡（調査対象面積 7,137㎡）

調査期間　平成 11 年９月 27 日～ 10 月１日

調査原因　倉庫建設工事

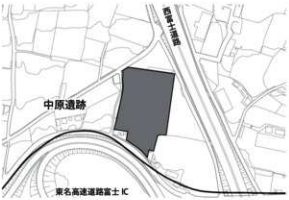
遺跡の概要　中原遺跡は、富士山南麓に広がる大淵扇状地上の標高 60 ～ 80m に位置する遺物散布地であり、過去の調査では中世・近世の円形土坑や溝状遺構、縄文土器・土師器・須恵器等の遺物が出土している。なお、当該地を含む遺跡の南部分については、平成 22 年の範囲変更によって除外されている [1]。

調査の概要　４本のトレンチを設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

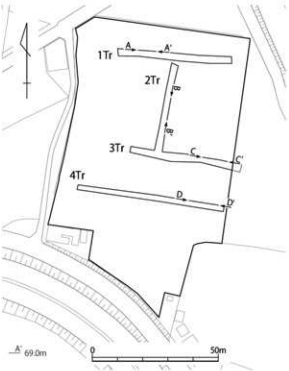
調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

注

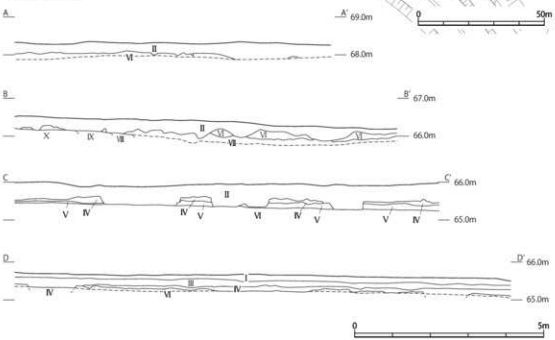
1）若林 美希「第３章　埋蔵文化財包蔵地の新規登録と範囲変更」「平成 21 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書」富士市教育委員会、2011 年。



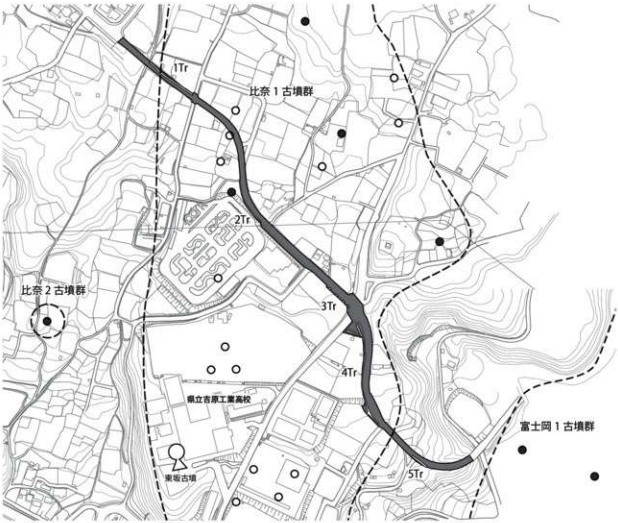
第 23 図　H11-9　調査地位置図（1：5,000）



Ⅰ　耀土
Ⅱ　黒褐色土　耕作土
Ⅲ　黒褐色土　転圧を受けている。耕作土
Ⅳ　黒色土　旧耕作土
Ⅴ　暗茶褐色土　大淵スコリア・溶岩粒を多量に含む。
Ⅵ　淡茶褐色土　溶岩角礫・溶岩粒を部分的に含む。大淵扇状地堆積物層
Ⅶ　暗茶褐色土　大沢スコリアを多量に含む。
Ⅷ　栗色類似土
Ⅸ　黄褐色ローム質土
Ⅹ　箱比奈溶岩流Ⅰ



第 24 図　H11-9　トレンチ平面図（1：1,500）・土層断面図（1：100）



第 25 図　H11-10　調査地位置図（1：5,000）

10. 比奈 1 古墳群　第 5 地区 1 次調査

所在地　富士市原田 1980　外

調査面積　513㎡（調査対象面積 6.543㎡）

調査期間　平成 11 年 10 月 14 日～ 10 月 26 日

調査原因　農道整備工事

遺跡の概要　比奈 1 古墳群は、赤潤川の西岸、富士山南麓に広がる丘陵上に築かれた 29 基の古墳で構成される古墳群である。

今回の調査区に含まれる比奈 G-第 78 号墳の登録地点については、平成 13 年度に試掘調査を行い（5 地区 2 次調査）、古墳が存在しないことを確認した [1]。

調査の概要　トレンチを 5 ヶ所設定して、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構は確認されなかった。

遺物　1 は縄文の深鉢形土器とみられる口縁部片であり、晩期安行式と考えられる。2 は土師器高坏の脚部である。

赤潤川西岸の富士岡 1 古墳群では、近年の調査によって新たに縄文時代や古墳時代前期の集落の存在が確認されており [2]、当該地周辺にも同時期の集落が及んでいた可能性がある。

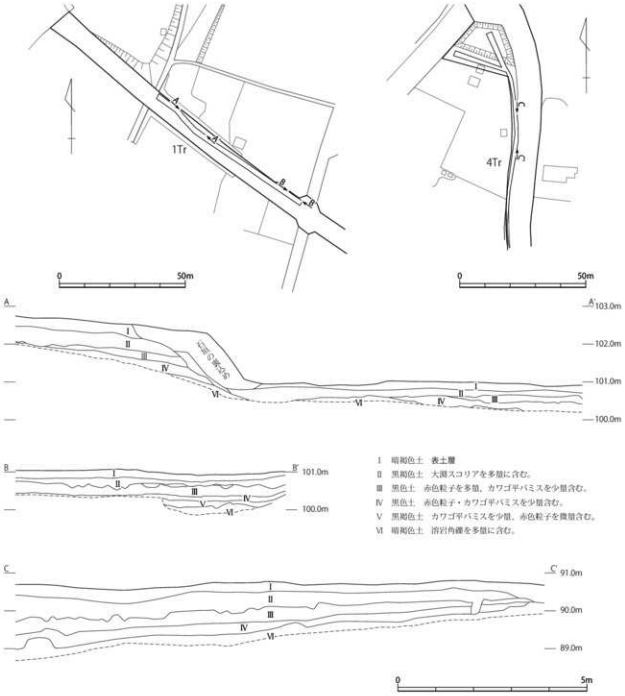
注

1）藤村 翔・若林 美希『平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法国久保古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会、2011 年。

2）財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所編『年報 26（平成 21 年度事業概要）』、2011 年。

また富士市教育委員会によって 2011 年に調査した地点（第 12 地区）においても、縄文時代の遺構がまとまって検出されている。

第 26 図　H11-10　出土遺物実測図（1：4）



第 27 図　H11-10　トレンチ平面図（1：1,500）・土層断面図（1：100）

第 5 表　H11-10　出土遺物観察表

番号	挿図	図版	トレンチ	種別	細別	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	内面色	外面色	その他
1	第 26 図	PL.10	1Tr	縄文土器	深鉢？	–	–	(6.7)	–	やや粗、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	晩期安行式
2	第 26 図	PL.10	不明	土師器	高杯	–	–	(6.0)	–	中や粗、白色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値

11．包蔵地外　神谷古墳群隣接地

（神谷古墳群　第６地区）

所在地　富士市中里 1157-1

調査面積　90㎡（調査対象面積 523㎡）

調査期間　平成 11 年 10 月 25 日

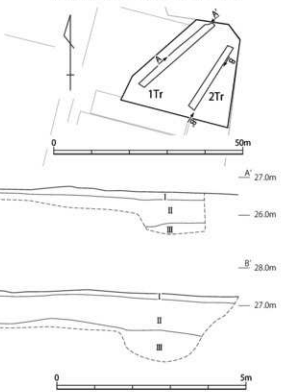
調査原因　市立須津中学校プール改築工事

遺跡の概要　事業対象地は埋蔵文化財包蔵地範囲外であるが、対象地の北方には神谷古墳群および中里４古墳群として 200 基以上の後期古墳が登録されているため、試掘調査を行った。

調査の概要　トレンチを２本設定して、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

第 28 図　H11-11　調査地位置図（1：5,000）



第 29 図　H11-11　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

12．沖田遺跡　第 113 次調査地点

所在地　富士市比奈 854-1　外

調査面積　35㎡（調査対象面積 471㎡）

調査期間　平成 11 年 11 月 15 日～ 11 月 19 日

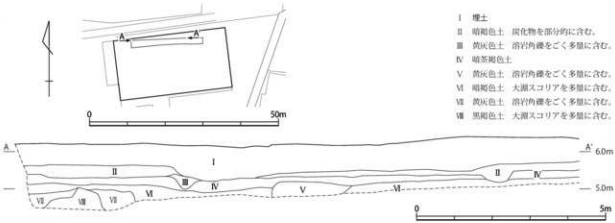
調査原因　事務所新築工事

遺跡の概要　H11-4 参照（p9）。

調査の概要　トレンチを１本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

第 30 図　H11-12　調査地位置図（1：5,000）



第 31 図　H11-12　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

13. 沖田遺跡　第 114 次調査地点

所在地　富士市今泉 3 丁目 146-1　外

調査面積　144㎡（調査対象面積 21,826㎡）

調査期間　平成 11 年 12 月 14 日～ 12 月 24 日

調査原因　宅地造成工事

遺跡の概要　H11-4 参照（p9）。

調査の概要　調査対象地では、平成 10 年度に西側半分に対して試掘・確認調査を行い、TP9 で条里制の大畦畔と水田跡とみられる遺構が検出されている。

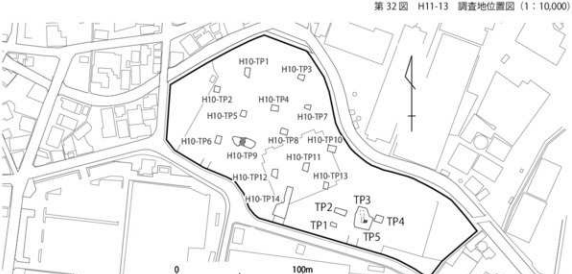
テストピットを 5 ヶ所設定し、重機により掘削後、土層堆積状況の観察と、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果

遺構　テストピット 3 と 5（後に連結）において、現地表下 3.5 m～ 4.0 mほどで、古墳時代後期～奈良・平安時代のものとみられる水田面および南北方向の畦畔跡を確認した。畦畔の上層（Ⅰ層）には承和 5 年（838 年）噴火とされる神津島天上山テフラを含んでおり[1]、畦畔の年代下限を得ることができる。

遺物　大湖スコリアを含む水田面～畦畔付近において少量の土師器片が出土し、1 点を図示した。1 は土師器甕の底部であるが、胎土・色調から奈良～平安時代に帰

第 32 図　H11-13　調査地位置図（1：10,000）

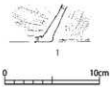


第 33 図　H11-13　テストピット平面図（1：3,000）

属すると考えられる。

注

1）杉原 重夫ほか「伊豆諸島・神津島天上山と新島向山の噴火活動」「地学雑誌」110（1）、2001年。

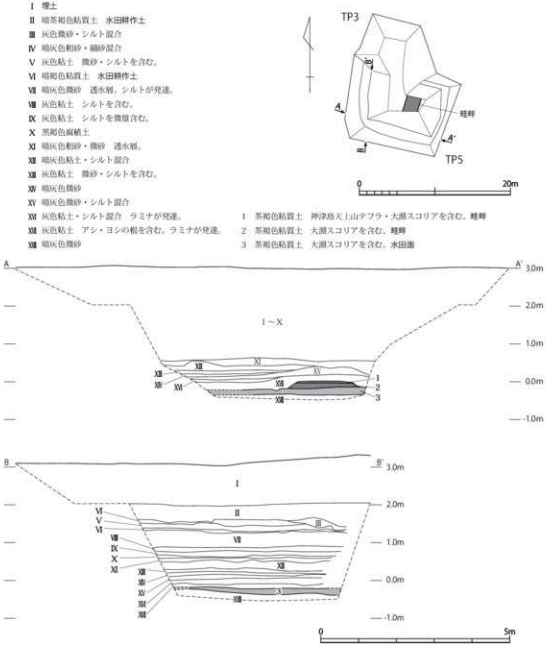


第 34 図　H11-13　出土遺物実測図（1：4）

第 6 表　H11-13　出土遺物観察表

番号	挿図	図版	トレンチ	種別	細別	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	内面色	外面色	その他
1	第 34 図	PL.10	不明	土師器	甕	—	—	(3.9)	—	粗、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	底部木葉痕？

※括弧内の数値　計測値：残存値



第 35 図　H11-13　テストピット 3・5 平面図（1：500）・土層断面図（1：100）

14. 沖田遺跡　第 115 次調査地点

所在地　富士市宇東川西町 11-9　外

調査面積　43㎡（調査対象面積 982㎡）

調査期間　平成 11 年 12 月 20 日～ 12 月 21 日

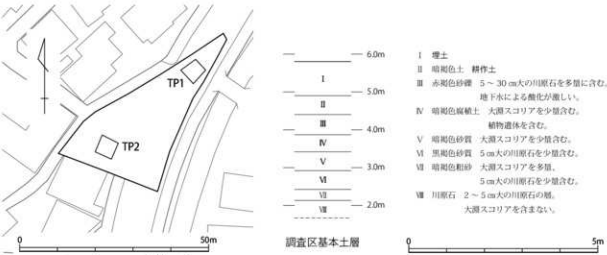
調査原因　左富士臨港線改良工事

遺跡の概要　H11-4 参照（p9）。

調査の概要　テストピットを２ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　現地表下およそ 4m まで掘削したが、遺構および遺物は確認されなかった。

第 36 図　H11-14　調査地位置図（1：5,000）



第 37 図　H11-14　テストピット平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

15. 中原遺跡　第 21 地区

所在地　富士市伝法 565-5

調査面積　162㎡（調査対象面積 623㎡）

調査期間　平成 12 年 2 月 24 日

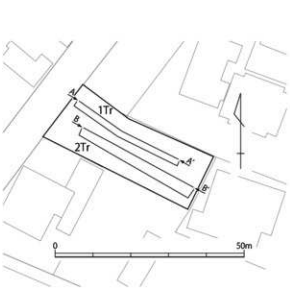
調査原因　給油所増設工事

遺跡の概要　H11-9 参照（p14）。

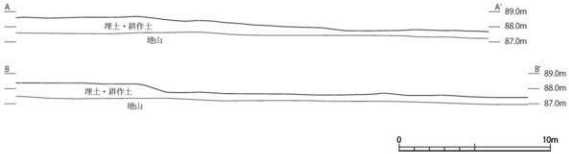
調査の概要　トレンチを２本設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　埋土・耕作土の直下で地山を検出した。遺構および遺物は確認されなかった。

第 38 図　H11-15　調査地位置図（1：5,000）



第 39 図　H11-15　トレンチ平面図（1：1,000）



第 40 図　H11-15　土層断面図（1：250）

16. 鎌研古墳群　第２地区

所在地　富士市岩本 1013-3　外

調査面積　45㎡（調査対象面積 4,208㎡）

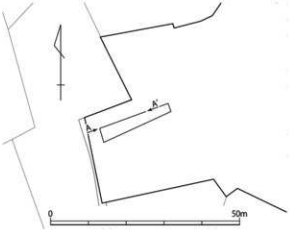
調査期間　平成 12 年２月 28 日～３月３日

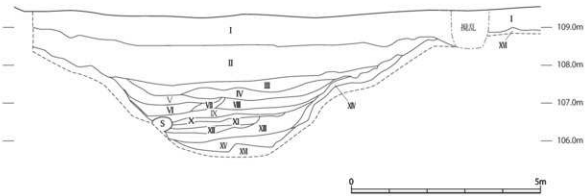
調査原因　福祉施設建設工事

遺跡の概要　鎌研古墳群は、富士川と潤井川の間に位置する星山丘陵の先端部に占地する４基の古墳で構成される。昭和 56 年に発掘調査された念信園古墳（鎌研第４号墳）は、小丘陵の頂部、標高 68m に築かれた古墳時代後期～終末期の円墳である。墳丘および石室は開墾

第 41 図　H11-16　調査地位置図（1：5,000）

Ⅰ　暗褐色土　耕作土
Ⅱ　黒褐色土　大淵スコリアを少量含む。
Ⅲ　暗褐色土　大淵スコリアをやや多量含む。
Ⅳ　暗褐色土　大淵スコリアをやや多量、大沢スコリアを少量含む。
Ⅴ　黒色土
Ⅵ　暗黄褐色土　ロームブロックと少量の小石を含む。
Ⅶ　暗黄褐色土　ロームブロックを含む。
Ⅷ　暗褐色土　大淵スコリアを少量含む。
Ⅸ　黒色土
Ⅹ　暗褐色土　ロームブロック・砂を含む。
Ⅺ　黒褐色土
Ⅻ　黒褐色土　ロームブロックを含む。
ⅩⅢ　黒褐色土　大淵スコリアを少量含む。
ⅩⅣ　暗褐色土　ロームブロック・砂を含む。
ⅩⅤ　暗褐色ローム土
ⅩⅥ　黄褐色土





第 42 図　H11-16　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

等により破壊されていたが、周溝と石室掘方を検出し、耳環や須恵器直口壺などが出土している[1]。また、念信園古墳を含む本古墳群南端は、縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物散布地である念信園遺跡と包蔵地範囲が重複している。

調査の概要　鎌研古墳群の包蔵地範囲に含まれる調査地の西端部分にトレンチを 1 本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　トレンチ内で、幅 8m、深さ 2m ほどの地山の落ち込みを検出したが、遺構や遺物は確認されなかった。

注

1）平林 将信・志村 博「念信園古墳緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会、1983 年。

17. 舟久保遺跡　第 41 地区

所在地　富士市依田橋 725-1　外

調査面積　94㎡（調査対象面積 2,407㎡）

調査期間　平成 12 年 3 月 14 日～3 月 22 日

調査原因　宅地造成工事

遺跡の概要　舟久保遺跡は、富士山南麓に広がる低丘陵上に立地する奈良・平安時代の集落跡である。これまでの発掘調査で、竪穴建物跡、掘立柱建物跡が多数検出されているほか、昭和 36 年に行われた市立吉原第二中学校校庭整地工事の際に、「倉」と墨書された土師器坏をはじめ、1000 点余りの遺物が出土している[1]。遺構・遺物の分布状況から、平成 22 年度の包蔵地範囲変更の際、当該地を含む北半を包蔵地範囲外とした[2]。

調査の概要　トレンチを 3 ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

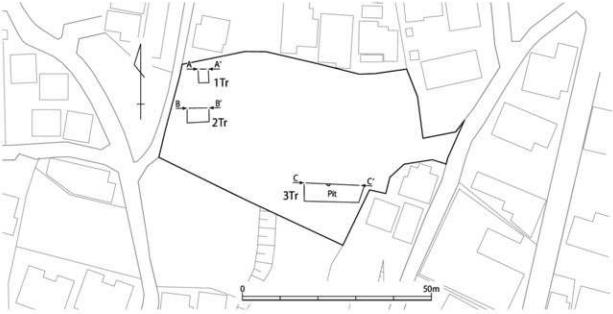
調査の結果　3 トレンチでピットを 1 基検出したが、遺物は出土せず近世以降のピットと判断した。その他に遺構や遺物は確認されなかった。

注

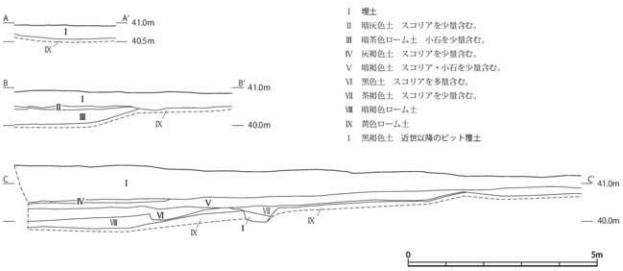
1）中野 国雄ほか「吉原発見の土師器と竪穴」『駿豆考古』第 4 号、1960 年。

2）若林 美希「第 3 章　埋蔵文化財包蔵地の新規登録と範囲変更」『平成 21 年度　富士市内遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会、2011 年。

第 43 図　H11-17　調査地位置図（1：5,000）



第 44 図　H11-17　トレンチ平面図（1：1,000）



第 45 図　H11-17　土層断面図（1：100）

18. 宮添遺跡　F地区

所在地　富士市増川721　外

調査面積　142㎡（調査対象面積 750㎡）

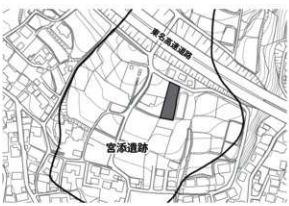
調査期間　平成 11 年 8 月 18 日～8 月 20 日

調査原因　農地改良

遺跡の概要　宮添遺跡は愛鷹山南麓に延びる丘陵の南端部、標高 35m 程に立地する集落跡であり、弥生時代後期から平安時代の竪穴建物跡や方形周溝墓など、多くの遺構が調査されている[1]。本遺跡から北西に 350m 程の場所には 90m 級の前方後方墳である浅間古墳が立地している。

調査の概要　トレンチを２本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

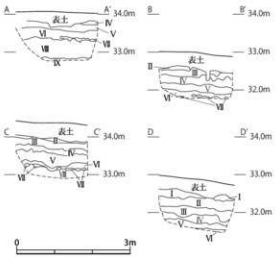
調査の結果　調査地には、ニセローム層より上層は残存しておらず、遺構や遺物は確認されなかった。



第 46 図　H11-18　調査地位置図（1：5,000）

注

1）佐藤祐樹編『宮添遺跡Ⅰ』富士市教育委員会、2008 年。
佐野五十三『宮添遺跡Ⅱ』富士市教育委員会、2009 年。
佐藤祐樹『宮添遺跡Ⅲ』富士市教育委員会、2010 年。
佐藤祐樹編『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会、2011 年。
佐藤祐樹編『宮添遺跡Ⅴ』富士市教育委員会、2012 年。



Ⅰ　褐色土（10YR4/6）　NL
　　橙色スコリア粒少量含む。粘性やや弱。
Ⅱ　黒褐色土（10YR2/2）　BBⅢ
　　橙色スコリア粒微量含む。しまりごく強。
Ⅲ　暗褐色土（10YR3/4）　SCⅢ
　　橙色スコリア粒ごく多量含む。しまりごく強。
Ⅳ　褐色土（10YR4/6）　SCⅢ
　　橙色スコリア粒ごく多量、暗褐色スコリア多量含む。しまりごく強。
Ⅴ　褐色土（10YR4/6）　SCⅢ
　　暗褐色スコリアごく多量、橙色スコリア粒多量含む。しまり強。粘性やや弱。
Ⅵ　褐色土（7.5YR4/6）　SCⅢ
　　橙色スコリア粒多量、暗褐色スコリア少量含む。しまり強。粘性やや強。
Ⅶ　黄褐色土（2.5Y5/6）　SCⅢ
　　黄褐色・橙色スコリアがブロック状に固まる。しまりごく強。粘性弱。
Ⅷ　黒褐色土（10YR2/2）　BBⅣ～Ⅶ
　　橙色スコリア粒多量含む。しまり強。粘性強。
Ⅸ　黄褐色土（10YR5/6）　中部ローム
　　橙色スコリア粒多量含む。しまり強。粘性やや強。

第 47 図　H11-18　トレンチ平面図（1：500）・土層断面図（1：100）

第２章　平成 12 年度の調査

第１節　調査体制と調査件数

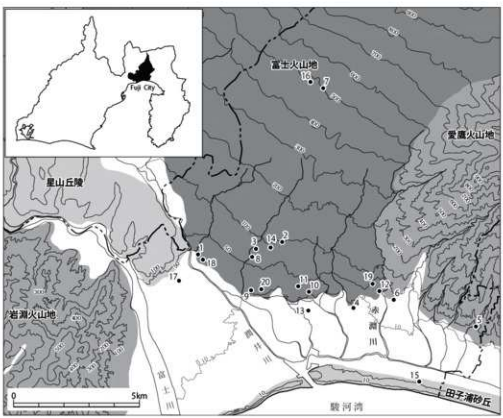
1. 調査体制

平成 12 年度の埋蔵文化財発掘調査体制は次のとおりである。

事務局	富士市教育委員会	教育長	太田　均
		教育次長	仲澤　健一
	文化振興課	課　長	小林　孝征
調査担当	文化振興課文化財担当	主　幹	渡井　義彦
		主　査	木ノ内義昭
		指導主事	田中　淳一
		上席主事	前田　勝己
		上席主事	下野　幹太
		上席主事	荻野　裕子
		臨時職員	吉田　博子
	生涯学習課青少年教育担当	主　査	岩辺　均

2. 調査件数

平成 12 年度には、28 件の発掘調査を実施した。概要は第７表のとおりである。なお、網掛けのしてある調査については本報告書刊行済みであるため、本章での報告は省略する。



第 48 図　平成 12 年度　調査遺跡の位置と地形区分（1：150,000）

第７表　平成 12 年度発掘調査一覧

所収番号	遺跡名		調査区分	調査期間	所在地	原因・目的	対象(㎡)	調査(㎡)	調査結果概要 時代	遺構	遺物	調査担当	備考
1	沢東Ａ遺跡 第５次調査地点		試掘確認	H12.4.12 ～4.21	久沢 174-1	工場建設	3,498	513	古墳～平安	溝状遺構	土師器・須恵器	渡井・田中 岩道・下野	
2	石坂３古墳群 第１地区		試掘確認	H12.4.24 ～4.28	石坂 606-1　外	マンション建設	2,133	300		無し	無し	渡井・田中 岩道・下野	
3	中原遺跡 第 22 地区		試掘確認	H12.5.15 ～5.18	伝法 547-2　外	工場建設	1,322	224		無し	無し	渡井・田中 岩道・下野	
4	沖田遺跡 第 116 次調査地点		試掘確認	H12.5.22 ～5.25	比奈 938-1　外	古墳墓場等造成	9,645	300	弥生～平安・近世	焼土帯	弥生土器・土師器・須恵器	渡井・田中 岩道・下野	
5	船津７古墳群 第６地区		試掘確認	H12.5.24 ～5.26	船津 614-2	第二東名仮設事務所建設	1,000	95		無し	無し	前田・吉田	
	宇東川遺跡 L 地区	**第１期**	**試掘確認**	**H12.6.15 ～6.22**	**今泉４丁目 1680-1**	**宅地造成**	**2,250**	**422**	**縄文**	**竪穴建物跡**	**縄文土器・石器**	**渡井・田中 岩道・下野**	**報告書１**
			本発掘	**H12.7.3 ～7.24**				**700**	**奈良・平安**		**土師器・須恵器 灰釉陶器**	**渡井・田中 下野・吉田**	
		第２期	**試掘確認**	**H12.7.24 ～7.31**				**126**				**渡井・田中 下野・吉田**	
			本発掘	**H12.8.3 ～8.21**				**700**	**中近世**		**古銭(元豊通宝)**	**渡井・田中 下野・吉田**	
6	中里２古墳群 天神塚古墳　２次調査		試掘確認	H12.6.25 ～8.4 H12.11.20 ～11.30	中里 1466	神社新築	250	53	古墳・近世	古墳 神社	土師器・須恵器 陶器・ 古銭(寛永通宝)	前田・岩道	
7	岩倉Ａ遺跡 第４地区		試掘確認	H12.8.28 ～8.29	大淵 7608　地先	市道改良	1,700	28		無し	無し	木ノ内・田中・下野	
8	中原遺跡 第 23 地区		試掘確認	H12.9.5 ～9.7	伝法 443-1　外	倉庫・事務所建設	3,046	188		無し	無し	岩道・吉田	
9	伝法１古墳群 伊勢寺塚古墳　４次調査		試掘確認	H12.9.6 ～9.8	伝法 3102-1　外	麻雀改築	240	50	古墳	無し	土製品(埴輪片)	木ノ内・田中・下野	
10	善得寺廃寺跡 第２地区		試掘確認	H12.9.25 ～9.27	今泉５丁目 15-6	公園整備	500	81		無し	無し	岩道・吉田	
11	舟久保遺跡 第 42 地区		試掘確認	H12.10.4 ～10.12	今泉 1982　外	宅地造成	2,496	380	奈良・平安	竪穴建物跡	土師器・須恵器	田中・前田 下野	
12	富士岡１古墳群 隣接地		試掘確認	H12.10.23 ～10.27	富士岡 1527-1　外	宅地造成	2,457	72		無し	無し	岩道・吉田	
13	沖田遺跡 第 118 次調査地点		試掘確認	H12.12.4 ～12.5	今泉３丁目 158-1　外	店舗建設	2,269	64	古墳 奈良・平安	大規模	土師器	田中・前田 下野	
14	土手内・中原２古墳群 第 10 地区		試掘確認	H12.12.11 ～12.13	伝法 46-1	公園整備	1,300	248		無し	無し	岩道・吉田	
15	柏原遺跡 第３地区		試掘確認	H12.12.18 ～12.27	西柏原新田 113　外	区画整備	2,759	75	古墳～平安	竪穴建物跡	土師器・須恵器	渡井・田中 下野	
16	大坂遺跡 第１地区	１次調査	試掘確認	H12.12.19	大淵 8553-1　外	道路改良	78	20		無し	無し	岩道・吉田	
		２次調査	試掘確認	H13.1.22	大淵 8555-4　外		383	43		無し	無し	岩道・吉田	
17	弥蔵地外		試掘確認	H13.1.24	松岡 10-1　外	道路建設	3,600	56		無し	無し	田中・下野 吉田	
18	沢東Ａ遺跡 隣接地（第６次調査地点）		試掘確認	H13.2.8	久沢 89-6	宅地造成	42	19	古墳	無し	土師器片	岩道・下野 吉田	
	東平遺跡 第 30 地区		**試掘確認**	**H13.2.19 ～2.23**	**伝法 2828-1　外**	**宅地造成**	**1,397**	**382**	**古墳～律令**	**竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑**	**土師器・須恵器 瓦塔石**	**岩道・下野 吉田 岩道・下野 吉田**	**報告書２**
			本発掘	**H13.3.7 ～3.19**				**275**					
19	富士岡１古墳群 第５地区		試掘確認	H13.2.27	比奈 2737-8　地先	消防水利整備	60	3		無し	無し	田中	
20	東平遺跡 第 29 地区		試掘確認	H13.2.27	伝法 2879-3　地先	消防水利整備	56	13		ピット (時期不明)	無し	前田	
	東平遺跡 第 31 地区		**試掘確認**	**H13.3.7 ～3.13**	**伝法 2829-1　外**	**宅地造成**	**684**	**360**	**古墳～律令**	**竪穴建物跡 土坑**	**無し**	**田中**	**報告書２**

報告書１「富士市埋蔵文化財発掘調査報告書第６集　宇東川遺跡Ｌ地区」(2001)

２「東平遺跡発掘調査報告書」「第４地区（西平第１号墳）第 23 地区（西平第２～５号墳）第 24 地区（西平第６号墳）第 30 地区第 31 地区第 32 地区」(2003)

第２節　発掘調査報告

1. 沢東Ａ遺跡　第５次調査地点

所在地　富士市久沢 174-1

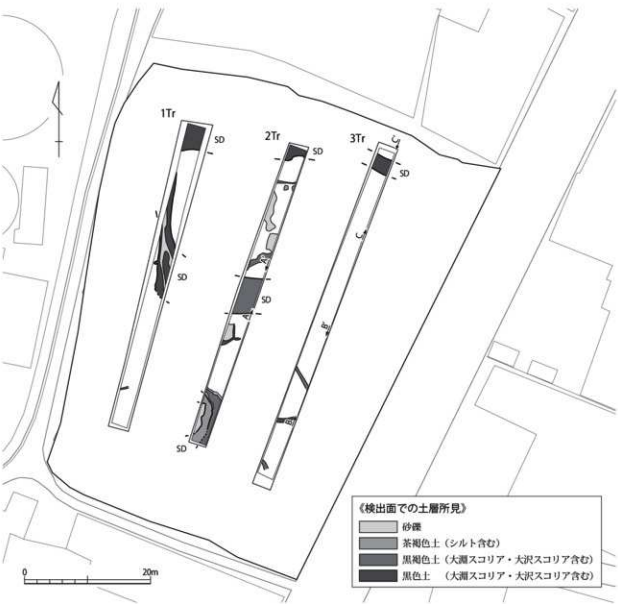
調査面積　513㎡（調査対象面積 3,498㎡）

調査期間　平成 12 年４月 12 日～４月 21 日

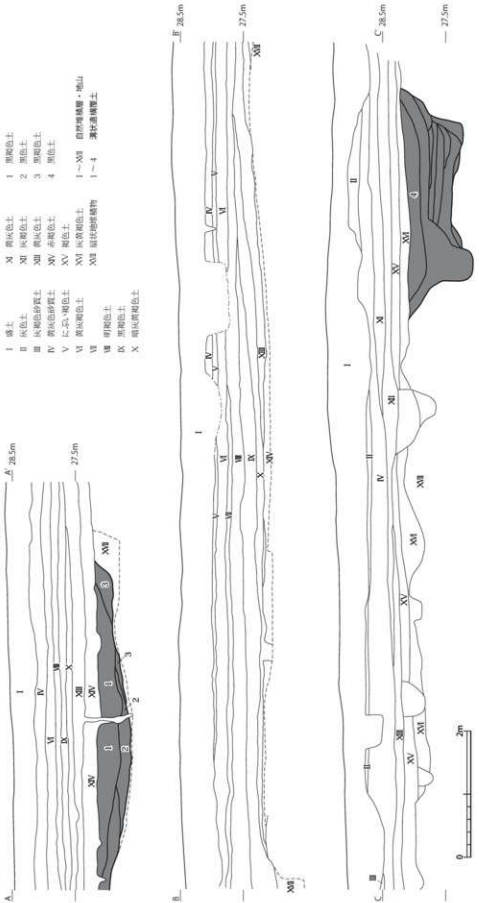
調査原因　工場建設

遺跡の概要　沢東Ａ遺跡は、富士山南麓に広がる大淵扇状地の西側先端部、凡夫川が潤井川に合流する地点の南側緩斜面上に位置する。過去に行われた調査で、古墳時代中期から律令時代に営まれた大規模な集落跡が確認されている[1]。また、第３次調査地点では子持勾玉や石製

第 49 図　H12-1　調査地位置図（1：5,000）



第 50 図　H12-1　トレンチ平面図（1：600）



第51図　H12-1　土層断面図（1：60）

模造品等の祭祀遺物も出土している[2]。

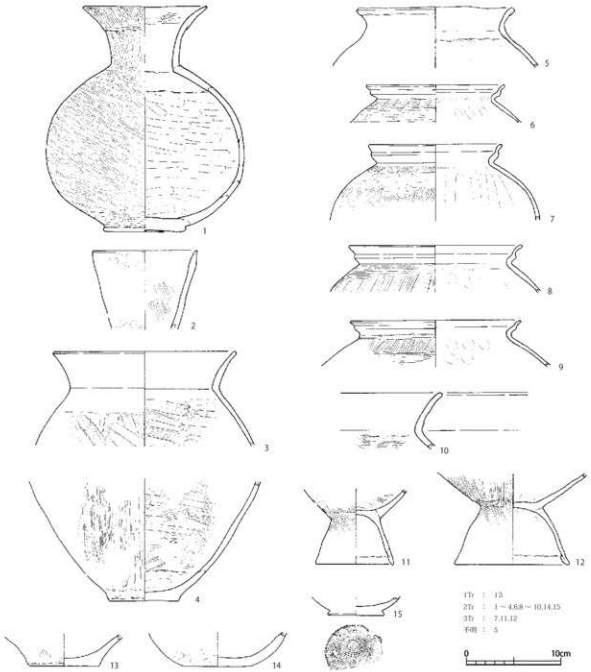
調査の概要　３本のトレンチを設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果

遺構　各トレンチで溝状遺構とみられるプランを検出した。検出面での覆土は、大半が黒色土・黒褐色土（大淵スコリア・大沢スコリアを含む）であり、茶褐色土（シルトを含む）や砂礫によって埋没するプランも認められる。３トレンチ北端の溝状遺構については、検出面での覆土（４層）は大淵スコリア・大沢スコリアを含む黒色土であるが、それより下層の状況は記録が確認できず不明である。

遺物　土師器を中心とした古墳時代初頭から平安時代の遺物が出土し、そのうち15点を図示した。以下では溝状遺構にかかわる可能性のあるトレンチ底面で検出された資料を中心にみていく。

2Tr 黒スコリア下出土とされる１は広口壺であり、体部の形態や円盤状につくる底部には雌鹿塚式期の特徴が



第52図　H12-1　出土遺物実測図（1：4）

みえるが、口縁部から頸部の形状を重視すれば大廓式期前半頃におさまるものとみられる。また１と共に検出された６のＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕）についても、端部の明瞭な面取りはしないもののシャープな口縁部の形状や頸部内面のハケにはＳ字甕Ｂ類の影響がみえ、同時期に位置づけられよう。2Tr 北端出土のＳ字甕である８・９や 3Tr 南側出土の７・11・12 についても、それと同時期か大廓式後半期の資料とみられる。2Tr 中央出土の遺物については、２の直口壺が中見代Ⅱ～Ⅲ式期、３・４・10 の甕は５～６世紀頃とみられる。

注

1）久保田 伸彦・志村 博ほか「沢東Ａ遺跡・第Ｖ地区　第４次調査発掘調査報告書」富士市教育委員会、1997 年。

2）小野 眞一・秋本 眞澄ほか「沢東Ａ遺跡　―富士不燃建材工業株式会社工場増設に伴う埋蔵文化財第３次発掘調査報告書―」富士市教育委員会、1995 年。

第８表　H12-1　出土遺物観察表

番号	掲図	図版	トレンチ遺構	種別	器別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色	外面色		その他
1	第52図	PL.29	2Tr 黒スコリア下	弥生・土師器	壺	65	13.0	24.0	8.5	粗、白色・黒色粒子（7～8mm 程度）・赤色粒子	良好	10YR5/4 にぶい黄褐	5YR7/8 橙		口縁部内面ハケ後ヘラミガキ、底部木葉痕
2	第52図	PL.29	2Tr 中央	弥生・土師器	直口壺	(80)	11.0	(8.4)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙		
3	第52図	PL.29	2Tr 中央	弥生・土師器	甕	(20)	19.0	(10.1)	－	精緻、白色粒子・雲母	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	4と同一？	
4	第52図	PL.29	2Tr 中央	弥生・土師器	甕	(30)	－	(12.6)	7.3	精緻、白色粒子・雲母	良好	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	3と同一？	
5	第52図	PL.29	不明	弥生・土師器	鉢？	(20)	16.0	(6.5)	－	粗、白色・黒色粒子（3～5mm 程度）・赤色粒子	軟質	5YR7/8 橙	7.5YR7/6 橙		
6	第52図	PL.29	2Tr 黒スコリア下	弥生・土師器	S 字甕	(20)	14.6	(4.0)	－	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐		屈曲部内面粗いハケ
7	第52図	PL.29	3Tr 床面側	弥生・土師器	S 字甕	(20)	14.0	(8.0)	－	精緻、黒色粒子・雲母	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐		
8	第52図	PL.29	2Tr 北端	弥生・土師器	S 字甕	(20)	18.0	(5.0)	－	精緻、黒色粒子・白色粒子少・雲母	良好	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙		
9	第52図	PL.29	2Tr 北端	弥生・土師器	S 字甕	(20)	17.0	(4.7)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙		
10	第52図	PL.29	2Tr 北端	弥生・土師器	甕	－	－	(5.4)	－	やや粗、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐		外面ハケ後ヨコナデ
11	第52図	PL.29	3Tr 南側	弥生・土師器	S 字甕	(70)	－	(7.8)	8.2	白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	2.5YR4/2 暗灰黄	7.5YR6/6 橙		農底部内面ヘラケズリ後ハケ
12	第52図	PL.29	3Tr 南側	弥生・土師器	S 字甕	(60)	－	(9.7)	12.0	精緻、黒色粒子・雲母	良好	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR4/4 にぶい黄褐		
13	第52図	PL.29	1Tr 黒色土下	弥生・土師器	甕	(20)	－	(3.4)	7.2	精緻、白色粒子・赤色粒子少	良好	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐		
14	第52図	PL.29	2Tr 中央	弥生・土師器	壺？	(45)	－	(3.7)	7.0	精緻、黒色粒子・白色粒子少	良好	10R8/5 赤	5YR6/8 橙		
15	第52図	PL.29	2Tr.	弥生・土師器	坏	(70)	－	(2.0)	6.0	精緻、黒色粒子	良好	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙		底部糸切り痕

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値
※底径：脚台・高台の付くものについては、脚（高）台径に置き換える。

2. 石坂３古墳群　第１地区

所在地　富士市石坂 606-1　外

調査面積　300㎡（調査対象面積 2,133㎡）

調査期間　平成 12 年４月 24 日～４月 28 日

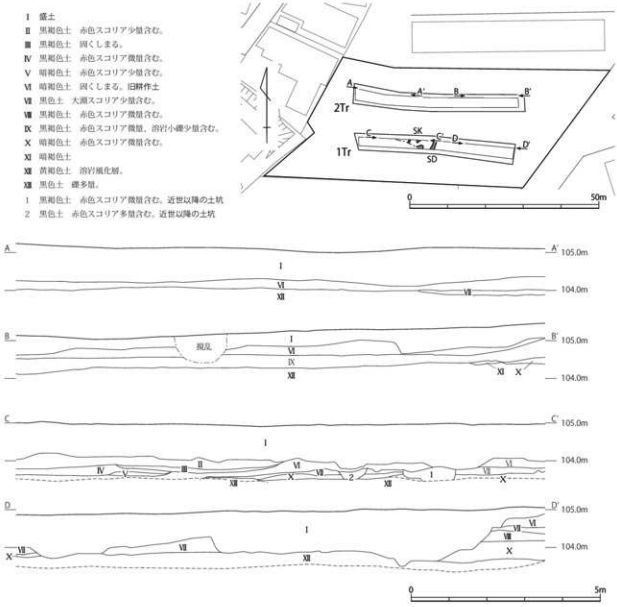
調査原因　マンション建設工事

遺跡の概要　石坂３古墳群は、富士山南麓の丘陵斜面上、標高 80 ～ 100m ほどに存在したとされる３基の後期古墳で構成される古墳群である。いずれも横穴式石室を有する小円墳であったと伝えられるが、すでに消滅しており詳細は不明である。

調査の概要　トレンチを２本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

第 53 図　H12-2　調査地位置図（1：5,000）



第 54 図　H12-2　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

3. 中原遺跡　第 22 地区

所在地　富士市伝法 547-2　外

調査面積　224㎡（調査対象面積 1,322㎡）

調査期間　平成 12 年５月 15 日～５月 18 日

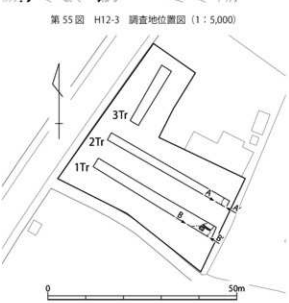
調査原因　工場建設工事

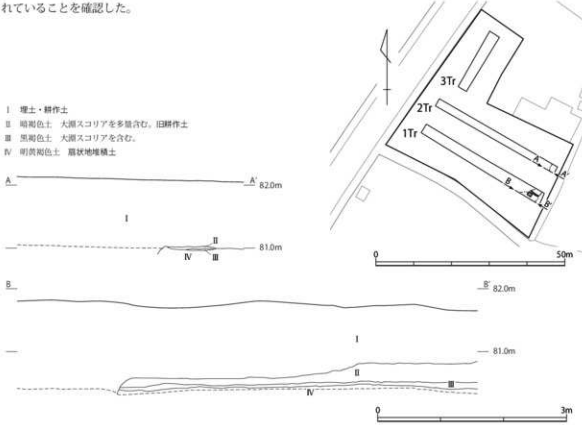
遺跡の概要　H11-9 参照（p14）。

調査の概要　トレンチを３本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。調査地は過去に行われた造成工事により包含層が深く掘削されていることを確認した。

第 55 図　H12-3　調査地位置図（1：5,000）





第 56 図　H12-3　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：60）

4. 沖田遺跡　第 116 次調査地点

所在地　富士市比奈 938-1　外

調査面積　300㎡（調査対象面積 9,645㎡）

調査期間　平成 12 年５月 22 日～５月 25 日

調査原因　古紙置き場等造成工事

遺跡の概要　H11-4 参照（p9）。

調査の概要　テストピットを 12 ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

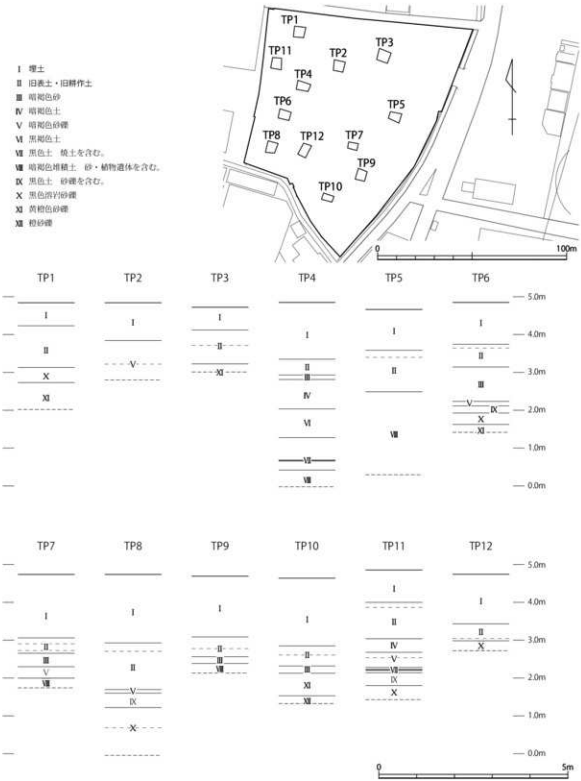
調査の結果　TP4・TP11 に認められる黒色土層（Ⅶ層）内に焼土帯が確認された。遺物包含層である黒色土層（Ⅶ

第 57 図　H12-4　調査地位置図（1：10,000）

層・Ⅸ層）は調査地の西側（TP4・TP6・TP8・TP11 付近）に存在すると考えられる。

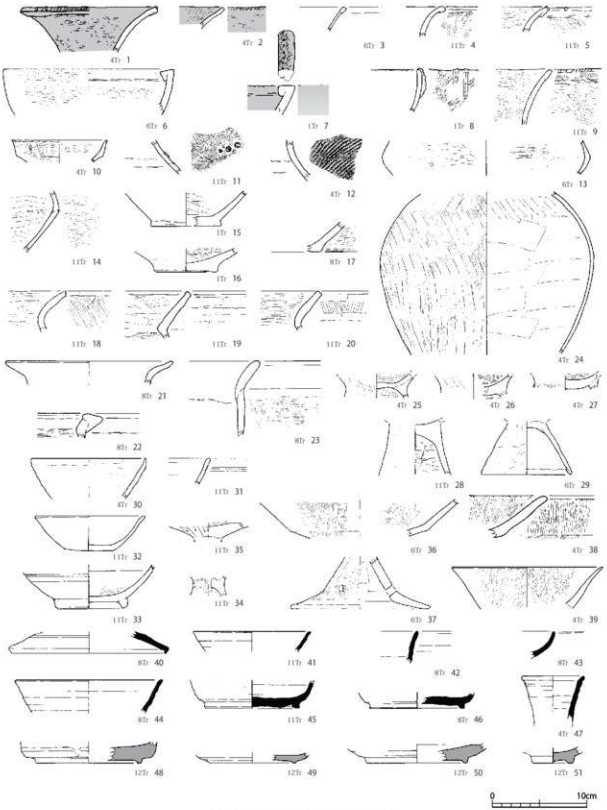
遺物　調査区の西側に位置する TP1・4・6・8・11 より弥生時代後期から平安時代の遺物が、TP12 より近世の遺物が出土し、そのうち 51 点を図示した。

１～ 17 は弥生土器または土師器の広口壺である。1 は面取りされた口唇部に縄文と円形浮文が、2 は縄文が施され、いずれも内外面に赤彩がみとめられる。8 はやや内湾する口縁部の外面に縄文と刻みの付いた棒状浮文が施される。10 は口縁部外面に粗いハケ後に縄文が施



第 58 図　H12-4　トレンチ平面図（1：2,000）・土層断面図（1：100）

された小型の壺か。11・12は縄文が施される頸部であり、11は円形浮文が、12には外面に赤彩がみとめられる。これらの遺物はいずれも弥生時代後期の離庭塚式期に属するとみられるが、顕著な赤彩や２の口縁部形態等には、同時期の駿河西部からの影響が考慮できるかもしれない。かわって６・７は大廓式期の広口壺であるが、７には上面に縄文と刺突文が施され、内外面に赤彩がみとめられる。



第59図　H12-4　出土遺物実測図（1：4）

18～29は土師器の甕である。24～29は台付甕であるが、24は細かいハケと薄い器壁を有しており、S字状口縁台付甕とみられる。19は「くの字」状の口縁部形態であり、口縁端部が周囲のハケ等によって掻き残され、肥厚させたかのような形態となっており、いわゆる駿東型球胴甕の前段階である6世紀後半から7世紀頃に属するとみられる。18・20も「くの字」状の口縁部形態であるが、内外面は特徴的な粗いハケメが施されており、5世紀代まで昇る可能性がある。21は遠江系の長胴甕であり、22の甕または鍋とともに奈良～平安時代に属する。

30～39は土師器の坏や高坏である。高坏については坏部の深さなどから、39が中見代Ⅰ～Ⅱ式期、36・37が5世紀前半頃、38が5世紀後半頃の時期がそれぞれ与えられる。坏は32が9～10世紀頃、33が10～11世紀頃と考えられる。

40～46は須恵器であり、42の高坏や43の坏身または坏蓋が7世紀、それ以外は8世紀の時期が与えられる。47の長頸壺も、8～9世紀頃に属するとみられる。

48～51は近世の陶器であり、同時期の遺物はTP12より集中して検出されている。

第９表　H12-4　出土遺物観察表（1）

番号	掲載	図版	トレンチ	種別	細別	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
1	第59図	PL.30	4Tr.	弥生・土師器	壺	(20)	14.1	(4.9)	－	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内外面赤彩、口縁部縄文・円形浮文
2	第59図	PL.30	4Tr.	弥生・土師器	壺	－	－	(2.3)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR7/4	にぶい橙	内外面赤彩、口縁部縄文
3	第59図	PL.30	6Tr.	土師器	壺	－	－	(2.5)	－	精緻	良好	10YR5/2	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	
4	第59図	PL.30	11Tr.	土師器	壺？	－	－	(3.3)	－	精緻、白色粒子	良好	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	鉢の可能性あり、内面ヨコハケ
5	第59図	PL.30	11Tr.	土師器	壺	－	－	(2.7)	－	精緻、白色粒子	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR5/2	灰黄褐	口縁部円形浮文
6	第59図	PL.30	6Tr.	土師器	壺	(20)	18.0	(4.8)	－	精緻、白色粒子	良好	7.5YR7/3	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
7	第59図	PL.30	1Tr.	土師器	壺	－	－	(3.1)	－	やや粗、白色粒子・赤色粒子	良好	2.5YR6/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙	赤彩（口縁部土面、内面、外面？）、上面縄文後刺突文
8	第59図	PL.30	1Tr.	弥生・土師器	壺	－	－	(4.4)	－	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	外面縄文後棒状浮文（刻みあり）
9	第59図	PL.30	11Tr.	土師器	壺	－	－	(5.8)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	口縁部縄文
10	第59図	PL.30	4Tr.	弥生・土師器	壺	(20)	10.0	(2.4)	－	精緻	良好	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	口縁部外面ハケ後縄文？、内面・頸部外面ミガキ
11	第59図	PL.30	11Tr.	弥生・土師器	壺	－	－	(3.6)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	10YR6/1	褐灰	7.5YR6/4	にぶい橙	頸部縄文・円形浮文
12	第59図	PL.30	6Tr.	弥生・土師器	壺	－	－	(4.3)	－	精緻、白色粒子・雲母	良好	10YR5/3	にぶい黄橙	7.5YR6/4	にぶい橙	外面赤彩、外面縄文
13	第59図	PL.30	6Tr.	弥生・土師器	壺	(20)	－	(3.6)	－	精緻	良好	2.5Y5/1	黄灰	2.5Y5/2	暗灰黄	
14	第59図	PL.30	11Tr.	弥生・土師器	壺	－	－	(6.6)	－	精緻、白色粒子	良好	2.5Y6/1	黄灰	7.5YR6/3	にぶい黄橙	
15	第59図	PL.30	1Tr.	弥生・土師器	壺	(20)	－	(3.7)	7.3	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	2.5Y6/1	黄灰	10YR7/4	にぶい黄橙	外面ナデ
16	第59図	PL.30	1Tr.	土師器	壺	(30)	－	(2.5)	6.5	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	5YR6/6	橙	5YR5/4	にぶい赤褐	
17	第59図	PL.30	8Tr.	弥生・土師器	壺	(20)	－	(3.2)	－	精緻、黒色粒子・白色粒子・赤色粒子少・雲母	良好	10YR6/1	褐灰	10YR7/4	にぶい黄橙	
18	第59図	PL.30	11Tr.	土師器	甕	－	－	(4.4)	－	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	口縁部面取り、内外面粗いハケ
19	第59図	PL.30	11Tr.	土師器	甕	－	－	(4.9)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	口縁部肥厚
20	第59図	PL.30	11Tr.	土師器	甕	－	－	(5.1)	－	やや粗、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	口縁部面取り、頸部外面強いナデ、内外面粗いハケ
21	第59図	PL.30	8Tr.	土師器	甕	(20)	17.6	(2.5)	－	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	10YR5/2	灰黄褐	10YR7/3	にぶい黄橙	内面スス付着
22	第59図	PL.30	8Tr.	土師器	甕	－	－	(3.0)	－	やや粗、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子少・雲母	良好	2.5YR4/3	にぶい赤褐	2.5YR3/1	暗赤灰	
23	第59図	PL.30	8Tr.	土師器	甕？	－	－	(7.9)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	2.5YR5/6	明赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	甑の可能性あり、内面スス付着

第９表　H12-4　出土遺物観察表（2）

番号	掲図	図版	トレンチ	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色	外面色		その他
24	第 59 図	PL.30	4Tr.	土師器	甕	(25)	－	(17.0)	－	精緻、雲母	良好	7.5YR3/1 黒褐	7.5YR3/1 黒褐		S 字状口縁付付甕、外面ススス付着
25	第 59 図	PL.30	4Tr.	土師器	甕	(30)	－	(2.0)	－	精緻、黒色粒子	良好	5YR4/2 灰褐	5YR4/2 灰褐		
26	第 59 図	PL.30	4Tr.	土師器	甕	(25)	－	(2.5)	－	砂礫・石英	良好	2.5YR6/6 橙	5YR5/3 にぶい赤褐		
27	第 59 図	PL.30	4Tr.	土師器	甕	(90)	－	(2.0)	－	白色粒子	良好	7.5YR2/1 黒	7.5YR3/2 黒褐		
28	第 59 図	PL.30	11Tr.	土師器	甕	(30)	－	(5.9)	－	やや粗、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙		
29	第 59 図	PL.30	6Tr.	土師器	甕	(60)	－	(5.5)	9.6	黒色粒子・雲母	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐		
30	第 59 図	PL.30	4Tr.	土師器	坏？	(20)	12.0	(4.2)	－	やや粗、砂礫	良好	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙		
31	第 59 図	PL.30	11Tr.	土師器	坏	－	－	(2.8)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙		外面２条の沈線
32	第 59 図	PL.31	11Tr.	土師器	坏	100	11.4	3.7	5.3	粗、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	軟質	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙		
33	第 59 図	PL.30	11Tr	土師器	椀	(20)	－	(4.6)	6.8	精緻、白色粒子・雲母	良好	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙		
34	第 59 図	PL.31	11Tr.	土師器	器台	－	－	(2.1)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	10YR4/1 褐灰	7.5YR6/4 にぶい橙		外面ススス付着
35	第 59 図	PL.31	11Tr.	土師器	高坏	(50)	－	(1.6)	－	精緻、白色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙		内面放射状ヘラミガキ
36	第 59 図	PL.31	6Tr.	土師器	高坏	(20)	－	(3.8)	－	精緻、白色粒子多	良好	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙		
37	第 59 図	PL.31	6Tr.	土師器	高坏	(20)	－	(5.5)	14.8	精緻、黒色粒子・白色粒子	良好	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/2 灰褐		透孔あり
38	第 59 図	PL.31	4Tr.	土師器	高坏	－	－	(3.6)	－	粗、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙		
39	第 59 図	PL.31	4Tr.	土師器	高坏	(20)	16.0	(4.5)	－	やや粗、白色粒子	良好	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙		
40	第 59 図	PL.31	8Tr.	須恵器	坏蓋	(20)	16.4	(2.3)	－	精緻、白色粒子・赤色粒子各微少	良好	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰		
41	第 59 図	PL.31	11Tr.	須恵器	坏身	(20)	12.3	(2.2)	－	精緻、白色粒子	良好	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰		
42	第 59 図	PL.31	8Tr.	須恵器	高坏？	－	－	(3.4)	－	精緻、白色粒子	良好	N 3/0 暗灰	N 3/0 暗灰		
43	第 59 図	PL.31	8Tr.	須恵器	坏身？	－	－	(2.9)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	N 4/0 灰	N 4/0 灰		坏蓋の可能性あり
44	第 59 図	PL.31	8Tr.	須恵器	坏身	(20)	15.6	(3.5)	－	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	2.5Y6/1 黄灰	N 3/0 暗灰		
45	第 59 図	PL.31	11Tr.	須恵器	坏身	(20)	－	(3.0)	9.7	精緻、白色粒子	良好	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰		
46	第 59 図	PL.31	8T t．	須恵器	坏身	(25)	－	(1.7)	10.0	精緻、白色粒子・赤色粒子各小	良好	10YR6/1 褐灰	10YR6/1 褐灰		
47	第 59 図	PL.31	12Tr.	須恵器	長頸壺	(25)	－	(5.3)	－	精緻	良好	5Y5/2 灰オリーブ	5Y4/1 灰		
48	第 59 図	PL.31	12Tr.	陶器	鉢？	(25)	－	(2.3)	11.0	精緻、黒色粒子・白色粒子	良好	7.5YR4/6 褐	2.5YR7/1 灰白		足込み部、胴部外面に鉄釉
49	第 59 図	PL.31	12Tr.	陶器	皿？	(20)	－	(1.1)	9.0	精緻、黒色粒子・白色粒子	良好	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄		内外面灰釉
50	第 59 図	PL.31	12Tr.	陶器	鉢？	(20)	－	(1.5)	10.6	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR5/6 明褐	2.5YR/2 灰白		足込み部に鉄釉
51	第 59 図	PL.31	12Tr.	陶器	椀	(90)	－	(1.7)	4.2	精緻、黒色粒子・白色粒子	良好	2.5YR/2 灰白	2.5YR/2 灰白		足込み部に灰釉

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値
※底径：脚台・高台の付くものについては、脚（高）台径に置き換える。

5. 船津７古墳群　第６地区

所在地　富士市船津 614-2

調査面積　95㎡（調査対象面積 1,000㎡）

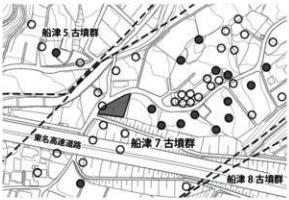
調査期間　平成 12 年５月 24 日～５月 26 日

調査原因　第二東名仮設事務所建設工事

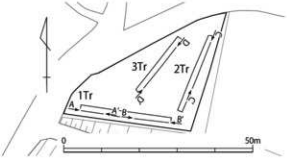
遺跡の概要　船津７古墳群は、春山川東岸の低位段丘上に、南北に広く分布する 120 基ほどの後期古墳で構成される。

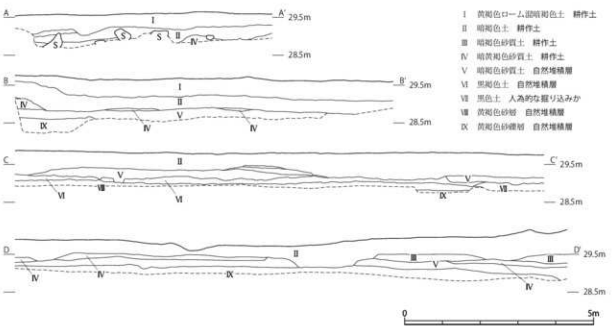
調査の概要　調査地は船津 L-第 67 号墳が存在したとして登録されている場所である。３本のトレンチを設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　１トレンチ西側および３トレンチ南側では、春山川の洪水に起因するとみられる砂礫層が耕作土直下から検出され、船津 L-第 67 号墳が存在した痕跡は確認できなかった。その他の部分でも遺構および遺物は確認されなかった。



第 60 図　H12-5　調査地位置図（1：5,000）





第 61 図　H12-5　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

6. 中里２古墳群　天神塚古墳２次

所在地　富士市中里 1466

調査面積　53㎡（調査対象面積 250㎡）

調査期間　平成 12 年６月 25 日～８月４日

11 月 20 日～ 11 月 30 日

調査原因　神社新築工事

遺跡の概要

（１）古墳群の概要

埋蔵文化財包蔵地としての中里２古墳群は、愛鷹山麓から赤淵川と須津川の間に延びる丘陵の南端部、標高 20 ～ 40m 程に位置する５基の古墳によって構成されている。その一方では須津川を中心として、赤淵川から江尾川に挟まれた地域に広がる 200 基以上の古墳の総称として広義の須津古墳群という呼称も長らく用いられてきており、その場合は、須津川東岸を狭義の須津古墳群（J 群、神谷群）、西岸を中里古墳群（K 群）、そして浅間古墳周辺の離れた一群を増川古墳群（I 群）として細分される [1]。

中里古墳群の主要な古墳としては、天神塚古墳から約

番号	古墳名	墳形（全長 m）	埋葬施設	遺物	文献
1	天神塚古墳（中里 K-91 号墳）	前方後円？ (51.57)	不明	不明	志村 2001、 本書
2	慶昌院古墳（中里 K-92 号墳）	円 (8)	横穴式石室	鉄刀、鍔、須恵器	中野 1958
3	寺屋敷古墳（中里 K-93 号墳、安寿山古墳）	前方後円？	箱式石棺？	埴輪、鉄刀、鉄剣、鉄器	中野 1958
4	丸山古墳（中里 K-94 号墳）	円 ?(50?)	不明	不明	中野 1958
5	中里大久保古墳（中里 K-95 号墳）	円 ?(12?)	無袖形石室	金銅装主頭大刀、刀子、鉄鏃、馬具（鞍具造懸・鐙吊金具・鞍具）、耳環、玉類、須恵器、土師器	植松ほか 1975
6	琴平古墳（中里 K-2 号墳）	円 (31?)	不明	不明	渡井 1988
7	道東古墳（中里 K-79 号墳）	円？	横穴式石室	銅鏡、紙石、鉄刀、耳環、玉類	静岡県 1930 中野 1958
8	アガリット古墳（中里 K-78 号墳）	不明	横穴式石室	乳文鏡、鉄刀、馬具（轡）、耳環、須恵器	静岡県 1930 中野 1958
9	中里 K-99 号墳	不明	横穴式石室	鉄刀、金銅製刀装具（切羽）、刀子、鉄鏃、馬具（矩形立聞轡・鞍金具・留金具）、須恵器、土師器	植松ほか 1975
10	中里 K-98 号墳	不明	横穴式石室	鉄刀、鍔、刀子、鉄鏃、馬具（矩形立聞轡・留金具・環状金具）、須恵器	植松ほか 1975
11	中里 K-97 号墳	不明	横穴式石室	鉄刀、鍔、刀子、鉄鏃、須恵器	植松ほか 1975

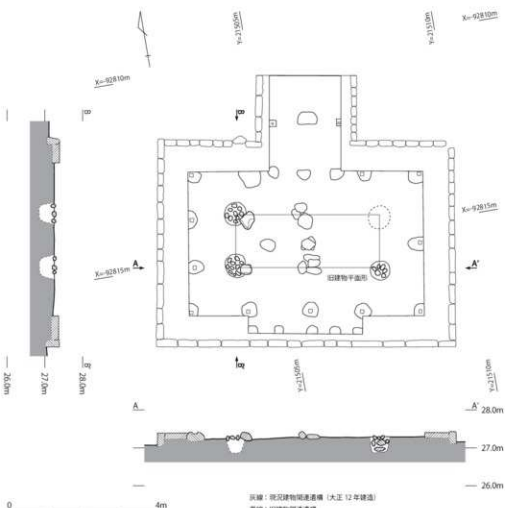
第 62 図　H12-6　天神塚古墳の位置と周辺の遺跡（1：6,000）

400m 北西、赤淵川を見下ろす丘陵上にかつて存在した寺屋敷古墳が注目される。墳丘は不明な点が多いものの、伝承によると主体部はベンガラが敷き詰められた幅４尺、長さ 13 尺の大石室であったとされ、大刀、剣、鉄器といった副葬品があったとされる。また富士市立博物館所蔵資料のなかには当古墳出土の形象埴輪片があり、当地域では希少な埴輪を有する首長墳であったと考えられる（第３章第２節参照）。須津川に程近い北東側の丘陵上には、現存墳長 31m の円墳とみられる蓜平古墳を中心として、６世紀後葉から７世紀の古墳が密集する。銅鋺、砥石が出土した道東古墳、乳文鏡の出土が知られるアガリット古墳、金銅装大刀が出土した中里大久保古墳や中里 K-99 号墳などが注目されよう。なお天神塚古墳の周辺は、古墳時代から奈良・平安時代の遺物散布地である天念寺遺跡として登録されており、当該期の集落が存在した可能性がある。

（２）天神塚古墳の調査履歴

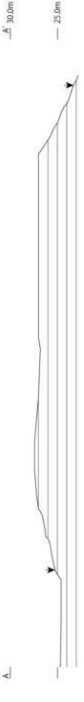
天神塚古墳は、中里古墳群のなかでは最も南側の丘陵斜面上に築造されており、標高は墳丘南側で 22m、北側で 27m を測る。古墳の現況（第 64 図）は、天神社の座する部分については直径約 30m、南側からの高さ約 4m の円形のマウンドが明瞭に確認できるものの、その北西側には方形を呈する雛壇状の高まりが背後の丘陵勾配からそのまま延びるようにして円形マウンド部分に取りつくような形態を呈している。不明瞭な西側部分は、その周辺も含めて耕作地となっており、現地観察では前方後円墳であるか円墳であるかの判断が悩ましいところである。

昭和初期には古墳としての認識があったようであり、1930 年刊行の『静岡県史』には「西向の前方後圓墳」で「後圓部に天満宮が祭られて」いるとあり、規模については「長軸三六・四米・後圓部径約一四・五米・高



第 63 図　H12-6　天神社基墳平面図・断面図（1：100）

第 64 図　H12-6　天神塚古墳墳丘測量図（1：400）



約三米」で未発掘であるとされる[2]。『吉原市の古墳』や『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』では中里Ｋ第91号墳の番号が与えられているが、ともに事実記載は『静岡県史』の記述が踏襲されている。一方1972年刊行の『吉原市史』[3]では、『静岡県史』の前方後円墳との記述については（現地の状況から）確認できないとの指摘もあり、天神社の位置する明瞭な円墳部分に対して、西側の墳丘については1970年頃には既に不明瞭であったことが窺える。

平成12年２月には静岡県教育委員会文化課を事務局とした静岡県内前方後円墳発掘調査等事業（文化庁補助事業）の一環として、富士市教育委員会文化振興課による墳丘確認調査が実施された（1次調査）[4]。この調査によって天神塚古墳は南東から北西方向に主軸をとる全長51.5m、後円部径32.0mの前方後円墳であるとされ、北側には後円部側で幅広となる周溝の存在も指摘された。築造時期については、墳丘下や周溝内に堆積した大淵スコリアの年代観から、6世紀初頭頃と報告されている。

天神塚古墳における初の発掘調査となった１次調査の意義は揺るぎないものの、後述するように、北側を主としたトレンチ設定のために、さらに不明瞭なはずである「前方部」西側から南側の問題を残したままで前方後円墳と断定するには、やや尚早であった感も否めない。天神塚古墳の墳形については、墳丘西側や南側の調査を十分に行った上で判断するべきであろう。したがって本稿では、墳丘各部位の呼称についても、東側の円形マウンド部分を「後円部」、西側の推定マウンド部分を「前方部」と、便宜的に「」付で表記することとする。

調査の概要　今回の２次調査では天神社拝殿・本殿の取り壊しと新築に伴い、東側の「後円部」を対象として、人力によるトレンチ調査を実施した。2-1～2-3トレンチ、2-8トレンチの一部が６月25日～８月４日の調査、2-4～2-8トレンチが11月20日～11月30日の調査に対応する。

調査の結果

（１）天神社基壇遺構

昭和12年（1937）改築[5]の拝殿（以下、現況建物）の解体後、その拝殿の基壇とそれ以前の建物（以下、旧建物）とみられる遺構が検出されたため、記録を行った（第63図）。

現況建物は、後述する墳丘盛土を一旦削平した上で、墳丘盛土起源の客土によって周囲に石囲いを設置しながら造成した基壇上に築かれている。礎石をみると、桁行6.06m（20尺）・梁行3.64m（12尺）の四間×三間の構造であるが、東側梁行の礎石は３石しかなく、東西が非対称となっている。また東石についても西側や中央では認められるものの、東側では残っていない。上屋構造の詳細については不明なものの、基礎については東西でアンバランスな構造であったことが看取される。

旧建物も、上述した現況建物と同一の基壇上に築かれている。北東角の柱穴が未検出であるものの、桁行3.8m（12.5尺）、梁行1.4m（4.5尺）を測るとみられる。柱穴内には拳大から人頭大程度の礫が詰め込まれており、基礎固め若しくは柱の根固めとしての役割を担っている。なお、当時の調査所見によれば、西側の２つの柱穴上面よりやや東に図示される30～40cm大の礫については、旧建物の礎石として利用された後、現況建物建立の際に東石として再利用された可能性を想定している。昭和12年以前の建物については記録類が残っておらず、上屋構造や年代については不明である。ただ、境内にある水盤に「天明七年（1787）丁未四月」の銘があることや、句額も享和二年（1802）奉納とされること、そして後述するように、旧建物基壇下等から銅銭の寛永通宝や18～19世紀の油受け皿が出土していることから、18世紀以降には当該地に神社等の建物遺構があったこ

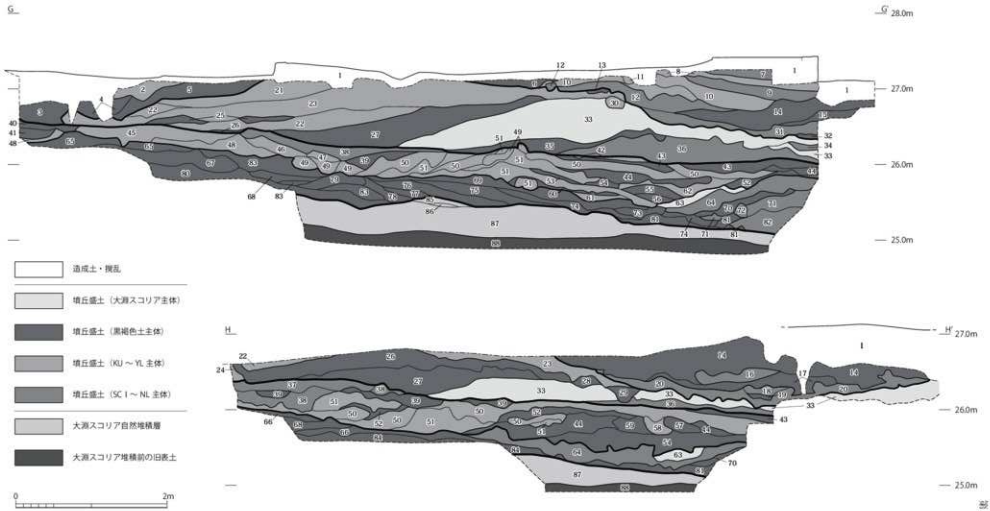
第 65 図　H12-6　天神塚古墳　トレンチ配置図（1：300）

とが想定される。

（2）墳丘トレンチ

２次調査におけるトレンチの配置は、東側「後円部」における神社建設に伴い古墳の盛土や主体部等が破壊されることが危惧されたため、推定「後円部」における主体部の検出を主たる目的として選定されている。結論からいえば、墳丘盛土内部において主体部等の遺構はまったく検出されなかったのであるが、2-1 トレンチでは古墳築造以前の旧表土から墳丘盛土にかけての土層堆積状況を確認することができた（第 66 図、第 10 表）。

「後円部」ではおおよそ標高 25.4m ほどを境として、それより上部が墳丘盛土および天神社造成土、下部が古



第 66 図　H12-6　天神塚古墳　土層断面図①（1：50）

墳築造以前の自然堆積土となる。

墳丘盛土については、周辺から掘り出したとみられる黒褐色土や大淵スコリア、また主として栗色層（KU）・休場層(YL)からなるローム質土、第１スコリア帯(SC1)・ニセローム層（NL）からなるローム質土という大きく４種類の盛土を交互に積み上げることによって形成されている。続いて 2-1 トレンチにおける各盛土の断面形態をみると、丸みをもって積み上げる盛土（21 ～ 36 層、64・70・71・82 層）と、平たく墳状に積み上げる盛土（37 ～ 54 層など）のパターンが確認できる。また、標高 26.0m ほどには墳状の盛土によって、若干の勾配を有しつつも比較的平坦な面が形成されているのであり、このことは後に控える大型の盛土の積み上げに先んじて、作業工程上の区切りとなる平坦面が用意されたものと考えられる。

この平坦面より上方を上部工程、下方を下部工程と仮に設定するならば、下部工程については丸みをもって積み上げる盛土（63・64・70 ～ 72・82 層）が「後円部」の主として南東側に、墳状盛土（65 ～ 69・73 ～ 80 層など）が主として北西側に認められることから、丘陵斜面の下方である南東側に前者の盛土を築いた後に、斜面との間にできた空間に後者の盛土を入れていくという手順が想定される。ここでいう丸みをもった盛土は、青木敬氏[6] の設定する「土手状盛土」に近い機能が付与されていた可能性があろう。それに対し、上部行程では丸みをもって積み上げられる盛土（21 ～ 36 層）が「後円部」中央付近に展開しており、限られた調査範囲からの所見であるため慎重に判断すべき問題ではあるものの、青木氏の設定する「小丘」に近い機能が想定される。

こうして形成された墳丘盛土であるが、その最上部については近世以降の神社等の施設建造に伴う造成によって、大きく削平されているものと判断される。墳丘盛土を起源とする造成土である１層の状況をみると、現状の「後円部」墳頂平坦面の中心に近い 2-1 トレンチ中央部や 2-3、2-8 トレンチでは薄いのに対して、墳頂平坦面の周縁となる 2-1 トレンチ南東端や 2-2、2-4、2-5、2-7 トレンチでは厚く堆積しているのであり、おそらくは墳丘中央付近を削平した土を周囲に盛ることで、現況の広い墳頂平坦面が用意されたものと考えられる（第 65・66・67 図、第 10 表）。当古墳の主体部が竪穴系埋葬施設であったならば、今回のトレンチ調査において検出されなかったことから、この削平の際に既に消滅している可能性は高い。

古墳築造以前の自然堆積土は、大淵スコリアの純粋堆積層とみられる 87 層と、大淵スコリア降下前の旧表土とみられる 88 層が検出された。87 層には記録類に詳細な土層注記が残されていなかったものの、調査日誌には１次調査７トレンチで検出された「大淵スコリア単純層」（7 層）[7] に同じとの所見があったため、大淵スコリアの噴出・降下の際に集中して堆積した層と判断した。

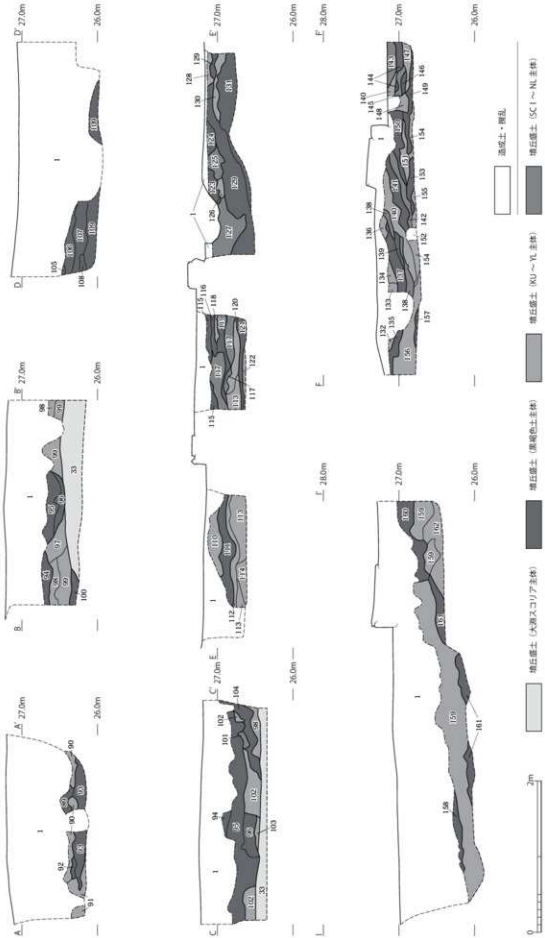
旧表土である 88 層は古墳時代中期の土器片を含んだ層であり、このことは天神塚古墳の築造や大淵スコリアの噴出以前に、当該地に集落が営まれていたことを示唆する。天神塚古墳周辺は、古墳～奈良・平安時代の遺物散布地（天念寺遺跡）として認識されているが、これまでに発掘調査履歴はなく、具体的な集落の様相については不明な点が多い。後述するように、周辺から採取したとみられる土によって形成された墳丘盛土やその下層からは、古墳時代前期から後期初頭頃までの多量の土師器片が出土しており、天念寺遺跡が少なくとも大淵スコリア降下以前までは一定の規模を有する集落であった蓋然性は高い。

遺物　天神塚古墳の発掘調査では、１次・２次調査あわせてコンテナ６箱分程度の遺物が出土している。１次調査時に出土した遺物については未報告であったことから、今回併せて報告することとした。

これらの出土遺物は、整理作業段階に確認できた記録等によると、１次調査で検出されている周溝のように古墳に直接伴うと考えられる遺構内から出土したものはなく、多くの資料についてはその出土層位についても不確かであった。そのような中で、墳丘を断ち割った２次調査１トレンチ出土の遺物については、墳丘盛土とその下の大淵スコリア自然堆積層、さらに下の旧表土層の別が記録されており、古墳築造の上限年代を考える上で重要な知見を得ることができた。以下では出土層位が確認できた資料を中心に記述をおこなっていく。なお、各層別の出土遺物重量に対する抽出遺物の割合については、第 68 図を参照されたい。

（1）墳丘盛土内出土遺物

１～ 18 は墳丘盛土内（主として 2-1 トレンチの２～



第67図　H12-6　天神塚古墳　土層断面図2）（1：50）

84層）において出土した遺物である。

１～３は大廓式期の広口壺の口縁部である。１・２は折り返し口縁であり、３が口縁端部内側の粘土帯を欠くが、外面に棒状浮文が施された複合口縁である。４は小型壺の口縁部であり、外面は明赤褐色を呈する。こちらは中見代Ⅰ～Ⅱ式期頃に位置づけられるとみられる。７は壺の体部、５・６は壺の底部と判断した。

８・９は甕の口縁部である。８は端部を丸くおさめるが、９は上面に面を作りだしており、内側に若干突出（肥厚）する。ともに５～６世紀頃のくの字甕とみられる。10・11はＳ字状口縁台付甕（以下、Ｓ字甕）である。10は頸部内面の屈曲がやや鋭いが、在地型の範疇で差し支えない。11も肩部外面のヨコハケが踏襲されているが、胴部の張りは弱い。ともに大廓Ⅲ～Ⅳ式期であろう。12・13は台付甕である。

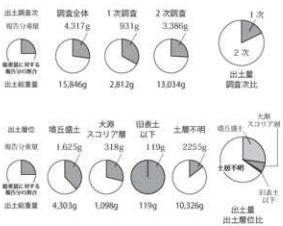
14～16は坏である。14・15は内外面が丁寧に磨かるが、底部に木葉痕はみとめられず、ヘラナデによって整形されている。坏部の深い形態は古手の様相を示すとみられる。16は口縁部が外側に開く形態を呈し、椀と呼ばれることも多いものである。これらの坏類は池谷初恵氏の示す「駿豆型坏」[8] のなかでも初期のものである０～１段階に属するものとみられ、存続時期にやや幅があるものの、概ね５世紀代（TK73～TK23型式期頃）の年代が想定されている。17は高坏の脚部と判断した。

18は墳丘盛土内でも最上層である、社殿基壇下（1層下面）より出土した寛永通宝である。このほかに出土層位不明遺物のなかにも寛永通宝（80）や18～19世紀の油受け皿（77～79）が、社殿周辺のトレンチにおいてみられることから、近世期の天神社を考える上で貴重な資料となる。

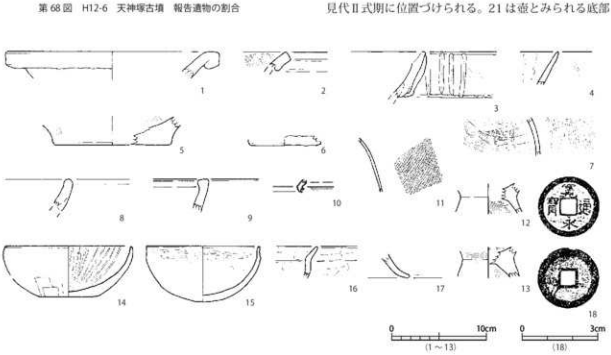
（２）大淵スコリア自然堆積層～旧表土出土遺物

19～27については、墳丘盛土築成以前に堆積した、大淵スコリア自然堆積層（85～87層）内より出土したものである。

19は甕の口縁部であり、口縁端部内面を肥厚させている。５世紀後半頃のくの字甕とみられる。20は小型壺であり、体部下半はヘラナデによって調整される。中見代Ⅱ式期に位置づけられる。21は壺とみられる底部



第68図　H12-6　天神塚古墳　報告遺物の割合



第69図　H12-6　天神塚古墳　社殿造成土～墳丘盛土内出土遺物実測図（1：4、2：3）

片であり、木葉痕がみられる。

22 ～ 28 は坏類である。22 は先の 14・15 と同様、底部に木葉痕はみられず、ヘラナデによって整えられる坏である。やはり「駿豆型坏」I 段階頃に位置づけられる。24・25 も同様の坏または高坏とみられる。23 は須恵器坏蓋を模倣した坏であり、表面の磨耗が激しいものの、体部の稜や口縁端部が鋭く仕上げられていることがわかる。MT15 型式期の須恵器が共伴した富士市・宮添遺跡 D 地区 SB11 出土資料（44 ～ 52）[9] と比べても各端部のつくりは丁寧であり、これより一段階古いものとして差し支えない。以上のことから、23 の模倣坏は TK23 ～ TK47 型式期頃にのぼる資料とみられる。26 は埦とも呼称される口縁部が外側に開くもので、16 と類似する。「駿豆型坏」0 ～ 1 段階頃に位置づけられよう。

27 は高坏の脚部である。28 は大淵スコリア堆積以前の旧表土層（88 層）から出土した高坏であり、脚裾は緩く屈折し、脚部内面上部には栓をするかのように粘土棒が差し込まれている。脚部形態から中見代Ⅱ式期に位置づけられる。

（3）出土層位不明遺物

29 ～ 50 については、1 次調査と 2 次調査において出土した層位不明の遺物である。

29 ～ 38 は壺類と判断した。30 は口縁端部内側に連続した強い指押えを施すことで装飾の役割を果たしている。32 は二重口縁への意識が残存したのか、口縁部外面が若干屈曲する。また頸部には横方向の沈線がめぐる。33 の小型壺は内外面に赤彩が残る。

39 ～ 55 は甕である。40・51 ～ 53・55 が台付甕、45・46・50・54 が S 字甕である。39・41 ～ 44・47・48 はくの字甕であり、多くは 5 世紀代の資料とみられる。

56 ～ 61 は坏と判断した。56・59 は口縁部が外側に開くもの（埦）、58 は内湾するもので、57 は須恵器坏蓋模倣の坏である。

62 は（小型）器台であり、富士市・三新田遺跡 B 第 9 号住居址出土例に類似する[10]。大廓Ⅳ式期頃に位置づけられる。63 はミニチュア土器の底部であり、壺または甕とみられる。

64 ～ 72 は高坏である。中見代～安久式期の資料が主体を占めるとみられる。

73 は須恵器甕の肩部と判断した。外面の自然釉によって見えづらくなっているが、波状文がめぐる。焼成は良好・硬質で断面が灰赤褐色であり、TK208 型式期以前に位置づけることができるとみられる。1 次調査時の資料であり、出土トレンチも不明である。

以上の遺物については、墳丘盛土や大淵スコリア自然堆積層、旧表土出土の遺物の時期と同じく、古墳時代前期（大廓式期）から後期初頭（TK23・47 型式期）におさまる資料群として捉えられる。

それに対し、74 ～ 80 については古墳築造からしばらく経った後の遺物である。74 は須恵器瓶類の底部で 8 ～ 9 世紀頃のものとみられる。76 は灰釉陶器の碗であり、底部の糸切り痕から H-72 期（10 世紀後半）以降であろうか。75 は常滑の甕であり、N 字状の口縁部断面から 6 型式（13 世紀後半）とみられる。77 ～ 79 は瀬戸美濃の油受け皿で 18 ～ 19 世紀頃に位置づけられ、80 の寛永通宝も同時期とみられる。

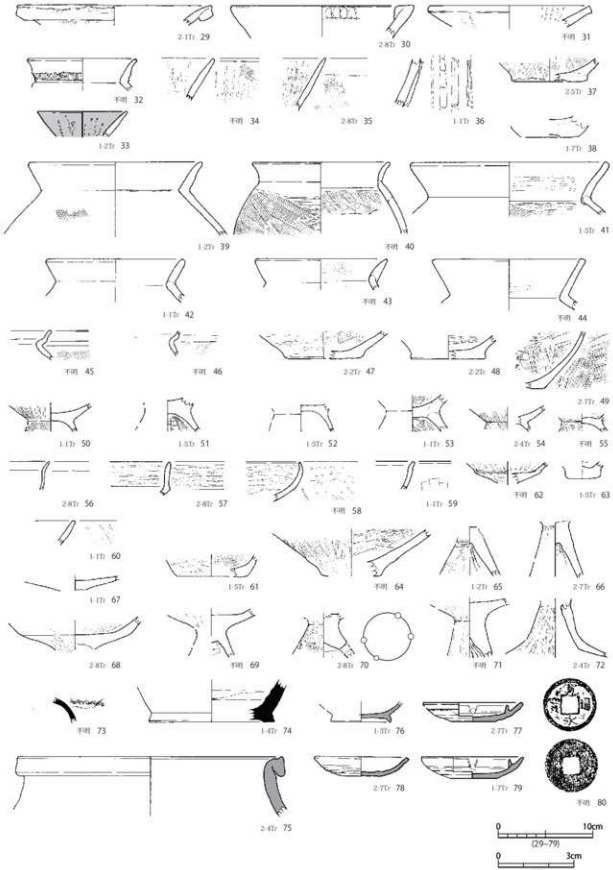
注

1）中野国雄「古原市域の古墳―スルガのクニ西部地域古墳群」後藤守一編『古原市の古墳』古原市教育委員会、1958 年。

渡井義彦　編『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会、1988 年。

19 ～ 27：　大淵スコリア層（85 ～ 87 層）
28　：　旧表土（88 層）

第 70 図　H12-6　天神塚古墳　下層出土遺物実測図（1：4）



第71図　H12-6　天神塚古墳　出土層位不明遺物実測図（1：4、2：3）

2) 静岡県『静岡県史』第壱巻、1930 年。

3) 中野国雄『「伝聞古墳とスルガの国」吉原市「吉原市史」上巻、1972 年。

4) 志村　博「天神塚古墳（富士市）」静岡県教育委員会　編『静岡県の前方後円墳 -個別報告編 -』静岡県文化財報告書第 55 集、2001 年。

5) 以下、現在の中里天神社やその所有物に関する記述は下記の文献に拠った。

　鈴木富男　編『郷土史　須津』富士市須津地区まちづくり会議、1997 年。

6) 青木　敬「墳丘構築技術の変遷と展開」「シンポジウム　くものっとくわざっ」第 16 回東北・関東前方後円墳研究会大会　発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会、2011 年。

　同『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』六一書房、2003 年。

7) 注 4 文献参照。

8) 池谷初恵「駿河伊豆型平底坏について」「東国土器研究」第 5 号　東国土器研究会、1999 年。

9) 佐藤祐樹『宮添遺跡Ⅲ　個人住宅改良工事に伴う宮添遺跡 D 地区埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会、2010 年。

10) 平林将信　編『三新田遺跡発掘調査報告書』富士市教育委員会、1983 年。

第 62 図の参考文献

植松章八ほか　1975『中里大久保（K 第 95 号）古墳　付載　K 第 97・98・99 号墳の副葬品』富士市教育委員会

静岡県　1930『静岡県史』第壱巻

志村　博　2001『富士市天神塚古墳確認調査報告』「静岡県の前方後円墳 -個別報告編 -」静岡県埋蔵文化財報告書第 55 集　静岡県教育委員会

中野国雄　1958「吉原市域の古墳」「吉原市の古墳」吉原市教育委員会

渡井義彦　編　1988『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会

第 10 表　土層観察表（1）

断面図	番号	分類	色調	土色名	土質
A～I	1	表土・撹乱	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。墳丘盛土起源の客土。褐色Ｌ多量、大源 SC やや多量、橙色発泡 SC 少量。
G	2	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。黒褐色土中量、褐色Ｌブロック多量、大源 SC 微量、橙色 SC 粒子微量。
G	3	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりやや強。褐色Ｌやや多量、大源 SC 微量。
G	4	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや強。褐色Ｌ小ブロック多量、褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 少量。
G	5	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。褐色Ｌ小ブロック微量、暗褐色Ｌやや多量、大源 SC 少量、炭化物微量。
G	6	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。褐色Ｌ少量、橙色 SC 粒子少量、大源 SC 少量、カワゴ平パミス少量。
G	7	墳丘盛土（明褐色Ｌ主体）	7.5YR5/8	明褐色	しまりやや弱。黒褐色土少量、SC なし。9 に同じ。
G	8	墳丘盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまりやや強。黒褐色土微量、大源 SC 微量、橙色 SC 粒子微量。
G	9	墳丘盛土（明褐色Ｌ主体）	7.5YR5/8	明褐色	しまりやや弱。黒褐色土少量、SC なし。7 に同じ。
G	10	墳丘盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや強。黒褐色土多量、大源 SC 微量、橙色 SC 粒子微量。
G	11	墳丘盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	褐色Ｌ大ブロック。
G	12	墳丘盛土（NL? 主体）	7.5YR5/6	明褐色	しまりやや弱。黒褐色土微量、SC なし。20・31・143 に同じ。
G	13	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR3/3	暗褐色	明褐色Ｌ少量、暗褐色Ｌ多量、大源 SC 微量。
G,H	14	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまり強。褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 少量。
G	15	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりやや強。褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 少量、カワゴ平パミス微量。
H	16	墳丘盛土（褐色Ｌ主体）	10YR4/4	褐色	しまりやや強。黒褐色土多量、大源 SC 少量、橙色 SC 粒子少量。
H	17	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	注記なし。
H	18	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	明褐色Ｌブロック少量、黒色土・SC なし。
H	19	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	大源 SC 多量。
H	20	墳丘盛土（NL? 主体）	7.5YR5/6	明褐色	しまりやや弱。黒褐色土微量、SC なし。12・31・143 に同じ。
G	21	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。黒褐色土多量、大源 SC 微量、橙色発泡 SC 極微量。
G,H	22	墳丘盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまりやや強。黒褐色土少量、暗褐色Ｌブロック少量、大源 SC 少量。
G,H	23	墳丘盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまりやや強。褐色Ｌやや多量、大源 SC 微量、暗褐色Ｌブロック少量、大源 SC 少量。
H	24	墳丘盛土（YL 主体）	10YR3/3	暗褐色	YL 大ブロック。
G	25	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまり弱。褐色Ｌ小ブロック少量、暗褐色Ｌ小ブロック少量、橙色 SC 粒子微量。
G,H	26	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 中量。28・29 に同じ。
G,H	27	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌブロック少量（南壁微量）、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 中量、炭化物微量。157 に同じ。
H	28	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 中量。26・29 に同じ。
H	29	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 中量。26・28 に同じ。
G	30	墳丘盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	褐色Ｌ大ブロック。
G	31	墳丘盛土（NL? 主体）	7.5YR5/6	明褐色	しまりやや弱。黒褐色土微量、SC なし。12・20・143 に同じ。
G	32	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや弱。褐色Ｌ少量、大源 SC 微量。
B,C,G,H	33	墳丘盛土（大源 SC 主体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまりやや強。大源 SC 主体（径 2 ～ 3mm）、黒褐色土少量、暗褐色土少量、炭化物微量。
G	34	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや強。黒褐色土多量、大源 SC 微量。
G	35	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌブロック多量、褐色Ｌブロック微量、大源 SC 中量、炭化物微量。
G,H	36	墳丘盛土（SC Ⅰ? 主体）	10YR4/6	褐色	しまりやや弱。暗褐色Ｌ・NL・褐色Ｌ・黒褐色土混じり、大源 SC 微量。
H	37	墳丘盛土（黒褐色Ｌ主体）	7.5YR3/4	暗褐色	しまり強。黒褐色土少量、褐色Ｌブロック多量。
G,H	38	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/4	暗褐色	しまりやや弱。黒褐色土中量、暗褐色Ｌブロック多量、明褐色Ｌブロック少量、大源 SC 微量。
G,H	39	墳丘盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまり強。暗褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 少量、橙色発泡 SC 微量、炭化物微微量。
G	40	墳丘盛土（黒褐色土主体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまり弱。大源 SC 少量。
G	41	墳丘盛土（黒色土主体）	5YR1.7/1	黒色	しまりやや強。暗褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 多量（径 2 ～ 3mm）、橙色発泡 SC やや多量。
G	42	墳丘盛土（YL? 主体）	10YR3/3	暗褐色	しまりやや強。黒褐色微量、大源 SC 極微量。
G,H	43	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや弱。暗褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 中量。44・55・56 に類似。
G,H	44	墳丘盛土（黒色土主体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。粘性あり。大源 SC 多量、橙色発泡 SC 中量。43・55・56 に類似。
G	45	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまりやや強。黒褐色やや多量、褐色Ｌ少量、大源 SC 少量。
G	46	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌ・褐色Ｌ混じり、黒褐色土少量、SC なし。
G	47	墳丘盛土（暗褐色Ｌ主体）	10YR3/4	暗褐色	しまり強。暗褐色Ｌ大ブロック。

第 10 表　土層観察表（2）

断面図	番号	分類	色調	土色名	土質
G	48	堆石盛土（褐色Ｌ土体）	7.5YR4/3	褐色	しまりやや強。黒褐色土少量、暗褐色Ｌ少量、SC なし。
G	49	堆石盛土（YL2 土体）	10YR3/4	暗褐色	YL2 大ブロック。ブロック間に黒褐色土が薄く入る。
G,H	50	堆石盛土（暗褐色Ｌ土体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや強。黒褐色土中量、大源 SC 少量。
G,H	51	堆石盛土（暗褐色Ｌ土体）	10YR3/4	暗褐色	しまり強。黒褐色土少量、大源 SC 極微量、橙色 SC 粒子微量。61 に類似。
G,H	52	堆石盛土（黒褐色土体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 微量、橙色 SC 粒子微量。
G	53	堆石盛土（黒褐色土体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや弱。暗褐色Ｌ多量、大源 SC 微量。
G,H	54	堆石盛土（黒色土体）	7.5YR2/1	黒色	暗褐色Ｌブロック多量、褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、橙色 SC 粒子少量。
G	55	堆石盛土（黒褐色土体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりやや弱。暗褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 中量、橙色 SC 粒子微量。43・44・56 に類似。
G	56	堆石盛土（黒褐色土体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 中量、焼土少量。43・44・55 に類似。
H	57	堆石盛土（黒褐色土体）	10YR2/2	黒褐色	暗褐色Ｌブロック多量、明褐色Ｌブロック少量、褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、焼土ブロック少量。59 に同じ。
H	58	堆石盛土（褐色Ｌ土体）	7.5YR4/3	褐色	褐色・暗褐色Ｌ大ブロック。
H	59	堆石盛土（黒褐色土体）	10YR2/2	黒褐色	暗褐色Ｌブロック多量、明褐色Ｌブロック少量、褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、焼土ブロック少量。57 に同じ。
G	60	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。大源 SC 微量。
G	61	堆石盛土（黒褐色土体）	10YR3/4	暗褐色	しまり強。暗褐色Ｌ少量、大源 SC 極微量、橙色 SC 粒子微量。51 に類似。
G	62	堆石盛土（暗褐色Ｌ土体）	10YR3/3	暗褐色	大源 SC 少量、橙色 SC 粒子微量。
G,H	63	堆石盛土（大源 SC 土体）	10YR2/2	黒褐色	しまりやや強。大源 SC 土体。黒褐色土少量、橙色 SC 粒子微量。
G,H	64	堆石盛土（SC Ｉ土体）	7.5YR5/6	明褐色	しまりやや強。黒色土ほとんどなし、褐色Ｌ微量。62 に類似。
G	65	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。暗褐色Ｌ少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 多量。
G,H	66	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。粘性あり。暗褐色Ｌ小ブロック中量、大源 SC 少量、橙色発泡 SC 少量。84 に類似。
G	67	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。粘性あり。大源 SC 少量、橙色発泡 SC 少量。
G,H	68	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり極強。暗褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 極多量、橙色発泡 SC 多量。79 に同じ。
G	69	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。暗褐色Ｌブロック多量、大源 SC 微量。
G,H	70	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌ多量、大源 SC 中量。
G	71	堆石盛土（褐色Ｌ土体）	7.5YR4/4	褐色	しまりやや強。黒褐色土少量、明褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 微量。
G	72	堆石盛土（褐色Ｌ土体）	7.5YR4/4	褐色	褐色Ｌ大ブロック。
G	73	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 多量。
G	74	堆石盛土（黒褐色土土体）	10YR2/2	黒褐色	しまり強。大源 SC 少量、橙色 SC 粒子少量。
G	75	堆石盛土（黒褐色土土体）	10YR2/2	黒褐色	しまり強。暗褐色Ｌ小ブロック中量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 極微量。
G	76	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。暗褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 微量。
G	77	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒褐色	しまりやや強。粘性あり。大源 SC 中量、橙色発泡 SC 少量、橙色 SC 粒子少量。
G	78	堆石盛土（黒褐色土土体）	5YR2/1	黒褐色	しまり強。暗褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 多量、橙色発泡 SC 多量。
G	79	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり極強。暗褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 極多量、橙色発泡 SC 多量。68 に同じ。
G	80	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。粘性あり。大源 SC 多量、橙色発泡 SC 中量。
G,H	81	堆石盛土（黒褐色土土体）	10YR2/2	黒褐色	しまり強。暗褐色Ｌブロック中量、大源 SC 微量。
G	82	堆石盛土（SC Ｉ土体）	7.5YR5/6	明褐色	しまりやや強。黒褐色土少量、黒褐色土中に大源 SC 微量。64 に類似。
G	83	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり極強。粘性あり。暗褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 少量。
H	84	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。粘性あり。暗褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 少量、橙色発泡 SC 少量。66 に類似。
G	85	大源 SC 自然堆積層	5YR3/1	黒褐色	黒褐色土少量。微化。
G	86	黒褐色土	5YR2/1	黒褐色	大源 SC 中量。
G,H	87	大源 SC 自然堆積層	7.5YR2/1	黒色	土器が微化。
H	88	大源 SC 堆積前の旧表土	5YR2/1	黒褐色	しまり強。土器片多量、橙色 SC 粒子少量、カワゴギバミミス少量。
A	89	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまり強。褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 微量。
A	90	堆石盛土（YL Ｉ土体）	7.5YR5/6	明褐色	しまり強。黒褐色土多量、褐色Ｌ少量。
A	91	堆石盛土（KU ～ YL Ｉ土体）	10YR3/4	暗褐色	しまり強。上部に黒色土少量。
A	92	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまりやや強。褐色Ｌ粒子少量、大源 SC 多量、橙色 SC 微量。
A	93	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまり強。褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 少量、橙色 SC 微量。
B,C	94	堆石盛土（暗褐色土土体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。YL 小ブロック少量、暗褐色Ｌブロック少量、大源 SC 少量。
B,C	95	堆石盛土（暗褐色土土体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや強。褐色Ｌ多量、黄色Ｌブロック多量、大源 SC 微量、橙色 SC 微量。
B,C	96	堆石盛土（黒褐色土土体）	10YR2/3	黒褐色	しまりやや強。暗褐色Ｌ多量、大源 SC 微量、95 より黒色土多い。
B	97	堆石盛土（暗褐色土土体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。黒褐色土多量、大源 SC 微量、橙色 SC 微量。
B,C	98	堆石盛土（褐色土土体）	7.5YR4/6	褐色	しまりやや強。黄褐色Ｌブロック少量、黒色土なし。大源 SC なし。
B	99	堆石盛土（暗褐色土土体）	7.5YR3/4	暗褐色	しまりやや強。黄褐色Ｌブロックあり。大源 SC なし。98 より黒色土多い。
B	100	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 少量。
C	101	堆石盛土（SC Ｉ？土体）	5YR4/8	赤褐色	SC Ｉ？大ブロック。しまりやや弱。
C	102	堆石盛土（KU ～ YL2 土体）	7.5YR4/4	褐色	KU ～ YL2 大ブロック。しまり強。
C	103	堆石盛土（黄褐色Ｌ土体）	10YR5/8	黄褐色	しまりやや強。
C	104	堆石盛土（黒褐色土土体）	5YR2/2	黒褐色	しまりやや弱。褐色Ｌ多量、大源 SC 少量。
D	105	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりやや弱。暗褐色Ｌ少量、大源 SC 微量、橙色 SC 少量。
D	106	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまりやや弱。大源 SC 少量、橙色 SC 少量。
D	107	堆石盛土（黒褐色土土体）	5YR2/1	黒褐色	しまりやや強。乗色土？やや多量、大源 SC 少量、橙色 SC 少量。
D	108	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりやや強。橙色 SC 微量、下部にカワゴギバミミス微量。
D	109	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまりやや強。大源 SC 多量、橙色 SC 多量。
E	110	堆石盛土（暗褐色Ｌ土体）	10YR3/3	暗褐色	YL・SC Ｉ大ブロック。しまりやや弱。
E	111	堆石盛土（暗褐色土土体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。褐色Ｌ少量。
E	112	堆石盛土（YL 土体）	7.5YR4/4	褐色	しまりやや弱。
E	113	堆石盛土（暗褐色Ｌ土体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。明褐色Ｌ・暗褐色Ｌ混じり。
E	114	堆石盛土（暗褐色Ｌ土体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりやや弱。褐色Ｌ・暗褐色Ｌ混じり。
E	115	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまり強。明褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 多量、橙色 SC 少量。
E	116	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりやや強。上部に帯状褐色Ｌ、大源 SC 微量、橙色 SC 少量。
E	117	堆石盛土（SC Ｉ土体）	10YR4/6	褐色	しまり強。帯状黒色土少量、L ブロックは混ざっていない。
E	118	堆石盛土（YL2 土体）	10YR4/6	褐色	しまりやや強。黒色土少量。
E	119	堆石盛土（黒褐色土土体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりやや強。SC Ｉ中～小ブロック少量、大源 SC 少量、橙色 SC 微量。
E	120	堆石盛土（YL 土体）	7.5YR4/4	褐色	しまり弱。黒色土多量。
E	121	堆石盛土（黒色土土体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強。明褐色・褐色Ｌ中ブロックやや多量、大源 SC 微量、橙色 SC 微量。
E	122	堆石盛土（YL 土体）	10YR4/4	褐色	しまり強。黒色土多量。
E	123	堆石盛土（暗褐色土土体）	7.5YR3/4	暗褐色	しまりやや強。黄色・褐色Ｌブロック混じり、大源 SC 微量。
E	124	堆石盛土（暗褐色土土体）	7.5YR3/3	暗褐色	注記なし。
E	125	堆石盛土（明褐色Ｌ土体）	7.5YR5/8	明褐色	しまりやや強。大源 SC 微量。

第 10 表　土層観察表（3）

断面図	番号	分類	色調	土色名	土質
E	126	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	10YR4/6	褐色	しまり強、大源 SC 微量。
E	127	噴石盛土（SC Ｌ主体）	7.5YR4/6	褐色	しまりやや弱、帯状黒色土少量。
E	128	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまり弱、黒褐色土混じり、黒褐色土に大源 SC 極多量。
E	129	噴石盛土（黒色土主体）	7.5YR2/1	黒色	しまりややゆ強、大源 SC 多量、橙色 SC 少量、カワゴ平パミス少量。
E	130	噴石盛土（YL 主体）	7.5YR4/4	褐色	しまりややゆ強、黒色土多量、大源 SC ややゆ多量。
E	131	噴石盛土（黒色土主体）	7.5YR2/1	黒色	しまりややゆ強、褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 極多量、橙色 SC ややゆ多量、カワゴ平パミス少量。
F	132	噴石盛土（YL 主体）	7.5YR4/4	褐色	YL ローム大ブロック。
F	133	噴石盛土（YL 主体）	7.5YR4/4	褐色	YL ローム大ブロック。
F	134	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまりややゆ強、黒褐色土混じり、橙色 SC 粒子少量。
F	135	噴石盛土（黒色土主体）	7.5YR2/1	黒色	しまり極強、暗褐色Ｌ少量、大源 SC 少量、橙色 SC 粒子多量。
F	136	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	10YR4/4	褐色	しまり強、黒褐色土混じり、橙色発泡 SC 少量、カワゴ平パミス少量。
F	137	噴石盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまり強、暗褐色Ｌブロック多量、褐色Ｌ小ブロック中量、橙色発泡 SC 中量、139 に同じ。
F	138	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまり強、黒褐色土微量、大源 SC 微量、赤みが強い。
F	139	噴石盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりややゆ強、暗褐色Ｌブロック多量、褐色Ｌ小ブロック中量、橙色発泡 SC 中量、137 に同じ。
F	140	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	10YR4/4	褐色	しまり強、黒褐色土混じり、大源 SC 微量。
F	141	噴石盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまり強、褐色Ｌブロック中量、大源 SC 少量。
F	142	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/6	褐色	しまりややゆ弱、黒褐色土中量、大源 SC 中量。
F	143	噴石盛土（NL? 主体）	7.5YR5/6	明褐色	しまりややゆ弱、黒褐色土微量、SC なし。12・20・31 に同じ。
F	144	噴石盛土（黒褐色土主体）	10YR2/3	黒褐色	しまりややゆ強、NL ブロック微量、褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 多量。
F	145	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/6	褐色	しまりややゆ弱、黒褐色土中量、大源 SC 中量。
F	146	噴石盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりややゆ強、明褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 多量。
F	147	噴石盛土（黒褐色土主体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまりややゆ強、暗褐色Ｌ混じり、明褐色Ｌブロック多量、大源 SC 微量。
F	148	噴石盛土（YL? 主体）	10YR3/3	暗褐色	YL? ロームブロック、カワゴ平パミス微量。
F	149	噴石盛土（黒色土主体）	7.5YR2/1	黒色	しまり強、褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC 中量。
F	150	噴石盛土（黒褐色土主体）	7.5YR3/2	黒褐色	しまりややゆ強、褐色Ｌ小ブロック中量、大源 SC 少量。
F	151	噴石盛土（暗褐色Ｌ主体）	10YR3/4	暗褐色	しまりややゆ強、黒褐色土少量、大源 SC 微量。
F	152	植物痕（腐孔）	10YR2/2	黒褐色	根による腐孔。
F	153	噴石盛土（黒色土主体）	7.5YR2/1	黒色	褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 中量、橙色 SC 粒子微量、カワゴ平パミス微量。
F	154	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまり強、黒褐色土少量、暗褐色Ｌ少量、大源 SC 微量。155 に同じ。
F	155	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまり強、黒褐色土少量、暗褐色Ｌ少量、大源 SC 微量。154 に同じ。
F	156	噴石盛土（褐色Ｌ主体）	7.5YR4/4	褐色	しまり強、暗褐色Ｌ混じり、黒褐色土微量。
F	157	噴石盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりややゆ強、暗褐色Ｌブロック少量、大源 SC 中量、橙色発泡 SC 中量、炭化物微量。27 に同じ。
I	158	噴石盛土（黒褐色土主体）	7.5YR2/2	黒褐色	しまりややゆ強、褐色Ｌ小ブロック微量、大源 SC なし、橙色 SC 粒子微量。
I	159	噴石盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりややゆ弱、黒褐色土混じり、NL ブロック少量、褐色Ｌ小ブロック少量、大源 SC 少量、炭化物微量。
I	160	噴石盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりややゆ強、暗褐色Ｌ小ブロック中量、大源 SC 少量、橙色 SC 粒子微量。
I	161	噴石盛土（黒褐色土主体）	10YR2/2	黒褐色	しまりややゆ強、暗褐色Ｌブロック微量、大源 SC 微量、橙色 SC 粒子微量。
I	162	噴石盛土（暗褐色Ｌ主体）	7.5YR3/3	暗褐色	しまりややゆ強、黒褐色土混じり、大源 SC 微量、橙色 SC 粒子微量。

第 11 表　H12-6　天神塚古墳　出土遺物観察表（1）

番号	挿図	図版	層位	トレンチ	種別	細別	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
1	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	壺	(20)	22.6	(2.8)	—	やや粗、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	10YR7/4	にぶい黄橙	内外面黒斑
2	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	壺	—	—	(2.0)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR8/3	浅黄橙	
3	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	壺	—	—	(4.9)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR6/6	橙	2.5YR6/6	橙	
4	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	小型壺	—	—	(4.0)	—	精緻、白色粒子	良好	5YR4/6	赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	
5	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	壺	(25)	—	(2.9)	12.0	やや粗、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	底部木葉痕
6	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	壺？	(25)	—	(0.5)	7.0	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR5/4	にぶい黄褐	上面 剥離、底部ヘラ痕
7	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	不明	土師器	壺？	—	—	(2.9)	—	精緻、黒色粒子	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR4/6	褐	
8	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	甕	—	—	(3.3)	—	やや粗、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR8/4	浅黄橙	
9	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	甕	—	—	(3.3)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/6	橙	口縁部上面強ヨコ面取り
10	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	不明	土師器	S 字甕	—	—	(1.4)	—	精緻、赤色粒子・白色粒子・雲母	良好	2.5Y4/3	暗灰黄	10YR4/2	灰黄褐	頸部内面弱い面取り
11	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	不明	土師器	S 字甕	—	—	(5.7)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR6/3	にぶい黄橙	粘本（外面）
12	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	不明	土師器	台付甕	(20)	—	(3.1)	—	精緻、白色粒子・雲母	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
13	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	台付甕	(20)	—	(3.2)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	10YR5/3	にぶい黄褐	5YR6/6	橙	
14	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	坏	45	13.2	5.4	6.0	精緻、黒色粒子・白色粒子	良好	2.5YR6/6	橙	2.5YR5/6	明赤褐	底部粗いヘラナデ
15	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	坏	40	12.0	5.9	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	5YR6/6	橙	5YR5/6	明赤褐	底部（ヘラ？）ナデ
16	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	坏	—	—	(3.4)	—	精緻、黒色粒子・白色粒子・白色粒子	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/4	にぶい黄橙	内外面ヨコヘラナデ？
17	第 69 図	PL.33	墳丘盛土	2-1Tr.	土師器	高坏	—	—	(2.4)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	5YR7/6	橙	7.5YR7/6	橙	
18	第 69 図	PL.35	墳丘盛土	2-1Tr.	古銭	寛永通宝	100	縦 2.4	長 2.4	厚 0.1	—	—	—	—	—	—	3.47 g

第 11 表　H12-6　天神塚古墳　出土遺物観察表（2）

番号	掲図	図版	層位	トレンチ	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
19	第 70 図	PL.33	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	甕	(20)	17.0	(5.5)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子少	良好	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/6	橙	口縁端部内面肥厚
20	第 70 図	PL.33	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	小型壺	(20)	–	(7.2)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	10YR5/4	にぶい黄褐	7.5YR5/6	明褐	内外面黒斑、体部下半ヘラナデ
21	第 70 図	PL.33	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	壺？	(20)	–	(2.0)	7.6	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	2.5YR6/3	にぶい黄	底部木葉痕
22	第 70 図	PL.33	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	坏	25	13.4	4.5	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/6	橙	底部ヘラナデ？
23	第 70 図	PL.34	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	坏	(20)	12.4	(2.7)	–	精緻、黒色粒子・雲母	良好	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	須恵器模倣坏、丁寧なつくり
24	第 70 図	PL.34	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	坏？	–	–	(2.7)	–	精緻、黒色粒子・雲母	良好	7.5YR5/6	明褐	7.5YR4/6	褐	高坏の可能性あり
25	第 70 図	PL.34	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	坏？	–	–	(3.0)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	10YR8/4	浅黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	高坏の可能性あり
26	第 70 図	PL.34	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	坏	–	–	(3.2)	–	精緻、白色粒子	良好	7.5YR6/6	橙	5YR6/4	にぶい橙	内面ハケ後ヨコナデ
27	第 70 図	PL.34	大溜 SC	2-1Tr.	土師器	高坏	(20)	–	(2.4)	14.0	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子多少	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR6/6	橙	
28	第 70 図	PL.34	旧表土	2-1Tr.	土師器	高坏	(25)	–	(8.5)	12.8	精緻、黒色粒子・雲母	良好	2.5YR6/8	橙	7.5YR8/8	黄橙	脚部内面絞り痕・指押え痕
29	第 71 図	PL.34	土層不明	2-1Tr.	土師器	壺	(20)	20.6	(2.1)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子少	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	
30	第 71 図	PL.34	土層不明	2-8Tr.	土師器	壺	(20)	19.0	(3.5)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい褐	7.5YR6/6	橙	口縁端部内面ヒダ状折オサエ
31	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	壺？	(20)	16.8	(2.2)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR5/6	明赤褐	7.5YR5/3	明褐	
32	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	壺	(20)	11.4	(3.3)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR4/4	褐	5YR5/4	にぶい赤褐	頸部に横方向の沈線、外面黒斑
33	第 71 図	PL.34	不明	1-2TR.	土師器	小型壺	(25)	9.4	(2.6)	–	精緻、黒色粒子少・白色粒子少・雲母	良好	5YR6/6	橙	2.5YR5/6	明赤褐	内外面赤彩
34	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	壺	–	–	(4.4)	–	精緻、黒色粒子	良好	5YR8/6	橙	5YR6/6	橙	
35	第 71 図	PL.34	不明	2-8Tr.	土師器	壺？	–	–	(5.5)	–	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR4/6	褐	5YR4/4	にぶい赤褐	高坏の可能性あり
36	第 71 図	PL.34	不明	1-1Tr.	土師器	壺	–	–	(5.0)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	
37	第 71 図	PL.34	不明	2-5Tr.	弥生・土師器	壺	(25)	–	(2.4)	7.4	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	10YR6/3	にぶい黄橙	7.5YR5/3	にぶい褐	底部ドーナツ状粘土帯、内面黒斑
38	第 71 図	PL.34	不明	1-7Tr.	弥生・土師器	壺	(80)	–	(2.2)	5.8	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	7.5YR5/4	にぶい褐	5YR5/4	にぶい赤褐	底部ドーナツ状粘土帯
39	第 71 図	PL.34	不明	1-2TR.	土師器	甕	(20)	18.0	(7.3)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	5YR5/6	明赤褐	5YR6/8	橙	
40	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	台付甕	(20)	14.4	(7.6)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母多少量	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	7.5YR6/4	にぶい橙	内外面黒斑
41	第 71 図	PL.34	不明	1-5Tr.	土師器	甕	(20)	20.6	(5.5)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR7/6	橙	5YR6/6	橙	
42	第 71 図	PL.34	不明	1-1Tr.	土師器	甕	(20)	14.4	(4.5)	–	精緻、赤色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/3	にぶい褐	外面黒斑
43	第 71 図	PL.34	不明	不明	土師器	甕	(20)	13.8	(3.3)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
44	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	甕	(20)	15.6	(5.4)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	
45	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	S 字甕	–	–	(3.1)	–	精緻、黒色粒子少・雲母	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
46	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	S 字甕	–	–	(2.6)	–	精緻、白色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	2.5YR5/6	明赤褐	
47	第 71 図	PL.34	土層不明	2-2Tr.	土師器	甕	(20)	–	(2.9)	7.4	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	2.5Y7/3	浅黄	10YR4/3	にぶい黄褐	
48	第 71 図	PL.34	土層不明	2-2Tr.	土師器	甕	(20)	–	(2.5)	7.6	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	5YR6/4	にぶい橙	外面黒斑
49	第 71 図	PL.34	不明	2-7Tr.	土師器	甕？	–	–	(6.0)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	5YR4/4	にぶい赤褐	7.5YR3/2	黒褐	外面黒斑
50	第 71 図	PL.34	不明	1-1Tr.	土師器	S 字甕	(90)	–	(3.1)	–	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	10YR4/2	灰黄褐	5YR4/4	にぶい赤褐	
51	第 71 図	PL.35	不明	1-5Tr.	土師器	台付甕	(90)	–	(3.5)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	橙	

第 11 表　H12-6　天神塚古墳　出土遺物観察表（3）

番号	棟図	図版	層位	トレンチ	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
52	第 71 図	PL.35	不明	1-5Tr.	土師器	台付甕	(90)	—	(2.8)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR5/6	明赤褐	7.5YR5/4	にぶい褐
53	第 71 図	PL.35	不明	1-1Tr.	土師器	台付甕	(50)	—	(3.8)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙
54	第 71 図	PL.34	不明	2-4Tr.	土師器	S 字甕	(20)	—	(2.7)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子少・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR5/3	にぶい黄褐
55	第 71 図	PL.34	土層不明	不明	土師器	台付甕	(90)	—	(1.9)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子少・雲母	良好	10YR5/3	にぶい黄褐	2.5Y4/3	オリーブ褐
56	第 71 図	PL.35	不明	2-8Tr.	土師器	坏	—	—	(3.2)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR6/8	橙	2.5YR6/8	橙
57	第 71 図	PL.35	不明	2-8Tr.	土師器	坏	—	—	(3.5)	—	精緻、黒色粒子・白色粒子少・雲母	良好	5YR5/6	明赤褐	5YR5/6	明赤褐
58	第 71 図	PL.35	土層不明	不明	土師器	坏	—	—	(4.1)	—	精緻、黒色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	5YR5/4	にぶい赤褐
59	第 71 図	PL.35	不明	1-1Tr.	土師器	高坏	—	—	(2.9)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR6/6	橙	5YR6/6	橙
60	第 71 図	PL.35	不明	1-1Tr.	土師器	高坏	—	—	(2.6)	—	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	10YR7/4	にぶい黄橙	7.5YR7/4	にぶい橙
61	第 71 図	PL.35	不明	1-5Tr.	土師器	坏	(20)	—	(2.3)	7.2	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR5/6	明赤褐	5YR4/6	赤褐
62	第 71 図	PL.35	不明	不明	土師器	器台	(30)	—	(2.2)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR5/6	明赤褐	5YR5/8	明赤褐
63	第 71 図	PL.35	不明	1-5Tr.	土師器	ミニチュア	(100)	—	(1.8)	3.6	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	2.5Y5/3	黄褐	10YR6/4	にぶい黄橙
64	第 71 図	PL.35	土層不明	不明	土師器	高坏	(20)	—	(4.8)	—	精緻、黒色粒子・白色粒子	良好	2.5YR5/8	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐
65	第 71 図	PL.35	不明	1-2TR.	土師器	高坏	(70)	—	(5.1)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母・赤色粒子少	良好	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙
66	第 71 図	PL.35	不明	2-7Tr.	土師器	高坏	(80)	—	(6.2)	—	中砂粗、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR6/6	橙	5YR5/6	明赤褐	内面絞り痕
67	第 71 図	PL.35	不明	1-1Tr.	土師器	高坏	—	—	(1.4)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子	良好	7.5YR6/4	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	
68	第 71 図	PL.35	不明	2-8Tr.	土師器	高坏	(20)	—	(3.4)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・雲母	良好	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR4/2	灰黄褐	
69	第 71 図	PL.35	土層不明	不明	土師器	高坏	—	—	(5.1)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR6/6	橙	7.5YR6/6	橙	
70	第 71 図	PL.35	不明	2-8Tr.	土師器	高坏	(80)	—	(4.6)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/4	にぶい橙	脚部二対二方透孔
71	第 71 図	PL.35	土層不明	不明	土師器	高坏	(70)	—	(6.3)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR5/6	明赤褐	7.5YR5/4	にぶい褐	脚部内面絞り痕
72	第 71 図	PL.35	不明	2-4Tr.	土師器	高坏	(70)	—	(6.1)	—	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR5/6	明赤褐	5YR6/6	橙	
73	第 71 図	PL.35	不明	不明	須恵器	甕?	—	—	(2.0)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母各少	良好	7.5Y4/1	灰	N 2/	黒	断面灰赤褐色、胴部波状文
74	第 71 図	PL.35	不明	1-4Tr.	須恵器	甕?	(20)	—	(4.5)	13.2	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/1	黄灰	
75	第 71 図	PL.35	不明	2-4Tr.	陶器	甕	(20)	27.8	(6.3)	—	精緻、黒色粒子・白色粒子	良好	5YR3/4	明赤褐	5Y5/3	灰オリーブ	常滑、外面自然釉
76	第 71 図	PL.35	不明	1-3Tr.	灰釉陶器	碗	(90)	—	(2.1)	6.2	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	2.5Y7/2	灰黄	7.5Y7/1	灰白	底部糸切り
77	第 71 図	PL.35	不明	2-7Tr.	陶器	油受け皿	50	10.4	2.0	4.4	精緻、白色粒子・赤色粒子各少	良好	5YR3/4	暗赤褐	5YR4/6	赤褐	瀬戸・美濃、底部回転ヘラ削り、鉄釉
78	第 71 図	PL.35	不明	2-7Tr.	陶器	油受け皿	25	9.6	2.0	3.8	精緻、黒色粒子・赤色粒子	良好	5YR4/3	にぶい赤褐	5YR2/4	極暗赤褐	瀬戸・美濃、底部回転ヘラ削り、鉄釉
79	第 71 図	PL.35	不明	1-7Tr.	陶器	油受け皿	70	10.4	2.3	4.8	精緻、赤色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR6/6	橙	瀬戸・美濃、底部回転ヘラ削り、鉄釉
80	第 71 図	PL.35	不明	不明	古銭	寛永通宝	100	幅 2.1	長 2.1	厚 0.1	—	—	—	—	—	—	1.85 g

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値
※選種：脚台・高台の付くものについては、脚（高）台径に置き換える。

7. 岩倉 A 遺跡　第 4 地区

所在地　富士市大淵 7608　地先

調査面積　28㎡（調査対象面積 1,700㎡）

調査期間　平成 12 年 8 月 28 日～ 8 月 29 日

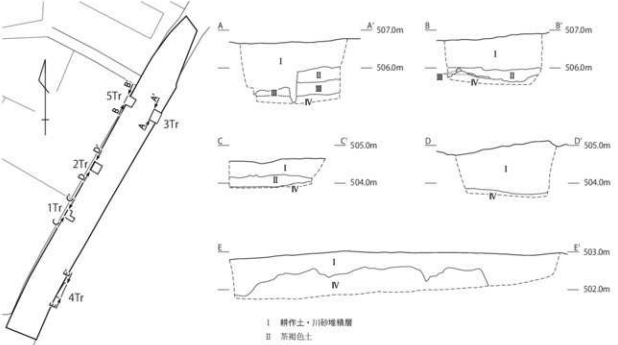
調査原因　市道富士本線改良工事

遺跡の概要　H11-8 参照（p13）。

調査の概要　トレンチを 5 ヶ所設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

第 72 図　H12-7　調査地位置図（1：5,000）



第 73 図　H12-7　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

8. 中原遺跡　第 23 地区

所在地　富士市伝法 443-1　外

調査面積　188㎡（調査対象面積 3,046㎡）

調査期間　平成 12 年 9 月 5 日～ 9 月 7 日

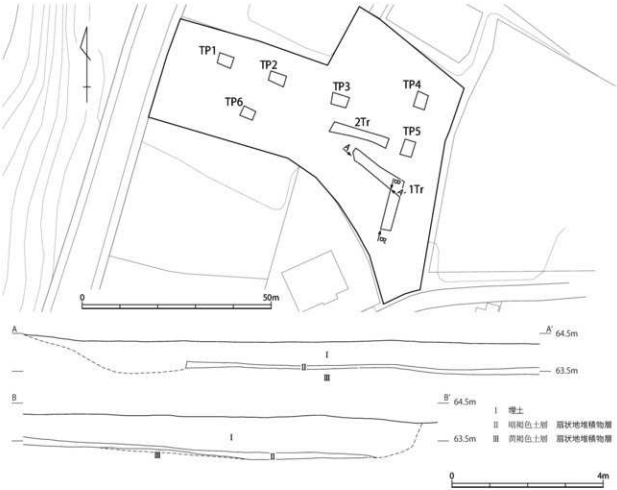
調査原因　倉庫・事務所建設工事

遺跡の概要　H11-9 参照（p14）。

調査の概要　トレンチ 2 本とテストピット 6 ヶ所を設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　TP1 ～ 6 においては、現地表下 2 ～ 3 m まで建築廃材を含む埋土を確認した。また、1・2 トレンチにおいては現地表下 1m ほどの深さの埋土がされ、その直下に扇状地堆積層を検出したが、遺構および遺物は確認されなかった。遺物包含層の大部分は過去の掘削を伴う埋め立てにより失われているものと考えられる。

第 74 図　H12-8　調査地位置図（1：5,000）



第 75 図　H12-8　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

9. 伝法１古墳群　伊勢塚古墳４次

所在地　富士市伝法 3102-1　外

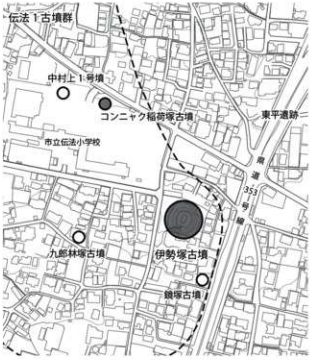
調査面積　50㎡（調査対象面積 240㎡）

調査期間　平成 12 年９月６日～９月８日

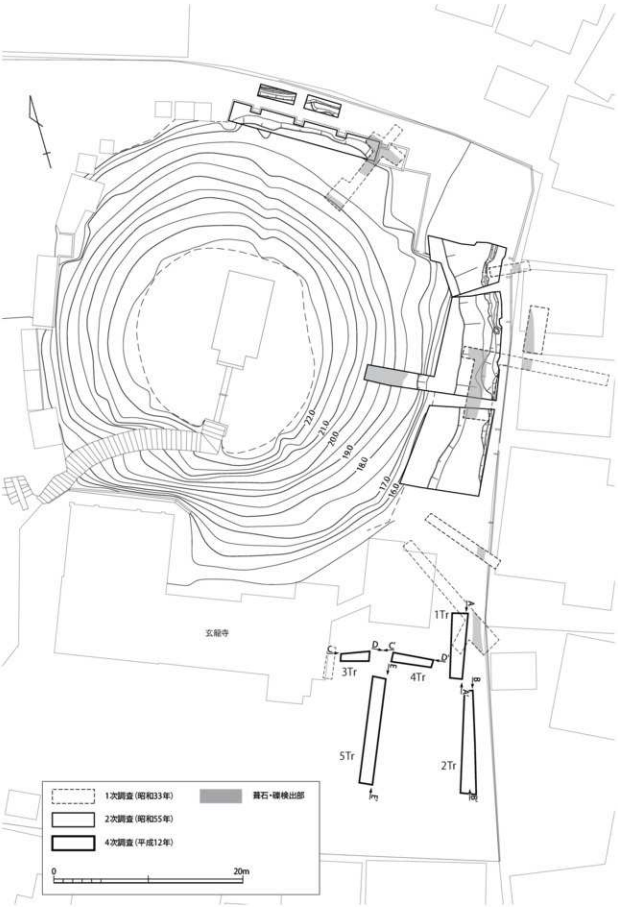
調査原因　庫裡改築

遺跡の概要　伊勢塚古墳は、富士山南麓に延びる大淵扇状地の最南端にある緩斜面上、標高 15m 付近に立地しており、500m 程南側には潤井川（小潤井川）、300m 程西側には伝法沢川が流れる。

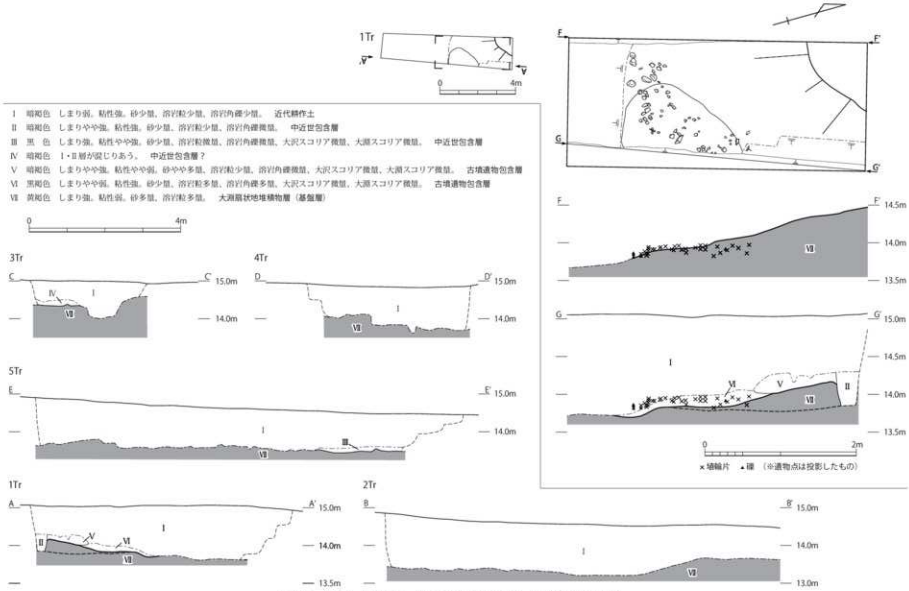
昭和 33 年（１次調査）、昭和 55 年（２次調査）の２度にわたって墳丘周囲の発掘調査が実施されており、その成果から、当古墳は馬蹄形の周溝を有する二段築成の円墳（径 54m）であったと推定されているところであるが[1]、周溝と墳形の形状の乖離からその復元案を疑問視する向きもある[2]。外部施設については、１次調査において１段目･２段目ともに葺石が検出されているほか、



第 76 図　H12-9　調査地位置図（1：5,000）



第 77 図　H12-9　伊勢塚古墳平面図（1：400）



第 78 図　H12-9　伊勢塚古墳　トレンチ平面図（1：50）・土層断面図（1：100）

２次調査では多数の埴輪片が検出されており、一部の破片が鈴木敏則氏によって報告されているが[30]、大部分は未報告である。外面タテハケで低い突帯を有する川西Ⅴ期の円筒埴輪のほか、形象埴輪片が存在する。

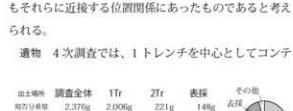
伊勢塚古墳の周囲から北側にかけては、金銅装馬具の出土が伝えられる九郎林塚古墳や鏡の出土が伝わる鏡塚古墳、甲冑の出土が伝わる兜塚古墳など、伊勢塚古墳に近い時期とみられる古墳が古地する[4]。続く６世紀後葉以降には、伝法沢川東岸の緩斜面に総数 60 基前後になる伝法古墳群[31]が形成されており、伊勢塚古墳の築造前後から、伝法周辺において古墳群形成が本格化していったことが窺われる。

調査の概要　今回の調査地では、現在の墳丘から玄龍寺を挟んだ南側においてトレンチを５ヶ所に設定し、重機による掘削後、人力精査、土層断面観察を行い、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果

遺構　いずれのトレンチにおいても、近代の耕作に伴う削平が基盤層近くにまで及んでおり、多くのトレンチでは古墳時代の遺物包含層は検出されなかった。唯一、１トレンチにおいて多量の埴輪片を含んだⅤ・Ⅵ層が検出されたことから、入念な精査を行ったところ、トレンチ北西隅を最高所として南から東に向って緩やかに下降する基盤層の落ち込みが検出された。この基盤層の落ち込みの低い部分に堆積していた埴輪を含んだ包含層のみが、かろうじて後世の削平を免れたものと判断される。この落ち込みの性格については、部分的な調査であることに加え、南側が削平されているために、人工的な掘り込みであるのか自然の傾斜であるのかの判別はつかなかったが、底面や包含層に残された多量の埴輪片は狭い範囲にも関わらず総重量 5,574g にも及んでおり、墳丘本体やその付属施設に直接関連するか、または少なくともそれらに近接する位置関係にあったものであると考えられる。

遺物　４次調査では、１トレンチを中心としてコンテナ２箱分の遺物が出土した。その内容は、土師器の須恵器模倣坏（34）を除いてすべて埴輪片である。それらのうち 34 点を図示したが、抽出遺物の割合については、第 79 図を参照されたい。



第 79 図　H12-9　伊勢塚古墳　報告遺物の割合

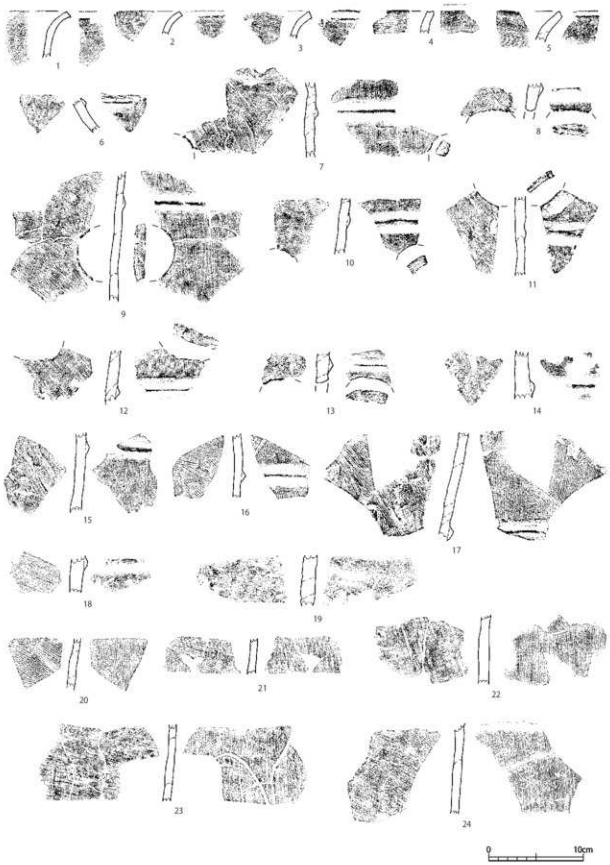
（１）埴　輪

伊勢塚古墳の埴輪については鈴木敏則氏が破片資料４点を報告しているほか[6]、富士市立博物館収蔵庫には伊勢塚古墳に関連する遺物コンテナが 10 箱程度保管されており、それらの由来は２次調査の出土遺物や表採資料が多数を占めているものとみられる。本来はこれらの資料も併せて整理・分類し、伊勢塚古墳の埴輪の全体像へと少しでも近づくことに努めるべきところではあるが、今回は４次調査出土資料のみの提示にとどめる。したがって円筒埴輪の細部形態等の分類は現時点では控え、概要や特徴の記述を中心におこなう。

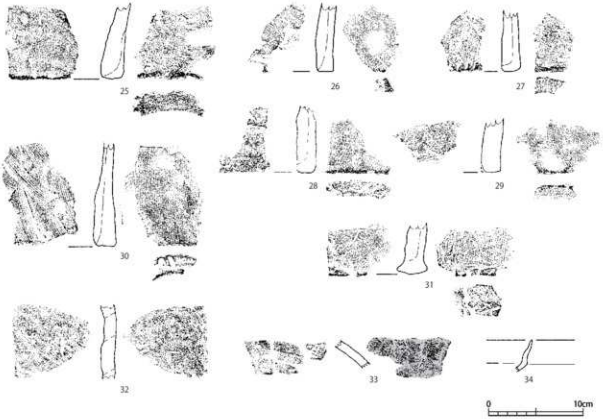
出土した埴輪はすべて無黒斑で窖窯焼成によるものである。調整は一次調整タテハケまたはナナメハケで二次調整を欠く。色調は全体として内外面ともに橙色や赤褐色のものが目立つが、15 は外面がにぶい橙色、内面が暗黄褐色とほかの資料と印象が異なる（巻頭図版２）。

１～５は普通円筒埴輪の口縁部片である。破片の為に口縁部高は不明であるが、形態による細分は可能である。１～３、５は緩やかに外反し端部が外側を向くが、４はわずかな外反により端部が上方を向いている。６は朝顔形円筒埴輪の頸部突帯部分とみられる。

７～24 は胴部片である。そのうち、７～18 については突帯にかかっている。突帯は総じて低く、断面三角形の貼り付けたものが主体であるが、11 のように強いヨコナデによって低い突帯を作りだすものも含まれている。24 は上下端にヨコナデが確認できるため、突帯間隔を推定する上で重要である。これと残りの良い９とを勘案すれば、突帯間隔は 10.5～11cm 程度と推定される。７～13 には透穴がみとめられ、形状はすべて円形となる。９を参考に透穴の径を復元すれば、5.5～6cm 程となる。23 は外面に逆Ｕ字形のヘラ描きがみとめられる。この形態のヘラ描きについては、近隣地域では伊豆の国市多田大塚６号墳の円筒埴輪に類例がある（第３章第２節で詳述）。胴部径については、いずれの資料も小破片のため反転復元には心許ないものの、推定できるものについては参考値として計測を試みている。その結果、20cm 前後となる小型品（７・17・22・24）



第 80 図　H12-9　伊勢塚古墳　出土遺物実測図（円筒埴輪）（1：4）



第 81 図　H12-9　伊勢塚古墳　出土遺物実測図（円筒埴輪、形象埴輪、土師器）（1：4）

のほかに、明らかに 30cm 以上となる大型品（9・23）も存在する可能性があることが注意される。

25 ～ 31 は円筒埴輪の底部片である。参考値としての底部径は、25 が 21.2cm、30 が 20cm である。底部圧痕には、棒状圧痕（26･28･30･31）と藁状圧痕（27）、また平滑なもの（29）が確認される。また底部断面にはＬ字状の接合痕がみとめられるものが目立っており（25 ～ 28・31）、注意される。

32・33 は形象埴輪片と判断したが、種類は不明である。33 は外面に赤彩がみとめられる。

（２）土師器

34 は土師器の須恵器蓋模倣の坏である。端部のつくりは鋭く丁寧であり、模倣坏のなかでは古相に位置づけられるとみられることから、TK23 ～ TK47 型式併行期頃にのぼる資料とみられる。

注

1）後藤守一ほか「伊勢塚古墳」「吉原市の古墳」吉原市教育委員会、1958 年。
志村　博「伊勢塚古墳周溝緊急発掘調査報告」「富士市埋蔵文化財発掘調査報告書」富士市教育委員会、1983 年。
渡井義彦「富士市の埋蔵文化財（古墳編）」富士市教育委員会、1988 年。

なお、今回掲載した調査履歴図（第 77 図）における１次調査のトレンチ位置については、「吉原市の古墳」掲載のトレンチ配置図と現在の測量図とに齟齬が生じていたため、墳頂部の祠を基準に新たにトレースした推定のものである。

2）「静岡県の前方後円墳―資料編―」では造出付円墳とされている（静岡県教育委員会「静岡県の前方後円墳―資料編―」静岡県文化財調査報告書　第 55 集、2001 年）。なお、静岡大学人文学部考古学研究室所蔵の伊勢塚古墳測量図（1955 年頃測量）によると、南側に墳丘がさらに張り出す帆立貝形前方後円墳のような姿が記録されているが、同時期に測量された「吉原市の古墳」掲載の墳丘や周辺地形との差が大きすぎるため、真に伊勢塚古墳の実測図かどうか慎重に判断する必要がある。

3）鈴木敏則　2001「埴輪」「静岡県の前方後円墳―総括編―」静岡県文化財調査報告書　第 55 集、2001 年

4）注 1（後藤ほか 1958）

5）藤村　翔・岩林美希ほか「平成 13 年度　富士市内遺跡・伝法国久保古墳　埋蔵文化財発掘調査報告書」富士市教育委員会、2011 年。

6）注 3 文献。

第 12 表　H12-9　伊勢塚古墳　出土遺物観察表

番号	挿図	図版	トレンチ	種別	残存高(cm)	内面調整	外面調整	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
1	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(4.9)	ヨコハケ	ナナメハケ、口縁ヨコナデ	精緻、白色粒子	良好	5YR6/6	橙	7.5YR7/6	橙	
2	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(2.4)	ヨコハケ	ナナメハケ	精緻、白色粒子	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	
3	第 80 図	PL.31	表採	円筒埴輪	(3.6)	ヨコハケ、口縁ヨコナデ	ナナメハケ、口縁ヨコナデ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	橙	
4	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(2.4)	ヨコハケ	ヨコナデ	精緻、黒色粒子・赤色粒子	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	
5	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(2.2)	ナナメハケ、口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	2.5YR6/6	橙	2.5YR6/8	橙	
6	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(3.5)	ナナメハケ	タテハケ、ナナメハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	朝顔形、突帯
7	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(7.9)	タテハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	突帯、透孔、復元径21.8cm
8	第 80 図	PL.31	表採	円筒埴輪	(3.0)	ナナメハケ	タテハケ	やや粗、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	5YR6/6	橙	2.5YR6/6	橙	突帯、透孔
9	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(13.8)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子	良好	5YR7/6	橙	10R6/6	赤橙	突帯、透孔、復元径33.0cm
10	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(6.0)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR7/6	橙	10R6/6	赤橙	突帯、透孔
11	第 80 図	PL.31	iTr	円筒埴輪	(8.4)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	2.5YR5/8	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	突帯、透孔
12	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(5.8)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR7/6	橙	5YR7/8	橙	突帯、透孔
13	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(3.2)	ヨコナデ?	タテハケ	精緻、黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR6/6	橙	7.5YR6/4	にぶい橙	突帯、透孔
14	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪?	(5.1)	タテハケ	タテハケ	やや粗、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	5YR5/8	明赤褐	5YR6/8	橙	突帯、形象の可能性あり
15	第 80 図	PL.32	表採	円筒埴輪	(8.5)	タテハケ	タテハケ	精緻、白色粒子	良好	2.5Y5/2	暗灰黄	7.5YR6/4	にぶい橙	突帯
16	第 80 図	PL.32	表採	円筒埴輪	(5.7)	ヨコハケ、ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR6/6	橙	5YR4/6	赤褐	突帯
17	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(11.5)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・雲母	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	突帯、復元径 18cm ～
18	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪?	(3.9)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	2.5YR4/6	明赤褐	2.5YR4/6	赤褐	突帯、外面極めて赤い（形象の可能性あり）
19	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(5.4)	ナナメハケ後ナデ	タテハケ後ナデ?	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	7.5YR7/6	橙	5YR7/8	橙	
20	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(5.5)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/6	橙	
21	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(3.8)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR4/8	赤褐	
22	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(7.4)	タテハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	5YR6/8	橙	7.5YR6/6	橙	復元径 19.0cm
23	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(8.1)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子	良好	2.5YR7/6	橙	2.5YR6/6	橙	外面にヘラ描き、復元径30cm
24	第 80 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(9.6)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子	良好	5YR7/6	橙	5YR7/6	橙	上下端に僅かに突帯、復元径 21.8cm
25	第 81 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(7.9)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	復元底径 21.2cm
26	第 81 図	PL.32	2Tr	円筒埴輪	(7.3)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	2.5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	底部棒状圧痕
27	第 81 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(6.4)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	底部器状圧痕
28	第 81 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(7.0)	ナナメハケ、ヨコハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・雲母	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	底部棒状圧痕
29	第 81 図	PL.32	2Tr	円筒埴輪	(5.6)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	2.5YR6/8	橙	5YR6/6	橙	
30	第 81 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(10.8)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	10YR6/6	明赤褐	10YR7/4	にぶい黄褐	底部棒状圧痕、復元底径20cm
31	第 81 図	PL.32	iTr	円筒埴輪	(5.5)	ナナメハケ	タテハケ	精緻、白色粒子・雲母	良好	7.5YR7/6	橙	5YR6/8	橙	底部ハケメ?、棒状圧痕?
32	第 81 図	PL.32	iTr	形象埴輪?	(7.8)	不明	ヨコナデ	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR6/6	橙	7.5YR7/6	橙	
33	第 81 図	PL.32	iTr	形象埴輪?	(4.1)	ヨコハケ	タテハケ、ヨコナデ	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR6/8	橙	5YR6/8	橙	外面赤彩
34	第 81 図	PL.32	iTr	土師器坏	(3.3)	横方向ミガキ後ヨコナデ	横方向ミガキ後ヨコナデ	精緻	良好	2.5YR5/6	明赤褐	5YR6/6	橙	須恵器蓋模倣坏

※　復元径　いずれの資料も図示した範囲での残存率が20%に満たない小破片であるが、復元径がある程度推定できるものについては目安の値として特に示した。

10. 善得寺廃寺跡　第２地区

所在地　富士市今泉５丁目 15-6

調査面積　81㎡（調査対象面積 500㎡）

調査期間　平成 12 年９月 25 日～９月 27 日

調査原因　善得寺公園整備工事

遺跡の概要　善得寺廃寺跡は中世の寺院、善得寺があったとされる場所である。善得寺は、応安３年（1370）、鎌倉円覚寺出身の大勲策禅師を開山として関東管領執事上杉朝宗により建立された福王寺を前身とし、その後、善得寺と改められた。応永 24 年（1417）、今川氏の官寺となり、河東一の大寺院になると共に、駿河東部支配の政治的･軍事的拠点となった。天文 23 年(1554)には、駿河・甲斐・相模の三国で同盟関係を結ぶため、今川義元、武田晴信、北条氏綱の三将が一堂に会した場所と伝えられる。永禄 12 年（1569）、武田氏の駿河侵攻の際に兵火にあって焼失し、その後の再建はならなかった[1]。善得寺廃寺跡の包蔵地範囲は一部が舟久保遺跡(H11-17 参照、p22）と重複しており、昭和 62 年に行われた試掘調査（第１地区）では、善得寺に関わる遺構や遺物は確認されていないが、道路跡や竪穴建物跡が検出されている。

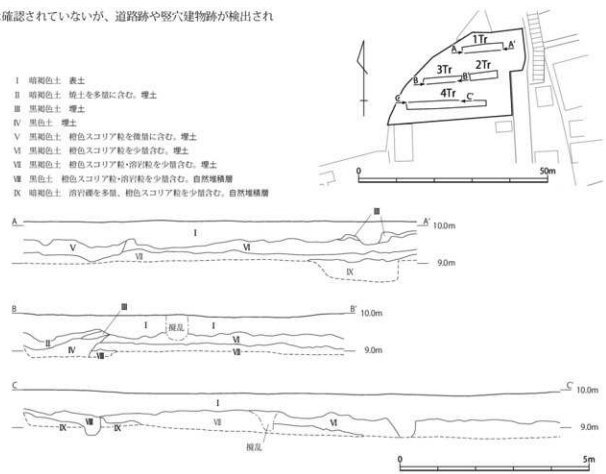
調査の概要　４本のトレンチを設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

注

1）佐々木忠夫「第四章第二節　善得寺城と三将会盟」『吉原市史』上巻、1972 年。

第 82 図　H12-10　調査地位置図（1：5,000）



第 83 図　H12-10　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

11．舟久保遺跡　第 42 地区

所在地　富士市今泉 1982　外

調査面積　380㎡（調査対象面積 2,496㎡）

調査期間　平成 12 年 10 月 4 日～ 10 月 12 日

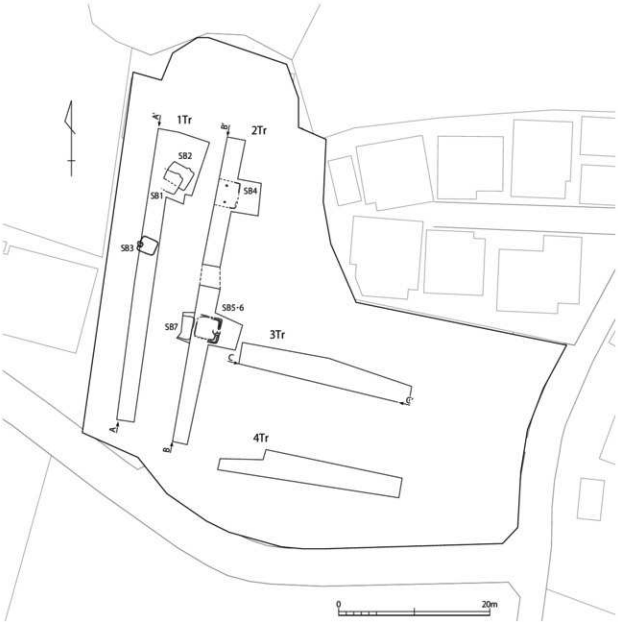
調査原因　宅地造成工事

遺跡の概要　H11-17 参照（p22）。

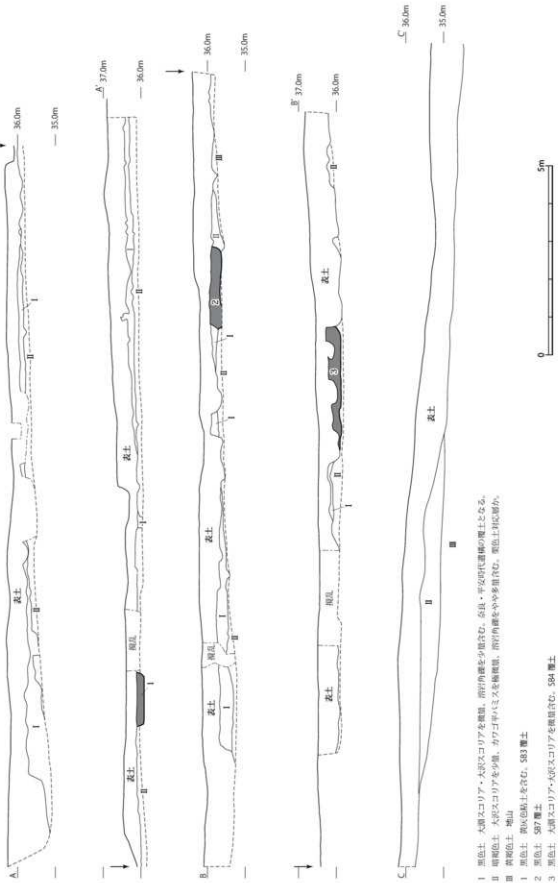
調査の概要　トレンチを 4 本設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　1・2 トレンチにおいて、奈良・平安時代の竪穴建物跡を 6 軒（SB1-6）検出した。このうち、道路新設範囲に位置するものなど 4 軒（SB3-6）については発掘調査し記録保存をおこなった。残る 2 軒(SB1・2)については保護層が確保されるため、未調査で現地保存とした。3 トレンチ・4 トレンチでは遺構・遺物は確認

第 84 図　H12-11　調査地位置図（1：5,000）



第 85 図　H12-11　トレンチ平面図（1：1,000）



1　黒色土　大湯スコリア・大沢スコリアを概観、所内調査が進行中。弥生・平安時代遺構が確認される。
Ⅱ　暗褐色土　大沢スコリアを少量、カワゴ平パミスを極稀薄、所内調査ではやや多目に。縄文土器出土。
Ⅲ　褐色土　地山
1　黒色土　腐植層上を占有、583層土
2　黒色土　587層土
3　黒色土　大湯スコリア・大沢スコリアを極薄含有、584層土

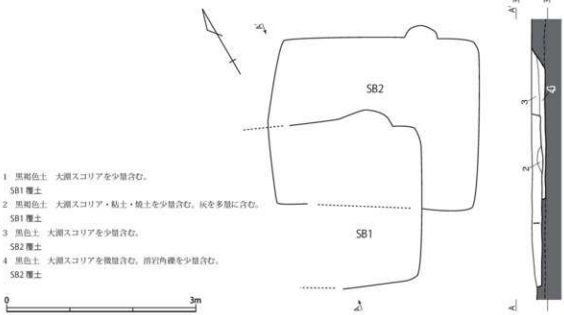
第86図　H12-11　土層断面図（1：100）

されず、埋め立て工事等により包含層が失われているものと考えられる。また、平成 13 年度に実施した工事立会では、建物跡１軒（SB7）を検出し、記録保存した。

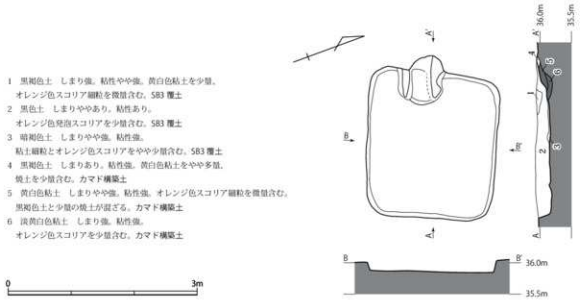
遺構　SB1 と SB2 は１トレンチ北寄りで確認され、トレンチを東に拡張して平面プランのみを検出し、現地保存とした。覆土には大淵スコリアが含まれ、SB1 が SB2 を切っている。平面プランから推定すれば、いずれも方形を呈し、北壁にカマドを有していたようである。SB1 は南北幅およそ 2.70m、東西残存幅 2.10m を測り、SB2 は南北幅 2.70m、東西幅 3.30m を測る。主軸方位はいずれも N-30°-E ほどと推定される。

SB3 は１トレンチの中央付近で検出され、発掘調査・記録保存を行った。平面形は隅丸方形で、西壁にカマドを有し、主軸方位は N-67°-W である。建物跡の規模は、主軸幅 2.30m、直交幅 2.05 m を測る。

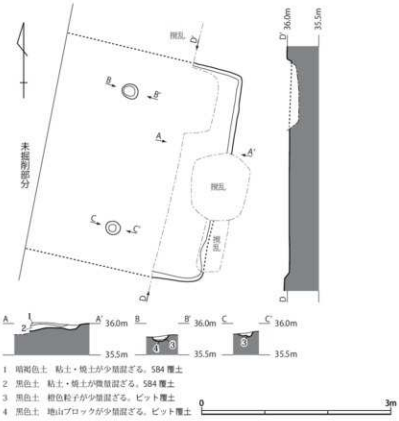
SB4 は道路新設範囲に含まれる２トレンチ北寄りで確認されたため、トレンチを東に拡張して発掘調査・記録保存を行った。東壁と、北壁および南壁の一部、２基



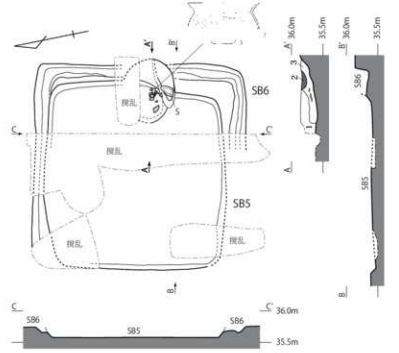
第 87 図　H12-11　SB1・SB2 実測図（1：60）



第 88 図　H12-11　SB3 実測図（1：60）



第 89 図　H12-11　SB4 実測図（1：60）



第 90 図　H12-11　SB5・SB6 実測図（1：60）

の柱穴とみられるピットを検出した。検出された東壁は、座標北より 10°ほど東に振れるようである。建物の規模は、南北幅約 3.50m、東西残存幅約 0.80m を測り、方形を呈すると推定できる。柱穴は径 22 ～ 26㎝で、東壁から 1.60 ～ 1.75 mほどに位置し、柱穴間は 2.20m を測る。

SB5・SB6 も道路新設部分に含まれる２トレンチで検出されたため、発掘調査・記録保存を行った。SB5 の覆土には大淵スコリアが含まれ、SB6 を切っている。平面形は方形で、東壁にカマドを有する。建物の規模は主軸幅 3.00m、直交幅約 2.80m を測り、主軸方位は N-100°-E ほどと推定される。

SB6 は SB5 に切られており、北壁、東壁、南壁の一部を検出したのみでカマド等の燃焼施設の位置は不明である。平面形は方形を呈するとみられ、規模は南北幅約 3.30m、東西残存幅 2.90m を測り、壁溝が検出されている。

SB7 は工事着工時の立会で確認された建物跡である。覆土には大淵スコリアが含まれ、粘土の拡がりも認められたが、カマド等の燃焼施設の位置は不明である。東半分のみ検出し、西半分は未調査で現地保存とした。規模は、南北幅 3.10m、東西検出幅 1.65m を測り、ややいびつな方形を呈する。東壁は座標北より 15°ほど東に振れるようである。

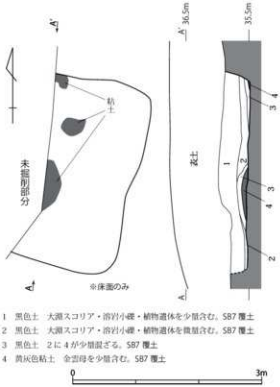
遺物　遺構が検出された１・２トレンチを中心にコンテナ１箱分程度の遺物が出土し、遺構に伴う９点を図示した。

SB3 のカマドからは、図示はできなかったが器種不明のミニチュア土器片が出土している。

SB4 より出土した４は遠江系長胴甕の口縁部であり、外側に向って「ハ」の字状に開く形状である。外面色調は浅黄橙色で、同時期の在地系の甕とは全く異なる。

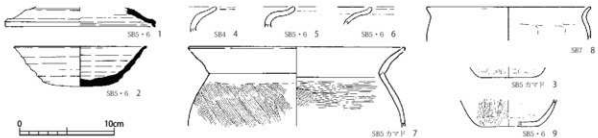
８世紀代に位置づけられよう。

１～3、5～7、9は SB5 と SB6 より検出されたものである。出土遺構を「SB5・6」と表記したものは、どちらに伴うか確定できなかった遺物である。１は須恵器の坏蓋（摘蓋）で、破片であるが天井がやや高く、丸みのある形態とみられる。２は椀形の坏身であり、器高は高く、口縁部がハの字状に外側へ開く。5・6は遠江系長胴甕の口縁部である。両者とも、頸部から口縁部に向って大きく外側へ開いた後に、上方へ摘み上がる形状である。5は外面色調がにぶい橙色であり産地も不詳であるが、6は橙色であり在地の甕と変わらない。3・9も同じく遠江系長胴甕の底部であり、3には底部に径５～10mm 程の粘土粒が付着している。7は在地系の長胴甕であり、体部は内外面ともに密なハケメ、口縁部はヨコナデによって仕上げられている。SB5 のカマドより出土した３・7の甕類を８世紀代とみれば、湖西Ⅳ期末からⅤ期に位置づけられる１・2の須恵器とも年代的な齟齬はなく、これらがともに SB5 に伴う遺物である蓋然性は高い。5・6・9についても同時期として差し支えな



1　黒色土　大源スコリア・溶岩小礫・植物遺体を少量含む。SB7 覆土
2　黒色土　大源スコリア・溶岩小礫・植物遺体を微量含む。SB7 覆土
3　黒色土　2に４が少量混ざる。SB7 覆土
4　黄灰色粘土　金雲母を少量含む。SB7 覆土

第 91 図　H12-11　SB7 実測図（1：60）



第 92 図　H12-11　出土遺物実測図（1：4）

第 13 表　H12-11　出土遺物観察表

番号	挿図	図版	遺構	種別	細別	残存率（%）	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
1	第 92 図	PL.37	SB5・6	須恵器	坏蓋	(20)	15.8	(2.0)	—	精緻、白色粒子	良好	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y7/2	灰黄	
2	第 92 図	PL.37	SB5・6	須恵器	坏身	20	14.0	4.2	—	精緻、白色粒子	良好	2.5Y6/2	灰黄	2.5Y6/1	黄灰	
3	第 92 図	PL.37	SB5 カマド	土師器	甕	(60)	—	(1.0)	6.0	精緻、雲母	良好	10YR5/3	にぶい黄褐	10YR6/4	にぶい黄橙	遠江系、底部粘土粒付着、薄状圧痕？
4	第 92 図	PL.37	SB4	土師器	甕	—	—	(2.7)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	2.5Y7/3	浅黄	10YR8/4	浅黄橙	遠江系
5	第 92 図	PL.37	SB5・6	土師器	甕	—	—	(2.2)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	7.5YR6/4	にぶい橙	遠江系
6	第 92 図	PL.37	SB5・6	土師器	甕	—	—	(1.7)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	5YR6/4	にぶい橙	5YR6/6	橙	遠江系
7	第 92 図	PL.37	SB5 カマド	土師器	甕	(20)	—	(8.3)	—	精緻、黒色粒子少	良好	5YR6/6	橙	5YR5/6	明赤褐	
8	第 92 図	PL.37	SB7	土師器	小型甕	(20)	15.9	(3.2)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	5YR6/6	橙	
9	第 92 図	PL.37	SB5・6	土師器	甕	(25)	—	(2.8)	6.0	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	2.5Y6/3	にぶい黄	2.5Y6/2	灰黄	底部ハケメ痕

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値

い資料であり、これらも SB5 に伴うと考えられるかもしれない。SB6 から SB5 への切り合いがほぼ位置を同じくしていることも考慮すれば、両遺構は近接した時期に築かれたとみるのが妥当であり、SB6 から SB5 への建替えがおこなわれた状況が推定される。先行する SB6 についても出土遺物の示した 8 世紀代におさまるのか、それとも 7 世紀代に遡る可能性があるのかについては、確定できなかった。

SB7 より出土した 8 は在地系の小型甕とみられ、外面の磨耗は激しいが、口縁部内面のヨコナデは明瞭である。また図示はしていないが、床面より遠江系長胴甕とみられる破片も出土しており、8 も 8 世紀代の資料とみて相違ないとみられる。

12. 包蔵地外（富士岡 1 古墳群　隣接地）

所在地　富士市富士岡 1527-1　外

調査面積　72㎡（調査対象面積 2,457㎡）

調査期間　平成 12 年 10 月 23 日～ 10 月 27 日

調査原因　宅地造成工事

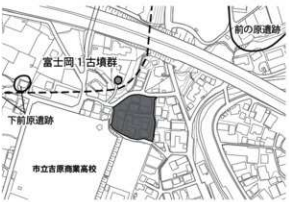
遺跡の概要　調査地は富士岡 1 古墳群の包蔵地範囲に隣接する。富士岡 1 古墳群は、赤淵川の西岸丘陵上、標高 18 ～ 70m の広い範囲に分布する 25 基の後期古墳で構成される。平成 14 年度には、多数の土器、玉類や銅鈴といった装身具、大刀や刀子等の副葬品を有する花川戸第 3 号墳などが新規発見・調査されている [1]。

調査の概要　調査地の北西部分に 3 本のトレンチを設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

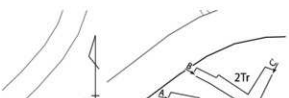
調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

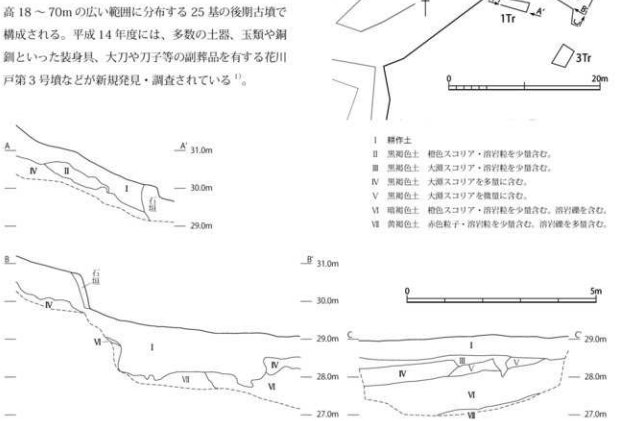
注

1）志村　博・吉田博子ほか『花川戸第 2・3 号墳発掘調査報告書』富士市教育委員会・静岡県富士農林事務所、2003 年。



第 93 図　H12-12　調査地位置図（1：5,000）





第 94 図　H12-12　トレンチ平面図（1：500）・土層断面図（1：100）

13. 沖田遺跡　第 118 次調査地点

所在地　富士市今泉３丁目 158-1　外

調査面積　64㎡（調査対象面積 2,269㎡）

調査期間　平成 12 年 12 月４日～ 12 月５日

調査原因　店舗建設工事

遺跡の概要　H11-4 参照（p9）。

調査の概要　地盤が脆弱であるため、テストピットを２ヶ所設定し、重機による掘削後、土層観察および排土中からの遺物の検出につとめた。

調査の結果　TP1 の地表下 2.9m で畦畔と見られる高まりが認められた。上面に堆積した天上山テフラ[1]から、これは周辺の調査で確認されている条里制区画に伴う大畦畔と一連のものとみられる。また、水田耕作土以下の砂層からは古墳時代前期～中期の遺物が出土したが、遺構の存在は確認されなかった。

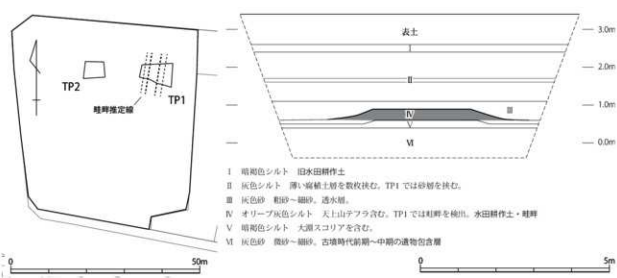
遺物　TP1・TP2 からあわせてコンテナ２箱分の遺物が出土したが、そのなかに奈良・平安時代の水田畦畔に伴う明確な遺物はなく、いずれも畦畔より下層に存在するⅥ層中より検出されたものである。

１～７は土師器の壺類である。１は二重口縁形の広口壺であり、内外面ともに丁寧なミガキが施されているが、胎土は粗く、極細礫も多量に混じっている。２は折り返し口縁の広口壺、３は棒状浮文が付く複合口縁の広口壺とみられる。これらの壺は大廓Ⅲ～Ⅳ式期に属するものと判断される。4･5 についても壺の底部と判断した。6･7 は小型壺である。6 は口縁部根元付近がやや内湾気味であるが、内外面ともにナデ調整によって仕上げられている。7 は体部内外面ともにミガキが施されるが、底部は広く、十分な面を有する。いずれも中見代Ⅰ～Ⅱ式期頃の資料と考えられる。

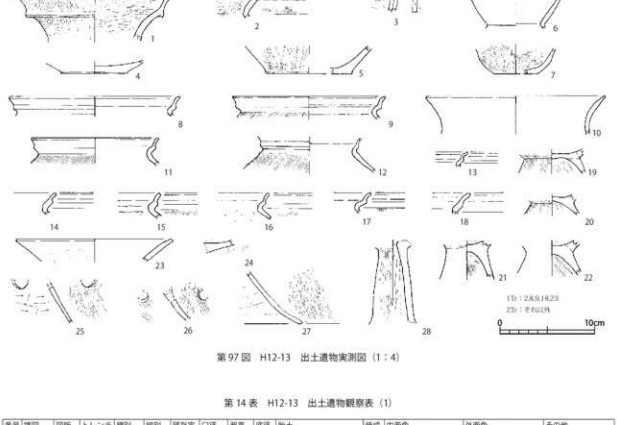
第 95 図　H12-13　調査地位置図（1：5,000）

８～22 は土師器の甕である。8・9・11～20 はＳ字状口縁台付甕であり、破片資料ではあるが複数個体分検出されている。口径が 16～18cm となるもの（8・9）と、11～13cm 程度のもの（11・12）が確認できる。12 の肩部から頸部にかけての屈曲のように一部で鋭い屈曲がみとめられるものもあるが、口縁部の屈曲は総じて緩く、口縁部や頸部の内外面もヨコナデによって仕上げられており、いずれも在地化後のＳ字甕とみて相違ない。大廓Ⅲ～Ⅳ式期に位置づけられるものとみられる。10 は口縁部が外反気味に開く、くの字甕であり、内外面がヨコナデによって仕上げられている。21・22 は台付甕の台部である。これらもＳ字甕とほぼ同時期の資料と考えられる。

23～28 は土師器の高坏である。23 は坏部の口縁が



第 96 図　H12-13　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）



第 97 図　H12-13　出土遺物実測図（1：4）

第 14 表　H12-13　出土遺物観察表（1）

番号	挿図	図版	トレンチ	種別	細別	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
1	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	壺	(20)	17.0	(5.1)	–	やや粗、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR4/2	灰褐	
2	第 97 図	PL.36	1Tr	土師器	壺	–	–	(2.8)	–	やや粗、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	5YR6/4	にぶい褐	5YR6/6	橙	
3	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	壺	–	–	(2.7)	–	精緻、白色粒子	良好	10YR4/1	褐灰	7.5YR5/2	灰褐	棒状浮文
4	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	壺	(30)	–	(1.4)	6.7	やや粗、白色粒子・雲母	良好	5YR7/6	橙	5YR7/4	にぶい橙	
5	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	壺	(20)	–	(2.9)	9.0	精緻、白色粒子	良好	10YR4/1	褐灰	2.5YR4/6	にぶい赤褐	底部木葉痕
6	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器		(30)	10.0	(3.8)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子	良好	10YR6/3	にぶい黄褐	7.5YR5/3	にぶい褐	
7	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	小型壺	(35)	–	(2.7)	4.8	精緻、白色粒子	良好	7.5YR5/3	にぶい褐	10YR5/3	にぶい黄褐	外面ヘラケズリ後ハケ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ後ヘラミガキ
8	第 97 図	PL.36	1Tr	土師器	S 字甕	(20)	18.0	(2.1)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・赤色粒子少・雲母	良好	7.5YR5/3	にぶい褐	5YR6/4	にぶい橙	
9	第 97 図	PL.36	1Tr	土師器	S 字甕	(20)	16.0	(2.4)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・赤色粒子少・雲母	良好	7.5YR6/3	にぶい褐	7.5YR5/2	灰褐	
10	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	甕	(20)	19.0	(4.0)	–	精緻	良好	2.5Y7/2	灰黄	10YR6/3	にぶい黄褐	
11	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	(20)	13.4	(2.9)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・赤色粒子微少・雲母	良好	7.5YR5/3	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	
12	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	(20)	(11.0)	(3.5)	–	やや粗、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子少・雲母	良好	2.5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	
13	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	–	–	(1.5)	–	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR5/6	明赤褐	
14	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	–	–	(2.3)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	10YR6/2	灰黄褐	7.5YR6/3	にぶい褐	
15	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	–	–	(2.7)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	7.5YR5/4	にぶい褐	10YR3/1	黒褐	
16	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	–	–	(2.8)	–	精緻、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	5YR6/4	にぶい橙	7.5YR4/1	褐灰	
17	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	–	–	(2.2)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子・雲母	良好	2.5YR5/6	明赤褐	10R4/6	赤	
18	第 97 図	PL.36	1Tr	土師器	S 字甕	–	–	(2.2)	–	精緻、黒色粒子・雲母	良好	5YR4/2	灰褐	5YR5/4	にぶい赤褐	
19	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	(40)	–	(2.5)	–	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	7.5YR5/3	にぶい褐	10YR5/2	灰黄褐	胴部内面スス付着
20	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	S 字甕	(80)	–	(2.0)	–	精緻、石英・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	10YR6/2	灰黄褐	胴部内面スス付着、台部内面ヘラナデ
21	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	台付甕	(40)	–	(4.0)	–	やや粗、白色粒子・雲母	良好	5YR5/3	にぶい赤褐	5YR5/3	にぶい赤褐	

第 14 表　H12-13　出土遺物観察表（2）

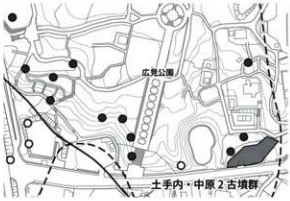
番号	挿図	図版	トレンチ	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色		外面色		その他
22	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	台付甕	(70)	～	(3.6)	～	やや粗、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	明赤褐	
23	第 97 図	PL.36	1Tr	土師器	高坏	(20)	16.2	(2.4)	～	精緻、白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	5YR6/6	橙	5YR6/6	橙	
24	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	高坏	～	～	(1.3)	～	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	5YR5/4	にぶい赤褐	2.5YR6/6	橙	
25	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	高坏	～	～	(3.6)	～	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	7.5YR6/4	にぶい橙	2.5YR5/6	明赤褐	
26	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器		～	～	(3.7)	～	やや粗、白色粒子・赤色粒子	良好	5YR6/6	橙	5YR5/6	明赤褐	
27	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	高坏	～	～	(5.5)	～	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/1	褐灰	
28	第 97 図	PL.36	2Tr	土師器	高坏	(70)	～	(8.7)	～	精緻	良好	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	外面タテヘラケズリ後ヘラミガキ、内面上部絞り痕

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値

直線的に大きく開くものであり、外面にはヘラナデ痕が残る。24 は高坏の坏部の底部片である。25 ～ 28 は脚部片であり、25・26 には円形の透孔がある。28 はいわゆる柱状脚の高坏脚部であり、脚部は細長く、外面は丁寧にヘラミガキが施される。内面の上半部は絞り痕が残るが、下半部はヘラナデによって調整される。25 ～ 27 が大廓式期、28 が中見代Ⅰ式期に位置づけられる。

注

1）杉原重夫ほか「伊豆諸島・神津島天上山と新島向山の噴火活動」『地学雑誌』110（1）、2001 年。



第 98 図　H12-14　調査地位置図（1：5,000）

14. 土手内・中原２古墳群　第 10 地区

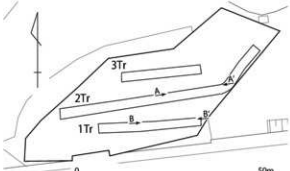
所在地　富士市伝法 46-1

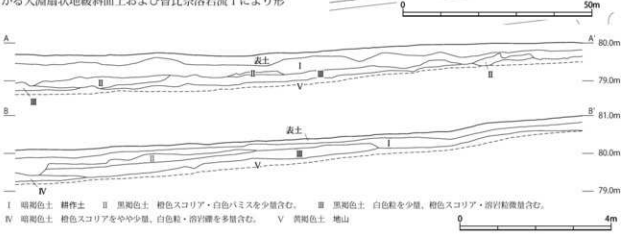
調査面積　248㎡（調査対象面積 1,300㎡）

調査期間　平成 12 年 12 月 11 日～ 12 月 13 日

調査原因　広見公園整備工事

遺跡の概要　土手内・中原２古墳群は、富士山南麓に広がる大淵扇状地緩斜面上および曽比奈溶岩流Ⅰにより形





Ⅰ　暗褐色土　耕作土　　Ⅱ　黒褐色土　橙色スコリア・白色パミスを少量含む。　　Ⅲ　黒褐色土　白色粒を少量、橙色スコリア・溶岩粒微量含む。
Ⅳ　暗褐色土　橙色スコリアをやや少量、白色粒・溶岩礫を多量含む。　　Ⅴ　黄褐色土　地山

第 99 図　H12-14　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

成された丘陵斜面に築かれた 21 基の後期～終末期古墳で構成される。

調査の概要　３本のトレンチを設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　１トレンチの西寄りは大きく撹乱され、表土下 1.6m ほどまで埋め土がされていた。２トレンチ西寄りは、表土・耕作土直下が地山の黄褐色土層（Ⅴ層）となっていた。その他の部分においても、遺構および遺物は確認されなかった。

15. 柏原遺跡　第３地区

所在地　富士市西柏原新田 113　外

調査面積　75㎡（調査対象面積 2,759㎡）

調査期間　平成 12 年 12 月 18 日～ 12 月 27 日

調査原因　区画整備事業

遺跡の概要　柏原遺跡は、富士市東端に位置し、田子の浦砂丘上の平坦面に立地する集落跡である。平成 14 年度の調査（４地区）により、奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出されている[1]。また、本遺跡が所在する柏原は、『三代実録』に記載される「柏原駅」が営まれていた場所とも考えられている。

調査の概要　トレンチを４本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　１トレンチ・４トレンチにおいて、古墳～平安時代の建物跡とみられるプラン（SB1・SB2）を土層断面あるいはトレンチ底面で検出した。また、土師器・須恵器などが出土した。

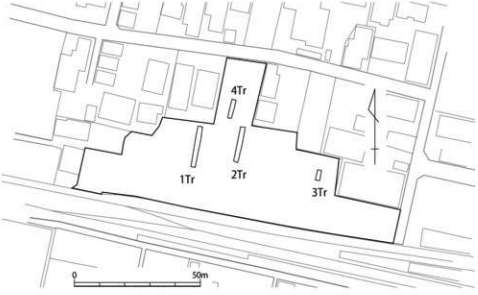
２トレンチでは、北側のごく一部を除き大きく撹乱を受けている様子が確認された。３トレンチでは、地表下 5m まで埋土がされていた。これらの状況から、調査地内で遺構が残存し得る部分は北寄りのおよそ半分と推定できる。

遺構　１トレンチ中央で検出された建物跡は、南北幅およそ 4.40m を測る。覆土は大淵スコリアを含む砂質土で、粘土や焼土は確認されず、カマド等の燃焼施設の位置は不明である。１トレンチでは北西角にも遺構（建物跡か）とみられる落ち込みが認められるほか、土層断面およびトレンチ底面に３基のピットを検出した。

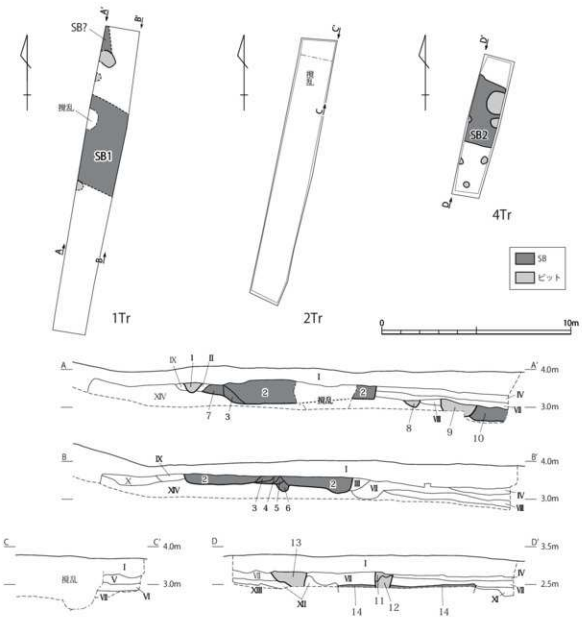
４トレンチでも、１軒の竪穴建物跡を検出した。南北幅はおよそ 3.40m を測り、平面プランからは北壁にカマドの存在が推定できるようである。

遺物　１～４トレンチよりコンテナ２箱分の遺物が出

第 100 図　H12-15　調査地位置図（1：5,000）



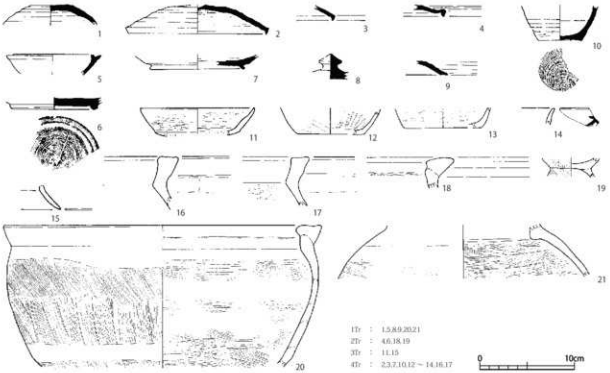
第 101 図　H12-15　トレンチ平面図（1：1,500）



Ⅰ　灰色砂質土　耕作土
Ⅱ　にぶい赤褐色砂質土
Ⅲ　褐色砂質土　大源スコリア少量含む。
Ⅳ　褐色砂質土　大源スコリア少量含む。遺物包含層
Ⅴ　灰色砂質土　きめ細かく、もろい。
Ⅵ　黒色砂質土　大源スコリア微量含む。
Ⅶ　暗褐色砂質土　大源スコリアやや多量含む。しまり良好。
Ⅷ　褐色砂質土　大源スコリア少量含む。ややもろい。
Ⅸ　黄褐色砂質土　大源スコリア少量含む。しまりやや良好。
Ⅹ　褐色砂質土　しまり良好。
Ⅺ　黒褐色砂質土　大源スコリア少量含む。
Ⅻ　褐色砂質土　大源スコリア少量含む。
XIII　褐色砂質土　大源スコリア微量含む。
XIV　明黄褐色砂質土

1　褐色砂質土　ピット覆土か
2　黄褐色砂質土　もろい。SB1 覆土
3　赤褐色砂質土　大源スコリア少量含む。しまり良好。SB1 覆土
4　赤褐色砂質土　大源スコリア微量含む。もろい。SB1 覆土
5　暗赤褐色砂質土　大源スコリア少量含む。もろい。SB1 覆土
6　暗褐色砂質土　大源スコリア微量含む。もろい。SB1 覆土
7　赤褐色砂質土　大源スコリア微量含む。しまり良好。SB1 覆土
8　褐色砂質土　大源スコリア微量含む。ピット覆土
9　黒色砂質土　大源スコリア少量含む。しまり良好。ピット覆土
10　黒色砂質土　オレンジ粒少量含む。SB7 覆土
11　暗褐色砂質土　大源スコリア少量含む。ピット覆土
12　黒褐色砂質土　大源スコリア少量含む。しまり良好。ピット覆土
13　黒褐色砂質土　大源スコリアやや多量含む。ピット覆土
14　暗褐色砂質土　粘土が混ざる。SB2 覆土

第 102 図　H12-15　トレンチ平面図（1：200）・土層断面図（1：100）



第103図　H12-15　出土遺物実測図（1：4）

土し、そのうちの21点を図示した。

1～10は須恵器である。1は須恵器の坏蓋とみられ、端部を欠くものの、丸みを帯びた形態であり、口径は10cm前後になると推定される。5は坏身とみられるが、立ち上がりは低く、受け部よりわずかに高くなる程度である。これらの蓋坏は湖西編年Ⅳ期に位置づけられる。2～4・8・9も坏蓋である。2は摘み部が剥離するが、天井はやや高く、端部は丸みを帯びた三角形状に仕上げられている。3も類似した形態であろう。4は天井部が低い形態とみられる。9はわずかに返りを残す蓋で、8は宝珠摘み部の破片である。6・7は坏身であり、いずれも貼り付け高台であるが、7は細くハの字状の高台なのに対し、6は低い方形の高台である。6の底部には十字状のヘラ記号がみとめられる。これらの須恵器はⅣ期末～Ⅴ期に位置づけられるとみられる。6は小型の壺とみられるが、底部に糸切り痕、体部下端にはヘラケズリがみとめられる。Ⅴ～Ⅵ期頃のものと考えられる。

11～14は土師器の坏である。11は須恵器蓋模倣の坏であり、内外面には明瞭なミガキが施されるが、底部と口縁部の境の稜はやや鈍い。6世紀後半～7世紀頃のものと判断される。12は甲斐型の坏であり、見込み部から体部内面にかけては放射状のヘラミガキが、またその境界部分にはヨコヘラミガキが施され、体部外面下半にはヘラケズリがみとめられる。8世紀後半から9世紀に帰属するとみられる。13・14は在地系の坏（駿東坏）である。14には墨書がみられるが、破片のため文字等の判読はできなかった。

16～18・20は土師器の鍋である。20は内外面ともに丁寧なハケ調整の後、口縁部のほか体部接合部周辺が念入りにヨコナデされている。口縁部の形状には、断面三角形状で上端部に面を有さない18・20のほか、断面方形で上端部に面を有するものも確認できた。これらの鍋は8～9世紀に位置づけられよう。

19・21は土師器の甕である。19は台付甕の脚部接合部分であるが、その形状からS字状口縁台付甕とみられる。21は球胴化が進んだ在地系の土師器甕（駿東甕）の肩部であり、8世紀代に位置づけられる。

SB1・SB2が検出された1・4トレンチにおいて、非抽出遺物も含めた出土遺物の主体となる時期は8～9世紀であり、遺構も未完掘ながら、当該期に帰属する可能性が高い。

注

1）若林美希・佐藤祐樹「平成14・20年度　富士市内遺跡発掘調査報告書」富士市教育委員会、2010年。別途本報告予定。

第 15 表　H12-15　出土遺物観察表

番号	挿図	図版	トレンチ	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色	外面色	その他
1	第 103 図	PL.37	1Tr	須恵器	坏蓋	(30)	—	(2.0)	—	精緻	良好	2.5YR5/2 暗灰黄	2.5YR4/2 暗灰黄	坏身の可能性あり
2	第 103 図	PL.37	4Tr	須恵器	坏蓋	(20)	14.6	(3.0)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	2.5YR6/1 黄灰	2.5YR6/1 黄灰	編み部剥離痕
3	第 103 図	PL.37	4Tr	須恵器	坏蓋	—	—	(1.6)	—	精緻	良好	2.5YR6/1 黄灰	2.5YR6/2 灰黄	
4	第 103 図	PL.37	2Tr	須恵器	坏蓋	—	—	(1.2)	—	精緻、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	
5	第 103 図	PL.37	1Tr	須恵器	坏身	(20)	8.1	(2.2)	—	精緻	良好	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	坏蓋の可能性あり
6	第 103 図	PL.37	2Tr	須恵器	坏身	(20)	—	(1.2)	8.8	精緻、黒色粒子・赤色粒子	良好	2.5Y5/2 暗灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	底部ヘラ記号（十字）、貼り付け高台
7	第 103 図	PL.37	4Tr	須恵器	坏身	(25)	—	(1.5)	9.7	精緻、白色粒子・赤色粒子	良好	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	
8	第 103 図	PL.37	1Tr	須恵器	坏蓋	(70)	—	(2.7)	—	精緻	良好	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	
9	第 103 図	PL.37	1Tr	須恵器	坏蓋	—	—	(1.4)	—	精緻	良好	10YR5/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	
10	第 103 図	PL.37	4Tr	須恵器	小型甕？	(40)	—	(3.7)	4.5	精緻、白色粒子・赤色粒子・黒色粒子	良好	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y5/2 暗灰黄	底部糸切り痕
11	第 103 図	PL.37	3Tr	土師器	坏	(20)	12.0	(2.8)	—	精緻	良好	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	
12	第 103 図	PL.37	4Tr	土師器	坏	(20)	—	(2.8)	7.0	精緻、白色粒子	良好	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	体部下半ヘラケズリ、見込み～体部内面放射状ヘラミガキ、見込み部と体部の境にヨコヘラミガキ
13	第 103 図	PL.37	4Tr	土師器	坏	(25)	—	(2.1)	8.0	精緻、白色粒子・雲母	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	
14	第 103 図	PL.37	4Tr	土師器	坏	—	—	(1.8)	—	精緻、白色粒子	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	墨書（文字不明）
15	第 103 図	PL.37	3Tr	土師器	高坏？	—	—	(2.5)	—	精緻、赤色粒子	良好	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	
16	第 103 図	PL.37	4Tr	土師器	鍋	—	—	(5.5)	—	やや粗、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/2 灰褐	
17	第 103 図	PL.37	4Tr	土師器	鍋	—	—	(5.1)	—	やや粗、白色粒子・黒色粒子	良好	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/2 灰褐	口縁部ヨコハケ後ヨコナデ
18	第 103 図	PL.37	2Tr	土師器	鍋	—	—	(3.2)	—	やや粗、黒色粒子・白色粒子・雲母	良好	5YR5/6 明赤褐	5YR2/2 黒褐	
19	第 103 図	PL.37	2Tr	土師器	ミニ甕	(40)	—	(2.1)	—	やや粗、白色粒子・赤色粒子・雲母	良好	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	
20	第 103 図	PL.37	1Tr	土師器	鍋	(25)	29.2	(15.0)	—	やや粗、赤色粒子・白色粒子・黒色粒子・雲母	良好	2.5YR4/6 赤褐	2.5YR3/6 明赤褐	
21	第 103 図	PL.37	1Tr	土師器	甕	(20)	—	(5.5)	—	精緻、白色粒子	良好	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	

※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値

※選種：脚台・高台の付くものについては、脚（高）台径に置き換える。

16. 大坂遺跡　第１地区

所在地　１次：富士市大淵 8553-1　外

２次：富士市大淵 8555-4　外

調査面積　１次：20㎡（調査対象面積 78㎡）

２次：43㎡（調査対象面積 383㎡）

調査期間　１次：平成 12 年 12 月 19 日

２次：平成 13 年 1 月 22 日

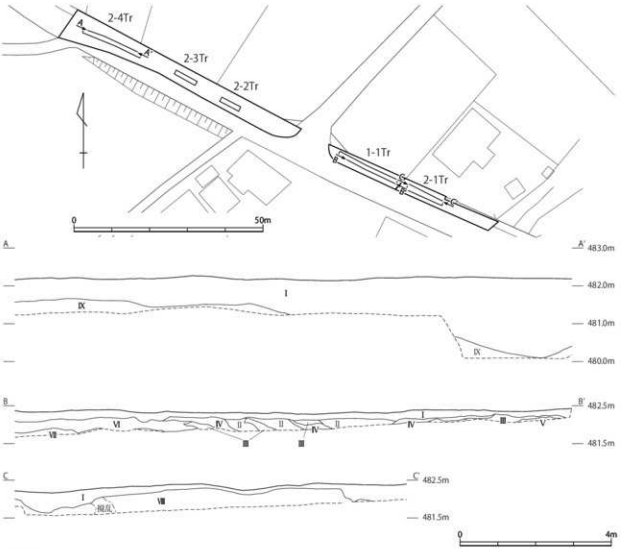
調査原因　道路改良工事

遺跡の概要　H11-8 参照（p13）。

調査の概要　１次調査で１本（1-1Tr）、２次調査で４本（2-1 ～ 4Tr）、合計５本のトレンチを設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　東寄りに掘削したトレンチでは、川砂を多く含む土層の堆積を確認した。これは調査地の東を流下する砂沢の影響を受けたものと考えられる。西寄りでは、過去の道路築造に伴う埋土と、地山が谷状に落ち込む状況を確認した。遺構および遺物は確認されなかった。

第 104 図　H12-16　調査地位置図（1：5,000）



Ⅰ　耕作土・埋土
Ⅱ　暗赤褐色砂　黄褐色砂質土がごく多量に混ざる。礫を少量、粗砂を多量含む。河川堆積物層
Ⅲ　黄褐色砂質土　溶岩粒・礫を少量含む。河川堆積物層
Ⅳ　黒褐色砂質土　粗砂を多量、礫を少量含む。河川堆積物層
Ⅴ　暗赤褐色砂　砂岩状に硬くしまる。ラミナ状の堆積もみられる。
Ⅵ　暗褐色砂質土　礫をやや多量、大源スコリアを微量含む。
Ⅶ　黒褐色土　しまり強、大源スコリアを微量、溶岩粒を少量含む。
Ⅷ　黄褐色砂層と暗赤褐色砂層が互層を成す。河川堆積物層
Ⅸ　黄褐色土　地山

第 105 図　H12-16　トレンチ平面図（1：1,000）・土層断面図（1：100）

17. 包蔵地外

所在地　富士市松岡 10-1　外

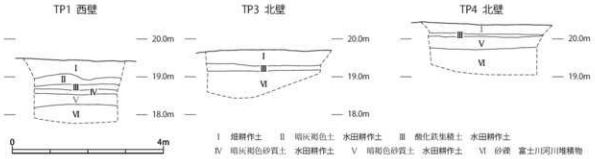
調査面積　56㎡（調査対象面積 3,600㎡）

調査期間　平成 13 年 1 月 24 日

調査原因　道路築造工事

遺跡の概要　調査地は潤井川西岸扇状地上の標高約 20m の位置にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地範囲には含まれない。調査地の北東約 400m に位置する貫井遺跡が古墳時代の集落跡と考えられているものの、過去に調査事例がなく周辺環境の状況も不明であったことから、当該地の試掘調査を実施することとした。

第 106 図　H12-17　調査地位置図（1：10,000）



第 107 図　H12-16　土層断面図（1：100）

調査の概要　４ヶ所にテストピットを設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　耕作土直下は富士川に起因する河川堆積物層であり、遺構や遺物は確認されなかった。

第 108 図　H12-18　調査地位置図（1：5,000）

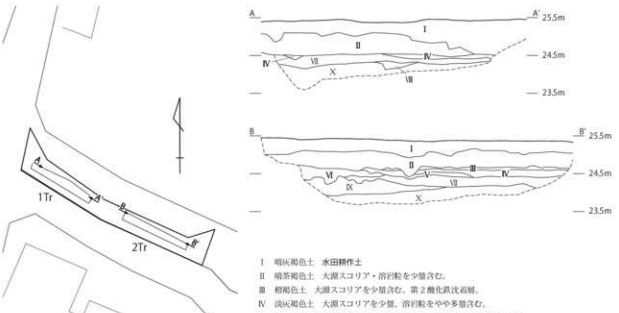
18. 沢東 A 遺跡　隣接地（第６次調査地点）

所在地　富士市久沢 89-6

調査面積　19㎡（調査対象面積 42㎡）

調査期間　平成 13 年２月８日

調査原因　宅地造成



第 109 図　H12-18　トレンチ平面図（1：500）・土層断面図（1：100）

第 16 表　H12-18　出土遺物観察表

番号	挿図	図版	トレンチ	種別	細別	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	内面色	外面色	その他
1	第 110 図	PL.36	2Tr	土師器	壺	(25)	－	(4.0)	8.0	精緻	良好	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	底部木葉痕、外面ハケ後ミガキ

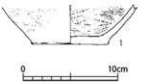
※括弧内の数値　残存率：図示した部分における残存率、計測値：残存値

遺跡の概要　調査地は沢東Ａ遺跡（H12-1 参照、p27）の包蔵地範囲に隣接している。

調査の概要　トレンチを２本設定し、重機による掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構は確認されなかったが、遺物は少量出土し、土師器甕１点を図示した。

　遺物　２トレンチより出土した遺物１点を図示した。１は土師器の壺とみられる底部片である。円盤状に形作られた底部には木葉痕が残る。胴部外面はハケ調整後、下位までヘラミガキが施される。帰属時期は古墳時代前期頃と考えられる。



第 110 図　H12-18　出土遺物実測図（1：4）

19. 富士岡１古墳群　第５地区

所在地　富士市比奈 2737-8　地先

調査面積　3㎡（調査対象面積 60㎡）

調査期間　平成 13 年２月 27 日

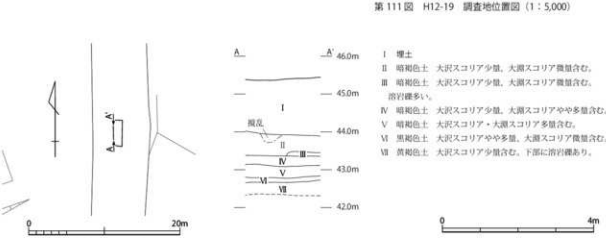
調査原因　消防水利整備事業

遺跡の概要　H12-12 参照（p68）。

調査の概要　トレンチを１本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　遺構および遺物は確認されなかった。

第 111 図　H12-19　調査地位置図（1：5,000）



第 112 図　H12-19　トレンチ平面図（1：500）・土層断面図（1：100）

20. 東平遺跡　第29地区

所在地　富士市伝法2879-3　地先

調査面積　13㎡（調査対象面積56㎡）

調査期間　平成13年２月27日

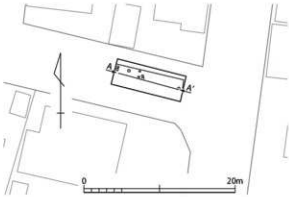
調査原因　消防水利整備事業

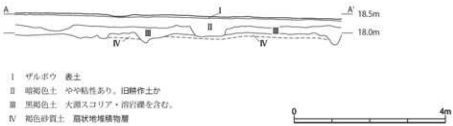
遺跡の概要　東平遺跡は、富士山南麓に広がる大淵扇状地の南端部、標高約10～40mに立地する、律令期の集落跡として本市最大規模の遺跡である。これまでの調査で、多数の竪穴建物跡や掘立柱建物跡と共に、「布自」「扇」などの文字が記された墨書土器や、鈴帯金具、馬具、鉄鏃などの金属製品が出土しており、官衙的性格の濃厚な計画的集落であった可能性が示されている。

調査の概要　トレンチを１本設定し、重機により掘削後、遺構や遺物の検出につとめた。

調査の結果　Ⅲ層（扇状地堆積物層）の上面で深さ10～20cmほどのピットを８基検出したが、遺物は出土せず時期は不明である。そのほかに遺構および遺物は確認されなかった。

第113図　H12-20　調査地位置図（1：5,000）





第114図　H12-20　トレンチ平面図（1：500）・土層断面図（1：100）

第３章　後　論

第１節　資料報告

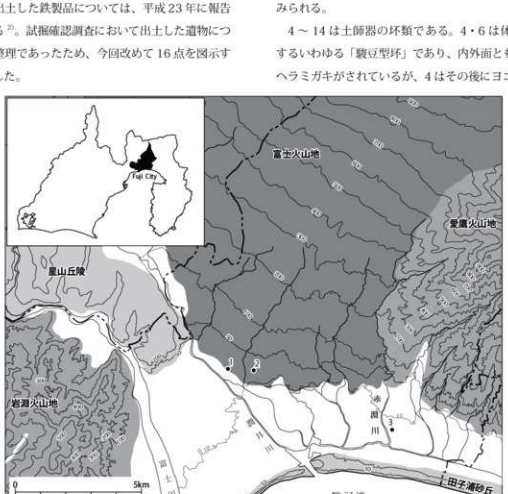
本節では、既に本発掘調査の報告書が刊行されている一方で、平成 11・12 年度におこなわれた試掘確認調査時の出土品が未整理であった資料や、同年度に保存処理等をおこなった資料について報告する。

1．中桁・中ノ坪遺跡　第１地区

中桁・中ノ坪遺跡第１地区は、平成 11 年 10 月と 12 月に試掘確認調査が、平成 15 年５月に本発掘調査が実施され、翌年３月には本発掘調査の報告書が刊行されており、古墳時代中期後半から平安時代にかけての竪穴建物を主体とした集落跡が検出されている[1]。また本発掘調査で出土した鉄製品については、平成 23 年に報告されている[2]。試掘確認調査において出土した遺物については未整理であったため、今回改めて 16 点を図示することとした。

１～３は土師器の甕である。１は「くの字」状の口縁部形態の甕であり、頸部内面の屈曲が鋭い。口縁端部は若干肥厚気味で外側に折り返され、内外面ともに特徴的な粗いハケメが施される。古墳時代後期の甕とも異なる特徴を有しており、中見代式期まで昇る可能性がある。２は甲斐型の大型甕であり、口径が 31.3cm、口縁部の厚さは 0.9cm を測っており、薄口縁と厚口縁の境ほどの形態とみられる。甲斐型Ｘ期からＸ１期頃に位置づけられることから、９世紀後半から 10 世紀前半頃の年代が与えられる[3]。３は口縁端部の内面が肥厚された甕の口縁部であり、８世紀代の在地系の球胴甕（駿東甕）とみられる。

４～ 14 は土師器の坏類である。４・６は体部が内湾するいわゆる「駿豆型坏」であり、内外面ともに丁寧にヘラミガキがされているが、４はその後にヨコナデが施

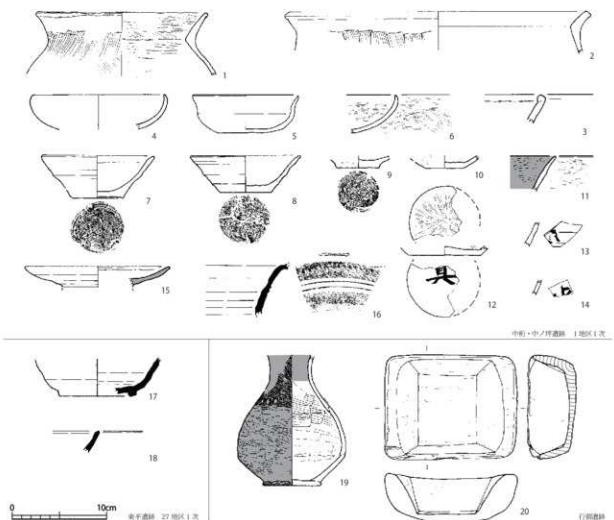


第 115 図　資料報告　対象遺跡の位置と地形区分（1：150,000）

される。5は口縁部が外反する形態であり、須恵器蓋模倣の坏とみられるが、底部と口縁部の境は明瞭ではない。4・6は６世紀、5は６～７世紀頃とみられる。７～９は底部糸切り未調整の坏である。7・8は体部から口縁部は外側へ直線的に開いており、底径に比して口径が大きく器高も高い。本調査時に出土している SB08-P01 は法量、形態ともに７・８と類似しており、O-53 期とみられる灰釉陶器が共伴していることから[4]、7・8も10世紀前半頃に位置づけられる可能性がある。11は内面黒色処理が施された坏であり、内外面ともに丁寧なヨコミガキが観察される。内面黒色処理の類例については本調査時にも確認されており、SB05-P04 では甲斐型坏で、SB27-P02 では灰釉陶器模倣の高台付皿で確認される。12～14は墨書が確認できる資料である。12は見込み部に放射状ヘラミガキが施された坏の底部に、明瞭な筆致の「真」または「具」の文字が確認できる。13は判読不明であるが、14は「中」の一部とも読める。本調査時にも「中」を含む墨書は多数例確認されており、類例としての可能性が考慮される。

15は灰釉陶器の皿で、16は須恵器の広口（有文）壺である。16は口縁端部を欠いているが、口径は19～20cmに復元される。頸部外面は上下でほぼ均等に２分割され、各区に波状文が施される。端部や区画の稜線は比較的鋭いが、波状文は部分によって振幅の浅いところがある。TK23～MT15 型式併行期頃に位置づけられるとみられる。

小結　中桁・中ノ坪遺跡第１地区の試掘確認調査においては、本調査でも確認されている通り、古墳時代中期から平安時代にかけての遺物が検出されている。なかでも、古墳時代後期初頭前後の須恵器や奈良・平安時代の



第116図　資料報告　出土遺物実測図（1：4）

甲斐型土器や内面黒色処理の土器、墨書土器、灰釉陶器の保有量には駿河東部地域の集落としては注目すべきものがある。

注

1）志村　博・吉田博子　「中析遺跡　王子板紙株式会社富士工場製品倉庫新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」富士市教育委員会、2004年。

2）藤村　翔　「報告書既刊遺跡追加資料報告」「平成21年度富士市内遺跡発掘調査報告書」富士市教育委員会、2011年。

3）山梨県考古学会甲斐型土器研究グループ編　「甲斐型土器－その編年と年代－」山梨県考古学協会、1992年。

4）注1文献、pp61-62。

5）注1文献、pp60-61。

6）注1文献、pp66-67。

7）注1文献、p79。

2. 東平遺跡　第27地区

東平遺跡第27地区は、平成11年8月に試掘確認調査が、平成12年1月に本発掘調査が実施され、平成14年3月には本発掘調査の報告書が刊行されており、奈良時代の竪穴建物跡1軒が検出されている[1]。この建物跡（SB01）からは、底部に「布自」と墨書された須恵器坏身が発見されており、奈良時代富士郡衙を考える上での一級資料となっている。試掘確認調査において出土した遺物については未整理であったため、今回改めて2点を図示することとした。

17・18はSB01から出土した須恵器の坏身である。17は断面方形の高台が貼り付けられ、体部は緩やかに屈曲して立ち上がる。口径は13cm前後になるとみられる。18も坏身の口縁部とみられる。

注

1）木ノ内義昭　編　「東平遺跡　第16地区（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書」富士市教育委員会、2002年。

3. 行僧遺跡

行僧遺跡とは、富士火山地と愛鷹火山地の境界を流れる赤淵川の下流域、標高1.5～2mほどに立地する遺物散布地である。平成8年3月22日、工事の最中に今回報告する弥生時代後期の土器（19）が見つかったため、同年4月に新たに遺跡として登録された[1]。尚、図示したもの以外にも、同時期の土器片とみられる遺物が小コンテナ1箱分程度保管されている。

19は弥生土器の赤彩広口壺である。当時のメモによると、赤淵川の自然堤防上でおこなわれた前述の工事の際に、地表下3.5mから検出されたようである。底部は円盤状の粘土が用意されており、縁辺部が胴部下端より若干外側に出ている。無花果形を呈する胴部から頸部にかけては、数段階に分けて成形されたことが、粘土紐の接合痕から推定される。文様は肩部上端から頸部にかけて縄文が施されるほか、縄文帯の下位に円形浮文が4個単位で三方に貼り付けられている。赤彩は、内面の頸部から上方と、外面の図示した正面では面的にみとめられるが、背面には現状で赤彩が確認できない。形態から、弥生時代後期前半の離鹿塚Ⅰ～Ⅱ式期に位置づけられるとみられる。

20は、正確な出土地は不明ながらも、平成8年頃に行僧遺跡の南側近接地、地表下5mから出土したことが伝わる木製例物容器の槽である。平成11～12年度に保存処理が実施された。長さ14.1cm、幅11.1cm、高さ5.2cm、推定容積295cm^{3}を測り、平面は長方形を呈する。短辺側口縁部には平坦面を設けつつ、断面形は丸みをもった形状に成形されるが、長辺側は薄手でほぼ一定の厚さで仕上げられている。短辺断面に心材付近の年輪が観察されることから、通有の例物と同じく、横木取りと判断される。槽の形態や出土深度から、弥生～古墳時代に位置づけられるとみられる。

注

1）遺跡の新規登録時には「布田遺跡」とされていたが、後年に行僧遺跡と名称変更されている。

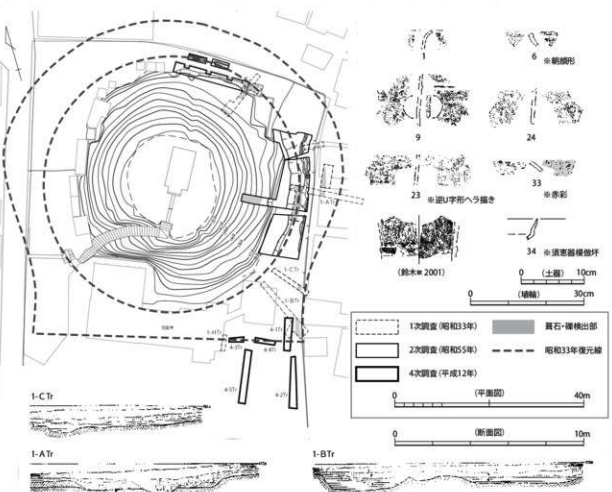
第117図　行僧遺跡周辺図（1：5,000）

第２節　古墳時代後期初頭における２つの首長墳とその評価

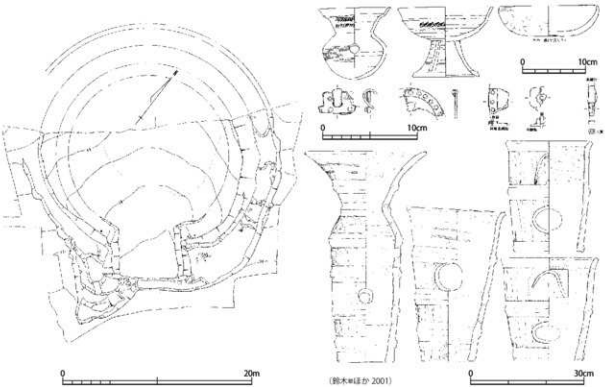
１．伊勢塚古墳の調査成果とその課題

平成12年度に実施した墳丘南東側の調査によって、基盤層の落ち込み（１トレンチ）と若干の埴輪片、土器片を検出することができた。未報告の埴輪が多数存在する当古墳において、今回その一部でも報告できた意義は大きいと考えるが、埴輪の内容はもとより、これまでに検出された遺構についても多くの問題を残していることも、また改めて認識することができた。ここではそれらの問題点を整理し、今後の研究の進展や調査に備えたい。

墳形と周溝の問題　まず墳丘については、盛土主体[1]で築かれ、葺石を伴う二段築成の円墳であることが想定されているのであり、その直径は54ｍ、高さは南から８ｍ、北から６ｍを測る[2]。墳長については、同調査において検出された墳丘東側で幅８ｍを測る周溝（１次調査Ａトレンチ）の形状からの復元値であり、この周溝が南側で大きく開いて「楯形」の周溝となることが推定されたのであるが、この際に問題となる南東側のトレンチ（１次調査Ｂトレンチ）の土層図では、西端（土層図左手）に幅4.5ｍ程の基盤層の落ち込みが認められるものの、中ほどで一度立ち上がり、さらに東側（土層図右手）においてなだらかな落ち込み状を呈するのであり、復元図のとおりトレンチの大部分を周溝内と捉えるには疑問が残る。１次調査報告ではさらに墳丘南側に設定したＨトレンチによって、「楯形周溝」の根拠となる周溝外縁の立ち上がりを検出したとしているが、このトレンチについては土層図も報告されておらず、現状でこの想定を追認するすべはない。今回の４次調査では１次調査ＢトレンチからＨトレンチの間にいくつか調査区を設



第118図　伊勢塚古墳の墳丘と出土遺物（1：800、1：200、1：10、1：6）



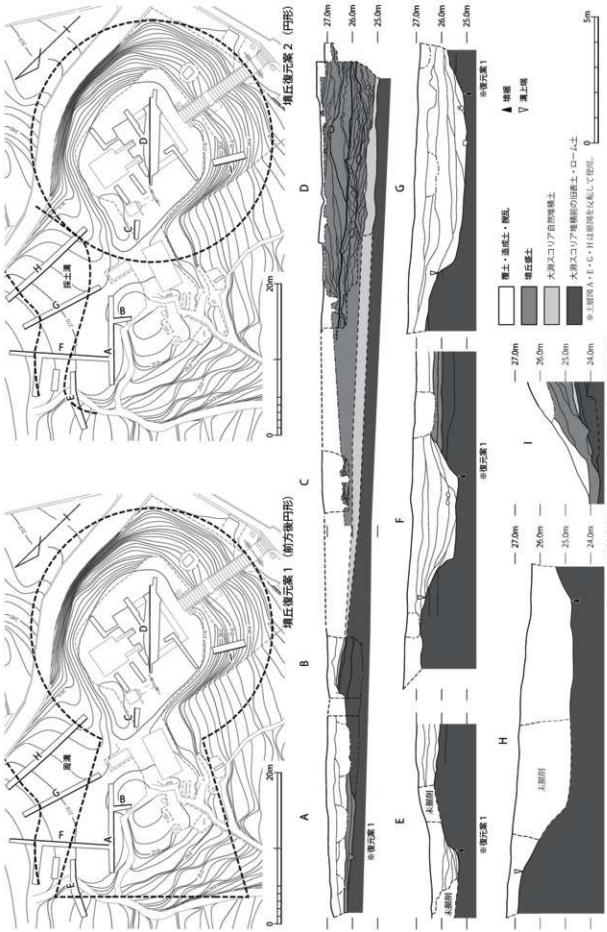
第119図　伊豆の国市多田大塚6号墳の墳丘と出土遺物（1：400、1：6、1：4、1：10）

けているのであるが、近年の削平のためか、1次調査報告の想定する周溝外縁等の遺構を検出することはできなかった。ただ、1次調査Bトレンチで確認されたトレンチ中ほどの高まりが、今回の4次調査1トレンチにおいて検出された基盤層の落ち込みに対応する可能性はある（第78図、p57）。

伊勢塚古墳の墳形に対し、帆立貝形前方後円墳[3]や造り出し付き円墳[4]といった想定がなされる根拠は、1次調査で得られた「楯形周溝」という知見から導かれたものであり、上述したように周溝の形態に議論の余地があることからすれば、今後も慎重に判断すべき問題であろう。

遺物の問題　伊勢塚古墳の埴輪については、これまでに低平な断面M字形の突帯の個体などのV期の円筒埴輪片4点が報告されているが[3]、今回の報告では、円筒埴輪にも普通円筒と朝顔形の2種があり、色調や胎土が異なる個体も存在すること、また赤彩のある形象埴輪が存在すること、そして断面三角形となる低平な突帯のものが目立って存在すること等が確認された。低平な突帯の個体のなかには、粘土帯を貼るのではなく、強いナデによって突帯を作り出すものもあり、突帯については形骸化の度合が強い。ただ、外面のタテハケや焼成の状況、口縁端部の作りから粗雑な印象を受けることは決してなく、推定ではあるものの、円筒埴輪にも大型品・小型品の区別が存在する可能性もあることから、大型古墳に供給された埴輪としては申し分ないものといえる。

また逆U字形のヘラ描きのある個体が確認されたことも貴重な成果であり、近隣では伊豆の国市多田大塚6号墳の埴輪に類例が認められる。同古墳は墳丘全長が25m程となる造り出し付き円墳であり、人物埴輪や低位置突帯の特徴から、駿河地域の他の類例同様、関東系の埴輪群を有する古墳として捉えられている[6]。築造時期については、造り出し部周辺から出土した須恵器からTK47型式併行期頃と考えられよう。伊勢塚古墳1次調査における周溝形態の復元が正しければ、墳形・埴輪ともに大いに参考となる資料であり、築造時期的にも伊勢塚古墳4次調査で確認された須恵器模倣坏の年代観とも矛盾しないとみられる。今後、多田大塚6号墳の埴輪との詳細な比較と分析をする必要はあるが、現在のところは従来の想定のとおり、伊勢塚古墳についてもTK47型式併行期頃に位置づけることが妥当であると考えられる。



第120図　天神塚古墳墳丘復元図（1：500）・土層図（1：150）

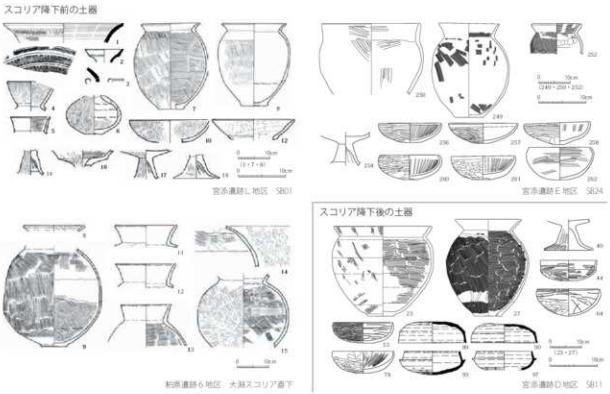
２．天神塚古墳の墳形と築造時期

天神塚古墳については、1999・2000 年に実施した２度の確認調査によって、主体部の確認や古墳に直接伴うと判断される遺物の発見にはいたらなかったものの、墳丘北側の溝状遺構や墳丘盛土（「後円部」）の構築状況、下層集落の存在を窺わせる遺物など、いくつかの重要な知見を確認することができた。天神塚古墳の全容解明や性格の考察には依然として情報が不足している感は否めないものの、現段階で判明している事項に基づいてその墳丘や築造時期の問題を整理しておきたい。

墳丘の復元　天神塚古墳の墳丘については、1930 年刊行の『静岡県史』では前方後円墳として認識されているものの、1972 年刊行の『吉原市史』では『県史』の前方後円形との指摘に疑問が呈されるなど、不明瞭な状況であった[7]。初の発掘調査報告となる 2001 年の１次調査報告では、墳丘北西側を重点的に調査し、前方後円墳として認定するにいたっているが[8]、以前より不明瞭であった「前方部」西側から南側の調査が十分でないために、即断するには不安も残る。報告では１次１トレンチ（第 120 図セクションＡ）や１次２トレンチ（同セクションＦ）において墳丘盛土が確認できたとされるが、今回の２次調査で確認された東側「後円部」盛土と比べると非常に薄いものであり、その評価は慎重にならざるを得ない。北側をめぐる溝（同セクションＨ・Ｇ・Ｆ）についても、推定「くびれ部」においてコーナーを検出していないため、前方後円墳の周溝と決定するには時期尚早であろう。しかし、後にも述べるとおり天神塚古墳の盛土は大淵スコリアの自然堆積層の上から構築されており、北側溝の覆土にも大淵スコリアが多量に含まれることから、溝の開削は墳丘構築前後いずれかの間もない時期と考えられる。したがって溝自体は古墳に伴う遺構であった可能性は高い。

以上のことから、今回の報告では墳丘の復元案として、前方後円形となる復元案１とともに、墳丘が円形で北側に採土溝がめぐる復元案２を示すこととした。墳丘規模については便宜的に１次調査のものを踏襲し、円形部分は直径 32 m、方形部分については長さ 19.5 m、最大幅 25.5 m としている。ただ、「後円部」の東～南側については現状地形から推定されたものであり[9]、近世以降の神社地造成の影響も多分に考慮する必要があるため、今より一回り小さい墳丘となる可能性もある。いずれにしても、墳丘周囲における墳丘の確認を経て、今後も墳形を検証していくことが求められる。

築造時期　天神塚古墳の築造時期については 2001 年



第 121 図　大淵スコリア降下前後の土器（1：12、1：8）

第 122 図　天神塚古墳出土遺物の編年的位置

の１次調査報告において、「後円部」盛土下に存在する大淵スコリア（第 120 図セクションⅠ）の年代観から「概ね５世紀末から６世紀前半頃」[10] とされているが、近年の調査の蓄積によって、富士山南麓から噴出したとされる大淵スコリアの年代観も定まりつつある [11]（第 121 図）。

愛鷹山南西麓に所在する富士市宮添遺跡では、これまでの調査において竪穴建物跡の覆土内に大淵スコリアのみで構成される層を含むものが複数検出されている。L 地区 SB01 では床面から 10 ～ 20cm ほど上層となる覆土中位において大淵スコリアの純粋堆積層が確認されており、建物内からは TK208 型式とみられる須恵器甕や褒の破片が出土した [12]。また E 地区 SB24 では、やはり床面より 10cm ほど上層の覆土中位において大淵スコリアの純粋堆積層が確認され、建物内から須恵器の出土はなかったものの、鞍豆型の坏や褒等によって構成される良好な土器群が出土しており、須恵器模倣坏を主体的に含まない組成から、TK23 ～ TK47 型式併行期以前に位置づけられる [13]。なお、富士市柏原遺跡においても大淵スコリアの純粋堆積層直下から一定量の土師器が見つかっており、上述の年代観と矛盾しないと考えられる [14]。一方、大淵スコリア降下時期の下限を知る上で、大淵スコリアの純粋堆積層を含まない建物跡にも注目する必要がある。宮添遺跡 D 地区の SB11 は、覆土内に大淵スコリアの純粋堆積層はみられないものの、大淵スコリア自体は疎らに含むことから、スコリア降下後に営まれた竪穴建物跡と判断される。出土遺物は MT15 型式の須恵器蓋坏のほか、土師器の須恵器模倣坏、鞍豆型坏などがある [15]。

大淵スコリアの純粋堆積層が検出された２例の建物跡は、いずれも床面直上ではなく覆土中位において確認されていることから、建物廃絶後の一定期間の後に大淵スコリアが降下・堆積したことを物語っている。したがって、宮添遺跡 D 地区 SB11 の示す年代が堆積の下限となるのであれば、実際の降下時期は TK23 ～ TK47 型式併行期頃に現状では押えられることになる。

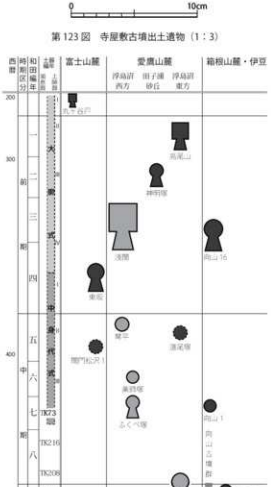
このような前提の上で、いま一度天神塚古墳の出土遺物の時期を確認してみたい。今回報告した１次・２次調査の出土遺物は、その帰属時期の広さから、古墳築造時の遺物が含まれている可能性は多少残るものの、大部分は古墳築造以前の下層集落に伴う遺物であると判断される。第 122 図で示したとおり、墳丘盛土内の遺物と古墳築造以前の旧表土以下の遺物の時期は概ね一致しており、天神塚古墳は古墳時代前期から後期初頭にかけて周辺に存在した集落（天念寺遺跡）の上に、その集落の土を用いて墳丘を造成・盛土したことが想定されるのである。ここで注意したいのは、天神塚古墳の盛土直下には大淵スコリア層が存在することであり、先にみた降下時期は、天神塚古墳で検出された遺物の時期の下限と見事に一致している。以上のことから、下層集落の衰退→大淵スコリアの降下→天神塚古墳の築造という一連の過程が推定されるのであり、古墳の築造時期は TK47 ～ MT15 型式併行期に設定することができる。

下層集落である天念寺遺跡自体は発掘調査履歴がなく、今回の知見のみで多くを語ることは憚られるものの、富士山の側火山の噴火がもたらした大淵スコリアによって当該集落が大きな被害を受けた蓋然性は高く、天神塚古墳の築造自体が、愛鷹山南西麓の地域における火山災害からの「復興」を象徴づける事象であった可能性もある。

３．東駿河地域における後期古墳文化の導入と契機

前項までで確認してきたとおり、伊勢塚・天神塚の両古墳は、ともに６世紀初頭を前後する時期（TK47 ～ MT15 型式併行期）に築かれていたことを改めて確認することができた。古墳時代後期のはじまりを TK23 型式

第123図　寺屋敷古墳出土遺物（1：3）



第124図　駿河東部・伊豆地域における古墳の変遷

併行期とするかMT15型式併行期とするかで議論はあろうが、新興の中小首長層の台頭[16]とその首長墳の小地域単位での並列的な造営[17]が進行する当該期は、当地域においても重要な画期であると考えられる。ここで、当該期の首長墳の類例をもう一つ報告しておきたい。

寺屋敷古墳と形象埴輪　第123図に示した形象埴輪片は、富士市立博物館の収蔵庫に寺屋敷古墳（中里K-93号墳）出土の埴輪として保管されてきた資料である。馬形埴輪に伴う鈴であり、長さ4.9cm、幅4.2cmを測り、正面・側面には横方向の切れ込みが入る。科学分析はおこなっていないが、トーン部分は赤色顔料の痕跡となる可能性がある。鈴の法量は伊豆の国市多田大塚6号墳例よりはひと回りほど大きく、同市駒形古墳例のうち、大型のものに近似する。形態はすべて類似しており、古墳時代中期末から後期のものとして差し支えない。

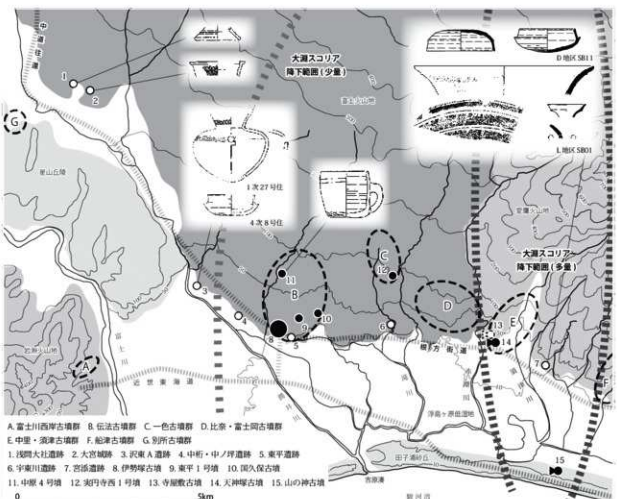
寺屋敷古墳とは、本書38頁記載の中里2古墳群の概要でも触れたとおり、天神塚古墳から北西へ400mほどの地点に存在したとされる古墳である。墳形は前方後円形または楕円形とされるが、主体部はベンガラが敷き詰められた幅4尺、長さ13尺の東南に向いた大石室であり、天井は一枚の平石であったとの伝承が残されている[18]が、既に完全に消滅している。天井石の解釈は悩ましいが、おそらくは竪穴式石槨や箱式石棺等の埋葬施設なのであろう。発掘前から埴輪片が採集されたとの記述もあり、一定量の円筒埴輪や形象埴輪が存在したようである。近接する天神塚古墳では埴輪は採用されていないことから、その次代の首長墳と考えられ、MT15型式～TK10型式併行期頃の時期が与えられる。

面的な埴輪受容　寺屋敷古墳の埴輪の内容の一端が明らかになったことにより、これまでに古墳時代後期初頭前後の首長墳（天神塚古墳）の存在が確認されていながらも埴輪空白地帯と考えられていた中里・須津の古墳群においても、埴輪を樹立した首長墳の存在を確認することができた意義は大きい。駿河東部地域で当該期に初めて受容されたこれらの埴輪の生産には、低位置突帯や焼成[19]、人物埴輪の製作技法[20]から関東系埴輪工人集団の関与が指摘されているところである。その詳細は資料全体の分析を通じて今後も検証すべきではあるものの、各小地域を単位とした中小の首長墳における面的な埴輪受容の状況（第124図）は、滝沢誠氏が指摘したとおり、新興地域首長層を媒介としたヤマト王権による新しい支

配秩序の現れということを窺わせるものである[21]。

潤井川流域の開発　ここで、潤井川流域周辺の当該期集落の様相も確認しておきたい（第 125 図）[22]。古墳時代前期から集落が営まれた星山丘陵周辺や浮島沼周縁地域に対し、古墳時代中期から後期になると、潤井川東岸の微高地上に新たにまとまった集落が形成されるようになり、それらは「潤井川流域における古墳時代後期の開発の跡」とも評される[23]。そのような集落遺跡からは、5 世紀代の「初期須恵器」（第 125 図）やカマドを有する竪穴建物跡（富士市沢東 A 遺跡、中桁・中ノ坪遺跡）、子持勾玉や石製模造品を用いた祭祀（沢東 A 遺跡）が確認されており、王権との関連性を有した先進性の高い文物を積極的に利活用した集団によって、潤井川流域の開発が進められていたことが窺われる。現潤井川下流域と富士川下流域の間の扇状地デルタ地帯は旧富士川の氾濫原に相当しており、沢東 A 遺跡等の潤井川下流東岸の集落は「旧富士川」渡川の際にも重要な役割を果たしていたであろうことは想像に難くない。また潤井川河口部には駿河湾へと繋がる津[24]（旧吉原湊、現田子の浦港）があることも考慮すれば、沢東 A 遺跡や中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡のラインによって、地理的・経済的に重要な拠点を形成していたことが推定されるのである。

大淵スコリアの降下と新興首長層の台頭　富士山南麓の側火山の噴火によって大淵スコリアが噴出・降下したのは、上述した古墳時代中期以降の潤井川下流域の開発に一定の目処がつきつつあった TK23 ～ TK47 型式併行期のことであり、この災害イベントが駿河東部地域に与えた動揺は、小さくなかったものと考えられる。厚いスコリアが堆積した愛鷹山麓南西部では、宮添遺跡のような古墳時代前期以来の拠点集落は継続し、降下した火山灰の上には新興の首長墳として天神塚古墳が築かれ、次の首長墳である寺屋敷古墳では埴輪も採用されることになる。関東系埴輪の存在が確認されている田子浦砂丘上の富士市山の神古墳や、愛鷹山南東麓の沼津市長塚古墳



A. 富士川西岸古墳群　B. 伝法古墳群　C. 一色古墳群　D. 比奈・富士岡古墳群
E. 中里・須津古墳群　F. 船津古墳群　G. 別所古墳群
1. 浅間大社遺跡　2. 大宮城跡　3. 沢東 A 遺跡　4. 中桁・中ノ坪遺跡　5. 東平遺跡
6. 宇東川遺跡　7. 宮添遺跡　8. 伊勢塚古墳　9. 東平 1 号墳　10. 国久保古墳
11. 中屋 4 号墳　12. 実円寺西 1 号墳　13. 寺屋敷古墳　14. 天神塚古墳　15. 山の神古墳

第 125 図　潤井川流域周辺における古墳時代中期から後期の集落と古墳（1：100,000）

も、スコリア降下後の古墳とみられる。そして、新たに開発が進んだ潤井川下流域では、その象徴的な要衝地に伊勢塚古墳が築かれるのである。このようにみてくると、潤井川下流域から浮島ヶ原低地周辺において中小首長層が台頭する状況の背景を考える際、ヤマト王権に連なる集団による潤井川流域の如き低地部開発の推進とともに、大淵スコリアの降下のような当該期の自然災害の影響についても重要な因子として積極的に検討する段階にきているのではないだろうか。

当該期における自然災害は富士山の噴火以外にも、富士川河口断層帯の活動とそれに伴う浮島沼の水位上昇[25]や、関東では榛名山の噴火による保渡田古墳群の解体[26]とも重なっており、東日本規模において自然災害に起因する不安定な生活環境に陥っていたことが想像される。こうした背景があったからこそ、新しい古墳文化や新興の首長を受け入れるための地域的素地[27]が形成されていたとも考えられるのである。

古墳時代中期から後期への変革期に、富士山と榛名山という東日本を代表する２つの火山が活動している事実は極めて重要であり、この災害イベントが、地域史や災害史の枠にとどまらず、日本列島史を構築していく上でも今後積極的に評価されていくことが求められている。

注

1）志村　博「伊勢塚古墳周溝緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会、1983年。

2）後藤守一ほか「伊勢塚古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会、1958年。

3）注１文献。なお、静岡大学人文学部考古学研究室所蔵の伊勢塚古墳測量図（1955年墳測量）によると、南側に墳丘がさらに張り出す帆立貝形前方後円墳のような姿が記録されているが、同時期に測量された「吉原市の古墳」掲載の墳丘や周辺地形との差が大きすぎるため、真に伊勢塚古墳の実測図かどうかを慎重に判断する必要がある。

4）静岡県教育委員会『静岡県の前方後円墳一資料編一』静岡県文化財調査報告書第55集、2001年。

5）鈴木敏則「埴輪」『静岡県の前方後円墳一総括編一』静岡県文化財調査報告書第55集、2001年。

6）鈴木敏則ほか「多田大塚古墳群・芋ヶ窪古墳群発掘調査報告」『静岡県の前方後円墳一個別報告編一』静岡県文化財調査報告書第55集、2001年。

7）静岡県『静岡県史』第壱巻、1930年。

　中野岡雄「浅間古墳とスルガの国」吉原市『吉原市史』上巻、1972年。

8）志村　博「天神塚古墳（富士市）」静岡県教育委員会　編『静岡県の前方後円墳 - 個別報告編 -』静岡県文化財報告書第55集、2001年。

9）注８文献。

10）注８文献、p.169。

11）佐藤祐樹「弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化」『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会、2011年。

12）佐藤祐樹ほか『宮添遺跡Ⅴ』富士市教育委員会、2012年。

13）佐藤祐樹ほか『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会、2011年。

14）藤村　翔「富士市・柏原遺跡（第６地区）の発掘成果について」『静岡県考古学通信』No.57、2012年。

15）佐藤祐樹『宮添遺跡Ⅲ』富士市教育委員会、2010年。

16）和田晴吾「古墳時代は国家段階か」都出比呂志・田中　琢編『古代史の論点４　権力と国家と戦争』小学館、1998年。

17）滝沢　誠「神明塚古墳と周辺の大型古墳」『神明塚古墳（第２次）発掘調査報告書』沼津市史編さん調査報告書　第15集、沼津市教育委員会、2005年。

18）静岡県『静岡県史』第壱巻、1930年。

　中野岡雄「浅間古墳とスルガの国」吉原市『吉原市史』上巻、1972年。

19）注５文献。

20）稲村　繁「沼津長塚古墳採集の人物埴輪」『埴輪研究会誌』第７号、2003年。

21）注17文献。

22）初期須恵器実測図の出典

大宮城跡・浅間大社遺跡：渡井英容ほか『富士宮市の遺跡Ⅱ』富士宮市文化財調査報告書第30集、富士宮市教育委員会、2003年。

沢東Ａ遺跡：(１次)久松義昭「沢東Ａ遺跡発掘調査概報」富士市教育委員会、1992年。(４次)志村　博ほか「沢東Ａ遺跡・第Ⅴ地区」富士市教育委員会、1997年。

中原４号墳：鈴木敏則「静岡県内における初期須恵器の流通とその背景」『静岡県考古学研究』No.31、静岡県考古学会、1999年。

宮添遺跡：(Ｄ地区)注15文献。(Ｅ地区)注13文献。(Ｌ地区)注12文献。

23）渡井英容「まとめ」『東田遺跡』富士宮市文化財調査報告書第40集、富士宮市教育委員会、2009年。

24）原　秀三郎「物部氏・穂氏・多氏の土着と駿河国」『沼津市史　通史編　原始・古代・中世』沼津市、2005年。

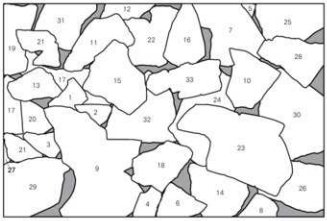
25）小松原純子ほか「静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動」『活断層・古地震研究報告』第７号　独立行政法人産業技術総合研究所、2007年。

26）若狭　徹「中期の上毛野　―共立から小地域経営へ―」右島和夫ほか編『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17　雄山閣、2011年。

27）注11文献。

写真図版

PLATE



巻頭図版２（下段）伊勢塚古墳出土埴輪　報告番号対応図

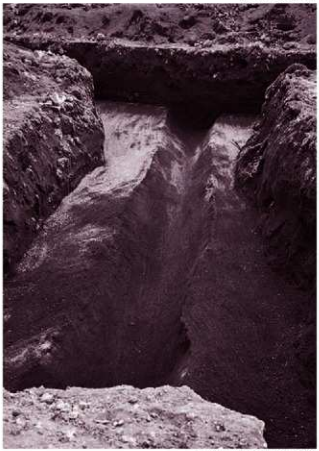
中扉の写真：伊勢塚古墳遠景（南から）

H11-1　三新田遺跡 J 地区

1. 1Tr 全景（西から）

2. 1Tr 東端土層

3. 2Tr 全景（西から）



4. 溝状遺構全景（南から）

5. 溝状遺構土層（1Tr）

6. 溝状遺構土層（2Tr）

PL.2　平成11年度　調査写真

H11-2　沖田遺跡隣接地（110次調査地点）

1. テストピット土層①

2. テストピット土層②

H11-4　沖田遺跡112次調査地点

1. TP1 土層

2. TP2 全景

H11-5　荻ノ原古墳群

1. 1Tr（旧荻ノ原第１号墳、南西から）

2. 2Tr 全景（南東から）

H11-3　沖田遺跡隣接地（111次調査地点）

1．1Tr 全景（南から）

2．3Tr 南西角　SB1・SB2 土層

3．3Tr 全景（北から）

4．3Tr　SX1（西から）

PL.4　平成11年度　調査写真

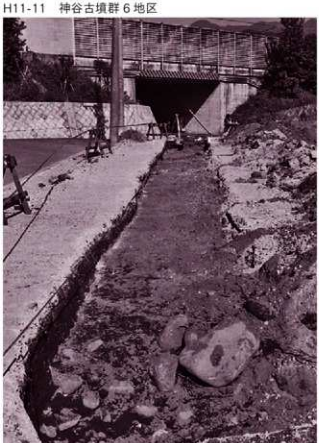
H11-6　児森遺跡 1 地区

1．1Tr 土層

2．2Tr 東端

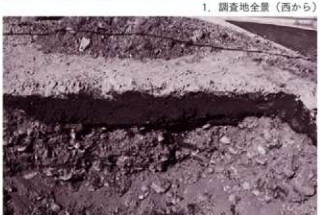
3．3Tr 全景（東から）

H11-11　神谷古墳群 6 地区



2．1Tr 全景（南西から）

1．調査地全景（西から）



3．土層

H11-8　岩倉 A 遺跡 3 地区

1．4Tr 全景（南から）

2．4Tr 土層

3．2Tr 全景（南から）

H11-9　中原遺跡20地区

1．3Tr 全景（西から）

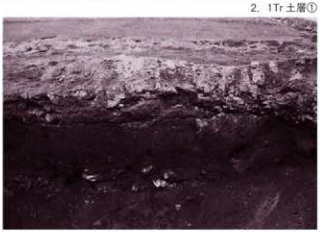
2．3Tr 土層

PL.6　平成11年度　調査写真

H11-10　比奈 1 古墳群 5 地区 -1 次

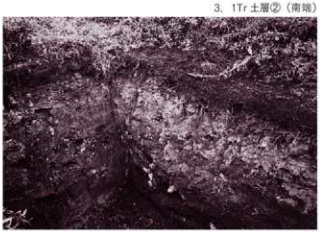
1. 1Tr 全景（北西から）

2. 1Tr 土層①



3. 1Tr 土層②（南端）

4. 2Tr 全景（北から）



5. 3Tr

6. 4Tr（北西から）

7. 4Tr 土層

H11-13　沖田遺跡114次調査地点

1. TP2 土層

2. TP4 土層

3. TP5 西壁土層

4. TP5 南壁土層

5. 5Tr 北壁土層　畦畔

PL.8　平成11年度　調査写真

H11-12　沖田遺跡113次調査地点

1．1Tr 全景（西から）

2．1Tr 西端土層

H11-14　沖田遺跡115次調査地点

1．TP1 土層

H11-15　中原遺跡21地区

1．1Tr 全景（西から）

H11-16　鎌研古墳群２地区

1．1Tr 全景（西から）

2．1Tr 土層（地山の落ち込み）

H11-17　舟久保遺跡41地区

1．1Tr 全景（東から）

2．2Tr 全景（西から）

3．3Tr 全景（西から）

4．3Tr 西端土層

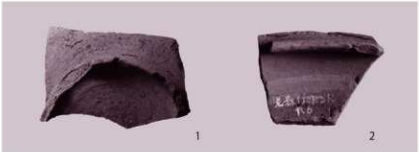
H11-18　宮添遺跡Ｆ地区

1．調査地全景（南から）

2．2Tr 土層（C-C'）

PL.10 平成11年度　遺物写真

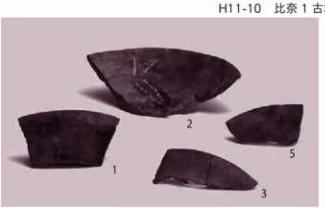
H11-1　三新田遺跡 J 地区

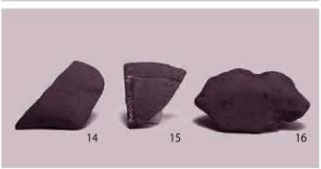


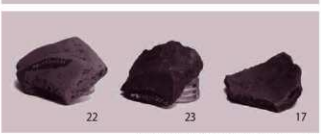
H11-6　児森遺跡 1 地区

H11-10　比奈 1 古墳群 5 地区 -1 次

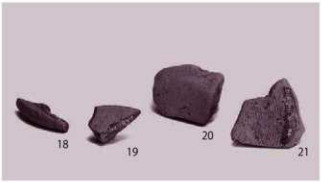
H11-13　沖田遺跡114次調査地点

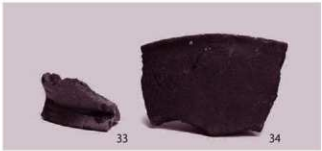


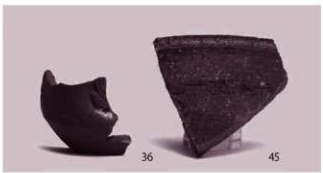


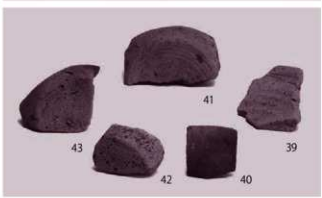


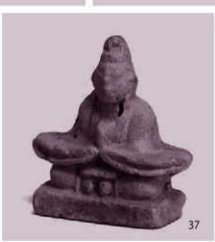
H11-3　沖田遺跡111次調査地点











H11-3　沖田遺跡 111 次調査地点

PL.12　平成12年度　調査写真

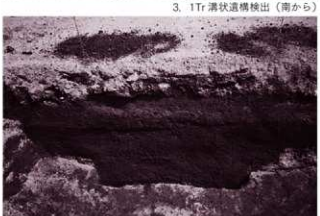
H12-1　沢東 A 遺跡 5 次調査地点

1．2Tr 全景（南から）

2．2Tr 土層

3．1Tr 溝状遺構検出（南から）

4．3Tr 全景（北から）



5．3Tr 北端土層

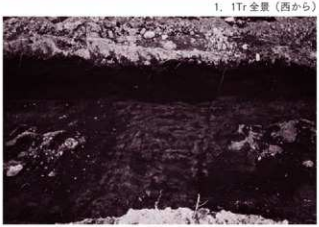
H12-3　中原遺跡22地区

1．1Tr 全景（西から）

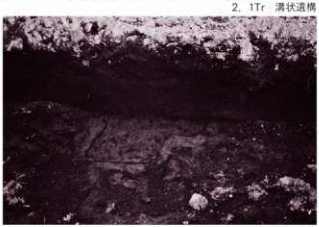
2．1Tr 東端土層

H12-2　石坂３古墳群１地区

1．1Tr 全景（西から）



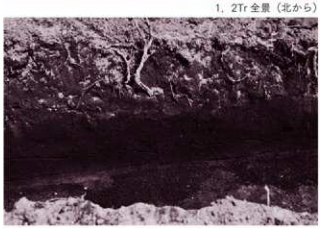
2．1Tr　溝状遺構



3．1Tr　土坑

H12-5　船津７古墳群６地区

1．2Tr 全景（北から）



2．2Tr 土層

3．3Tr（西から）

H12-7　岩倉Ａ遺跡４地区

1．2Tr 土層

2．3Tr 土層

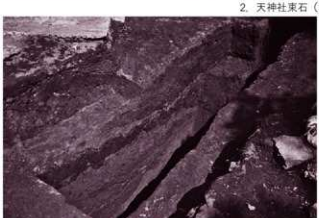
PL.14　平成12年度　調査写真

H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

1.「後円部」トレンチ全景（北西から）

2. 天神社東石（南から）

3. 2-1Tr 中央付近（北西から）



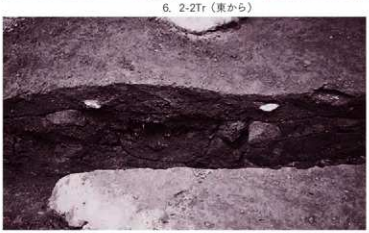
4. 2-1Tr 南端（南西から）

5. 2-3Tr（南西から）

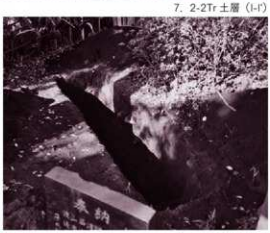
H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

6. 2-2Tr（東から）

7. 2-2Tr 土層（I-I'）



8. 2-3Tr 土層（F-F'）

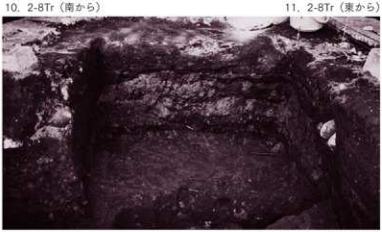


9. 2-4Tr（南から）

10. 2-8Tr（南から）

11. 2-8Tr（東から）

12. 2-8Tr 土層（E-E'①）



13. 2-8Tr 土層（E-E'②）

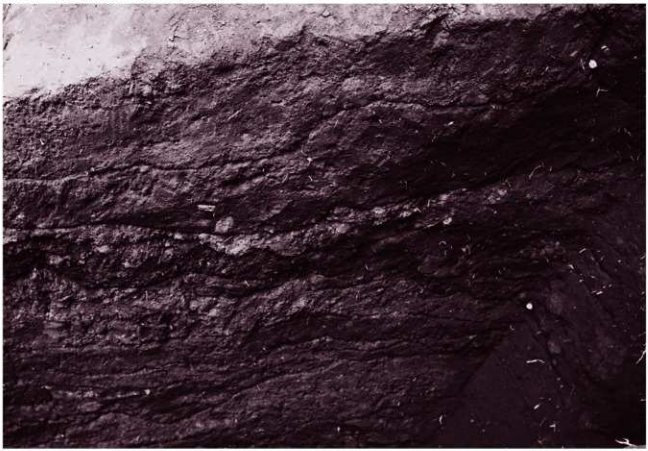
PL.16　平成12年度　調査写真

H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

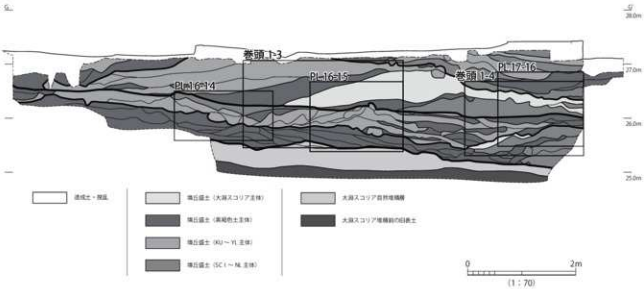
14. 2-1Tr 土層（G-G'①）

15. 2-1Tr 土層（G-G'②）

H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次



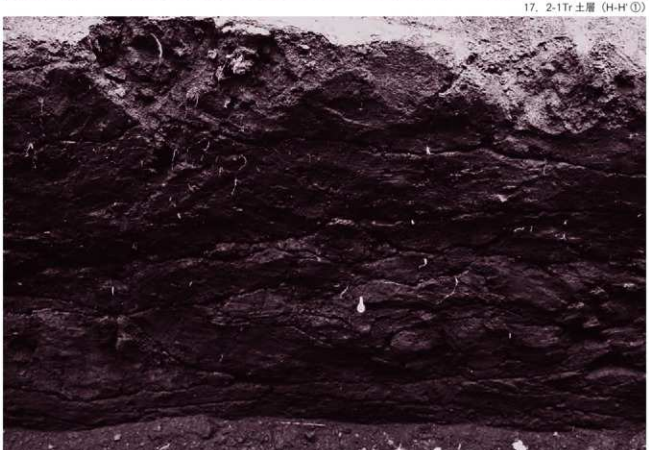
16. 2-1Tr 土層（G-G'③）



PL.18　平成12年度　調査写真

H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

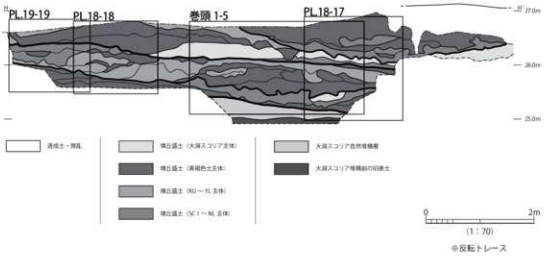
17. 2-1Tr 土層（H-H'①）



18. 2-1Tr 土層（H-H'②）

H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

19. 2-1Tr 土層（H-H'③）



※反転トレース

PL.20 平成12年度　調査写真

H12-4　沖田遺跡116次調査地点

1. TP4

2. TP1

3. TP6

4. TP8

5. TP11

H12-8　中原遺跡23地区

1. 1Tr 全景（北西から）

H12-10　善得寺廃寺跡２地区

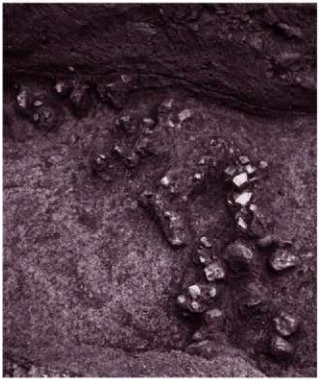
1. 3Tr 全景（東から）

H12-9　伝法１古墳群　伊勢塚古墳４次

1．伊勢塚古墳遠景（南から）

2．5Tr（南から）

3．1Tr（南から）



4．1Tr 埴輪片出土状況

5．1Tr 北端土層

PL.22　平成12年度　調査写真

H12-11　舟久保遺跡42地区

1．1Tr 全景（北から）

2．SB7 全景（東から）

3．SB4 土層（西から）

4．SB4 全景（西から）

H12-11　舟久保遺跡42地区

5. SB1・SB2 検出状況（西から）

6. SB3 全景（東から）

PL.24　平成12年度　調査写真

H12-11　舟久保遺跡 42 地区

7. SB3 土層（東から）

8. SB3 カマド（東から）

9. SB5・SB6 全景（西から）

10. SB5 土層（北から）

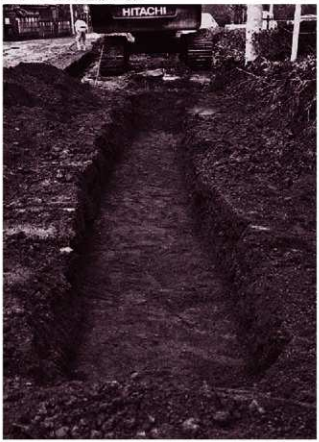
11. SB5 カマド（西から）

H12-12　富士岡１古墳群隣接地

1．1Tr・2Tr（東から）

2．2Tr 東壁土層

H12-16　大坂遺跡１地区



2．2-1Tr 全景（南東から）

1．1-1Tr（西から）

3．2-1Tr 土層

4．2-2Tr 土層

5．2-4Tr 東端（西から）

PL.26 平成12年度　調査写真

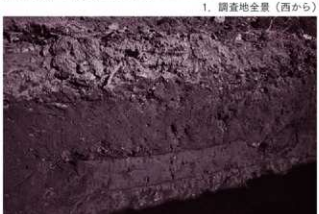
H12-13　沖田遺跡118次調査地点

1. TP1

2. TP1 南壁土層（畦畔）

H12-14　土手内・中原 2 古墳群10地区

1. 調査地全景（西から）



3. 1Tr 土層

2. 1Tr 全景（東から）

H12-15　柏原遺跡３地区

1．1Tr　SB1 土層（東から）

2．2Tr 北端土層

3．4Tr 全景（南から）

4．4Tr　SB2

H12-20　東平遺跡29地区

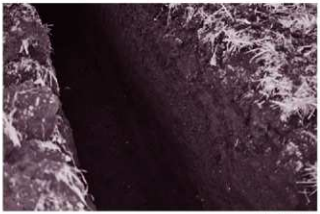
1．1Tr 土層・ピット

2．1Tr 全景（西から）

PL.28 平成12年度　調査写真

H12-18　沢東 A 遺跡隣接地（6 次調査地点）

1．1Tr 全景（東から）



2．1Tr 土層

3．2Tr 土層

H12-17　包蔵地外（松岡）

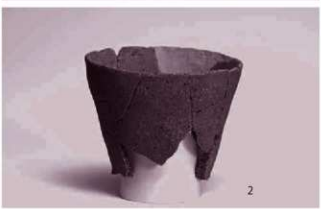
1．TP1 土層

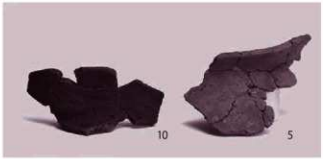
2．TP3 土層

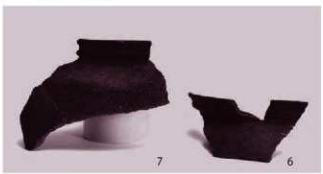
3．TP4 全景（南から）

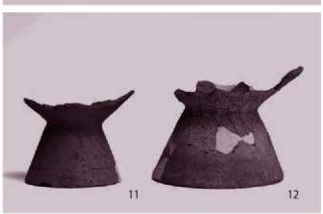
H12-19　富士岡 1 古墳群 5 地区

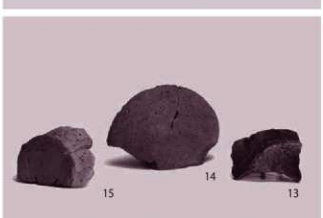
1．1Tr 土層





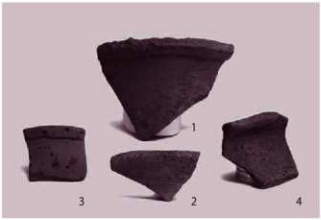


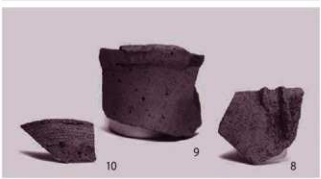


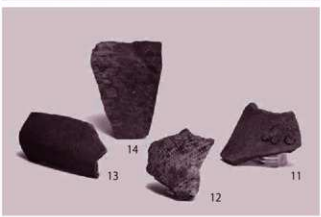


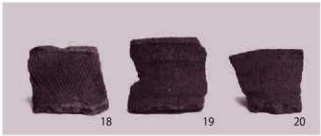
H12-1　沢東 A 遺跡 5 次調査地点

PL.30 平成12年度　遺物写真

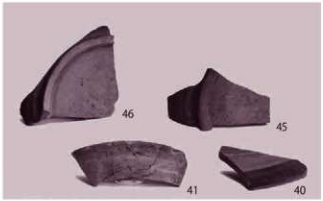


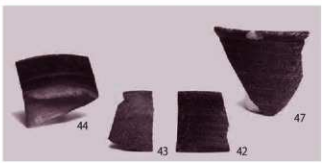


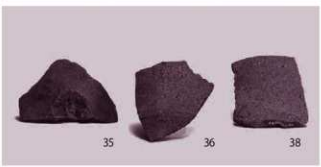


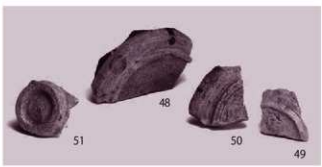


H12-4　沖田遺跡116次調査地点

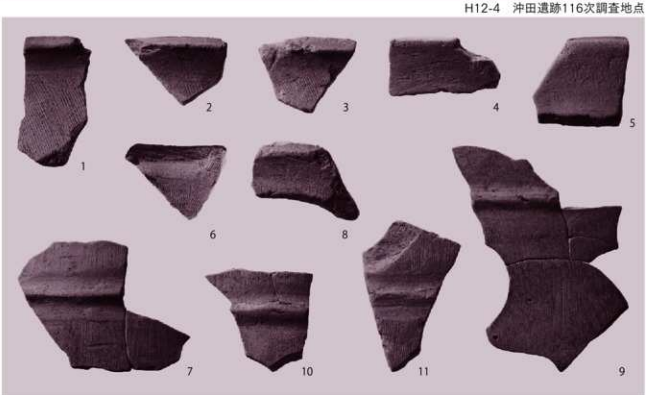




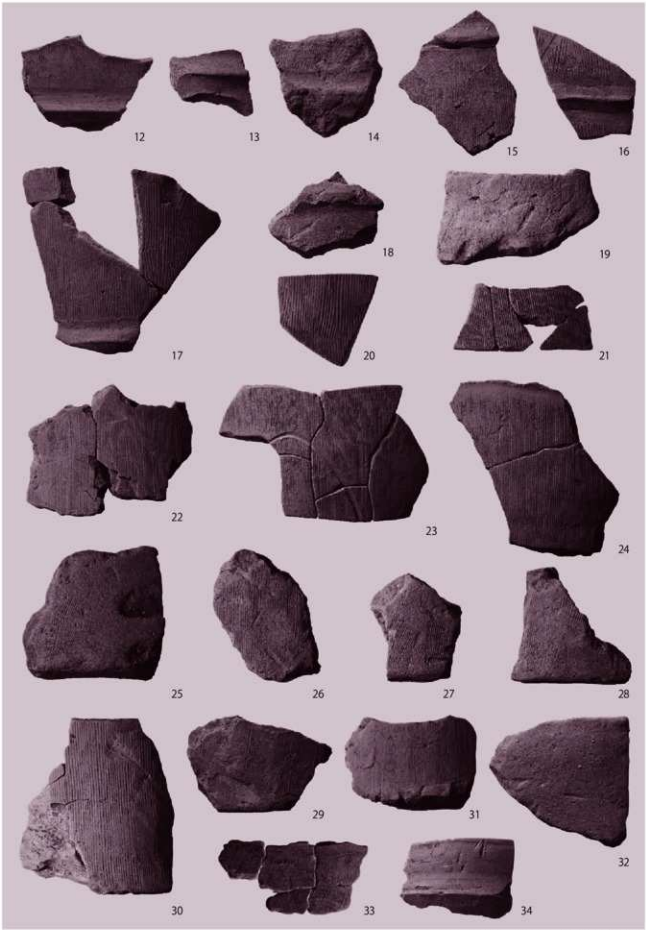




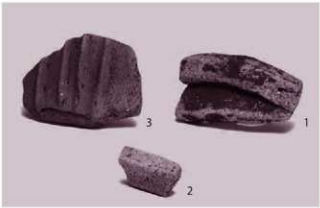
H12-4　沖田遺跡116次調査地点

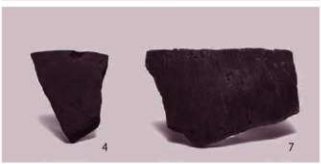


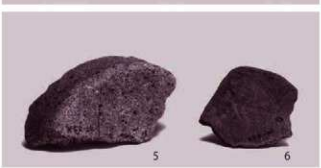
H12-9　伝法１古墳群　伊勢塚古墳４次

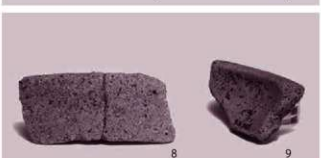


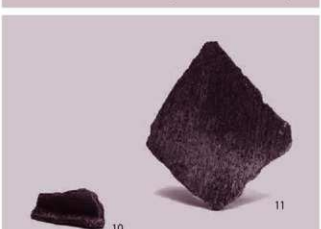
H12-9　伝法１古墳群　伊勢塚古墳４次

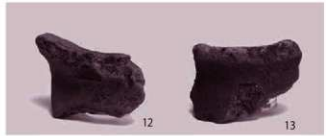


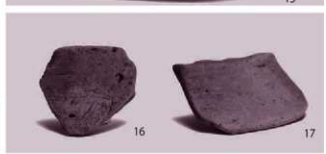


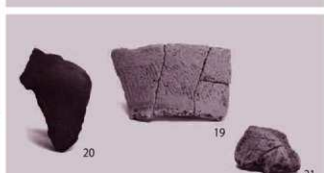


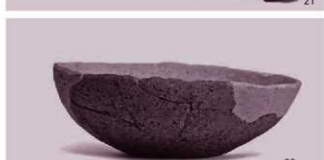






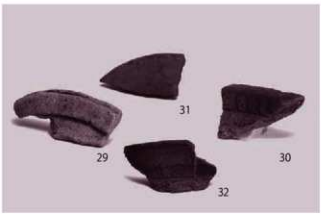


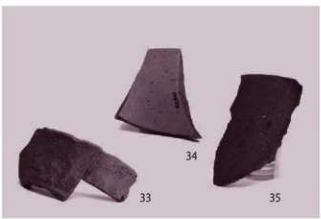


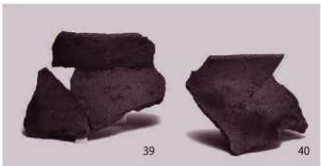


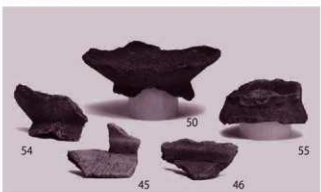
H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

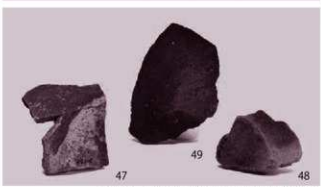
PL.34 平成12年度　遺物写真



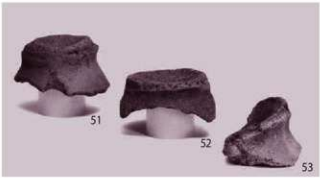


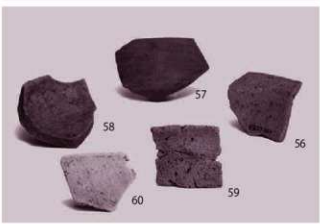


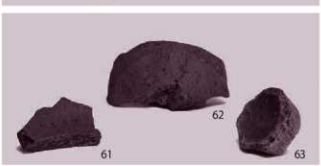


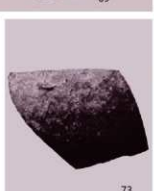


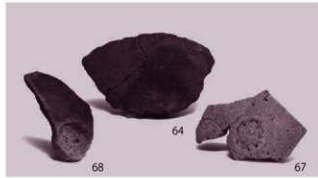
H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

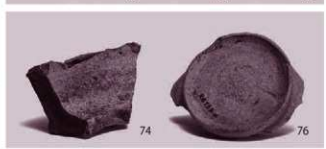


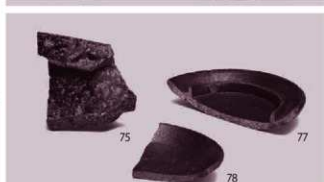






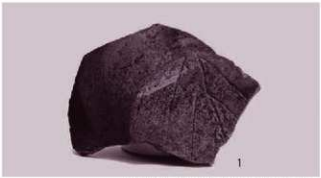


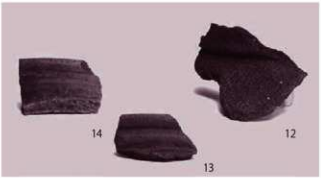




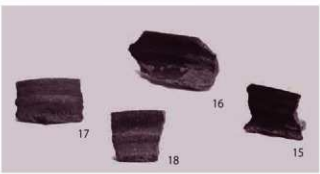
H12-6　中里２古墳群　天神塚古墳２次

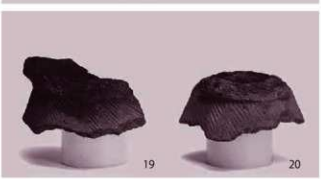
PL.36 平成12年度　遺物写真

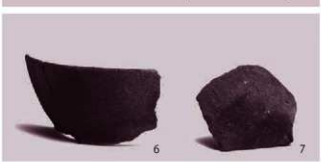


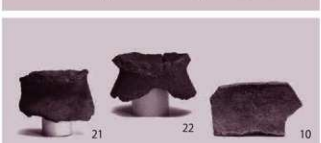


H12-18　沢東 A 遺跡 6 次調査地点

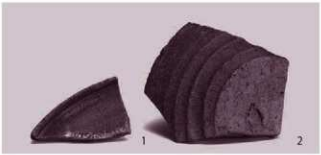


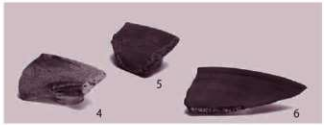




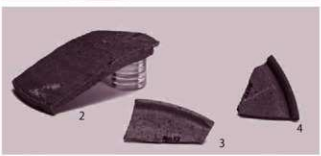


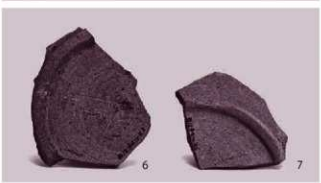
H12-13　沖田遺跡118次調査地点

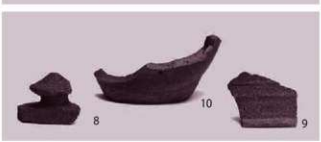


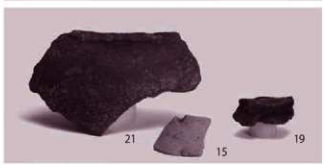


H12-11　舟久保遺跡42地区

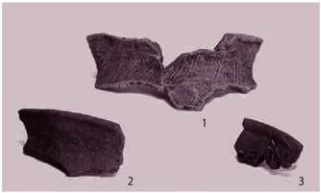


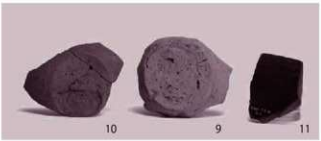


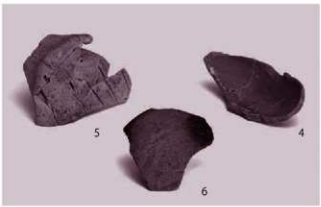


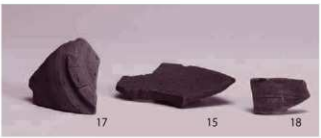


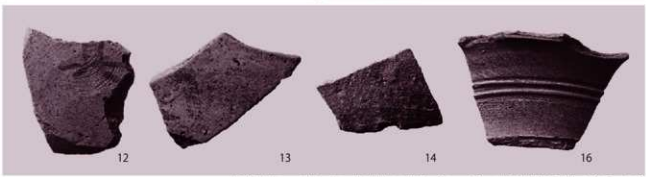
H12-15　柏原遺跡３地区



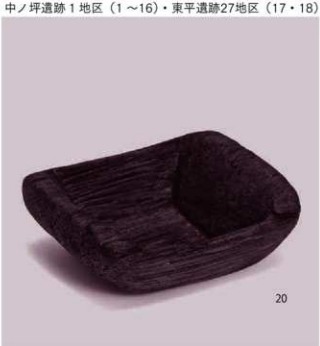








資料報告　中桁・中ノ坪遺跡１地区（1～16）・東平遺跡27地区（17・18）



資料報告　行僧遺跡

報告書抄録

ふりがな	ふじしないいせきほっくつちょうさほうこくしょ
書　名	富士市内遺跡発掘調査報告書
副書名	平成 11・12 年度
シリーズ名	富士市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 53 集
編著者名	藤村　翔（編）、若林美希
編集機関	富士市教育委員会　（担当課：文化振興課）
所在地	〒 417-8601　静岡県富士市永田町 1 丁目 100 番地　　Tel.　0545-55-2875
市町村コード	22210
発行年月日	平成 24 年 3 月 31 日

年度	所収遺跡名		所在地		種別		主な遺構
所収	地区名		北緯	東経	主な時代		主な遺物
番号	調査面積	調査原因	調査期間		市遺跡番号	特記事項	
H11	三新田遺跡（ミシンデン） J 地区		富士市松新田（マツシンデン）190-1				溝状遺構
1			35° 08′ 19″	138° 43′ 50″	古墳～平安		土製品
	80㎡	試掘・確認	H11.4.5 ～ 4.8		S-96		
H11	河田遺跡（カワタ） 隣接地（110 次調査地点）		富士市比奈 698-1　外				なし
2			35° 09′ 33″	138° 42′ 43″			なし
	60㎡	試掘・確認	H11.5.17		S-53		
H11	河田遺跡（カワタ） 隣接地（111 次調査地点）		富士市宇東川東町（ウトウガシヒガシマチ）539-7　外				住居跡？（中世）
3			35° 10′ 06″	138° 42′ 12″	平安・中世・近世		須恵器・土師器・陶磁器
	186㎡	試掘・確認	H11.5.24 ～ 6.8		S-53		
H11	河田遺跡（カワタ） 112 次調査地点		富士市今泉 500-1　外				なし
4			35° 09′ 40″	138° 42′ 15″			なし
	27㎡	試掘・確認	H11.6.28 ～ 6.30		S-53		
H11	狭ノ原古墳群（サノハラ）		富士市大淵（オブチ）48-1　外				なし
5			35° 11′ 22″	138° 41′ 19″			なし
	35㎡	試掘・確認	H11.7.1 ～ 7.9				
H11	元森遺跡（モトモリ） 1 地区		富士市中里（ナカザト）1638-1　外				なし
6			35° 10′ 03″	138° 44′ 05″			なし
	136㎡	試掘・確認	H11.7.12 ～ 7.15		S-108		
H11	中吉原（ナカヨシハラ）遺跡 4 地区		富士市八代町（ヤシロチョウ）61				なし
7			35° 09′ 12″	138° 41′ 40″			なし
	30㎡	試掘・確認	H11.8.27		S-109		
H11	岩倉（イワクラ）A 遺跡 3 地区		富士市大淵（オブチ）7385-2　外				なし
8			35° 14′ 23″	138° 42′ 13″			なし
	152㎡	試掘・確認	H11.9.13 ～ 9.16		S-114		
H11	中原（ナカハラ）遺跡 20 地区		富士市伝法（デンポウ）300-1　外				なし
9			35° 10′ 54″	138° 40′ 34″			なし
	260㎡	試掘・確認	H11.9.27 ～ 10.1		S-19		
H11	比奈 1 古墳群 第 5 地区 -1 次		富士市原田（ハラダ）1980　外				なし
10			35° 10′ 30″	138° 43′ 18″			なし
	513㎡	試掘・確認	H11.10.14 ～ 10.26				
H11	神谷古墳群隣接地 （6 地区）		富士市中里（ナカザト）1157-1				
11			35° 09′ 58″	138° 44′ 21″			
	90㎡	試掘・確認	H11.10.25				
H11	河田遺跡（カワタ） 113 次調査地点		富士市比奈 854-1　外				なし
12			35° 09′ 58″	138° 42′ 43″			なし
	35㎡	試掘・確認	H11.11.15 ～ 11.19		S-53		
H11	河田遺跡（カワタ） 114 次調査地点		富士市今泉 3 丁目 146-1　外				水田・畦畔跡
13			35° 09′ 54″	138° 41′ 53″	古墳～奈良・平安		土師器片
	144㎡	試掘・確認	H11.12.14 ～ 12.24		S-53		
H11	河田遺跡（カワタ） 115 次調査地点		富士市宇東川西町（ウトウガシニシマチ）11-9　外				なし
14			35° 10′ 01″	138° 42′ 03″			なし
	43㎡	試掘・確認	H11.12.20 ～ 12.21		S-53		
H11	中原遺跡（ナカハラ） 21 地区		富士市伝法（デンポウ）565-5				なし
15			35° 11′ 08″	138° 40′ 26″			なし
	162㎡	試掘・確認	H12.2.24		S-19		

年度 所収 番号	所収遺跡名 地区名 調査面積	調査原因	所在地 調査期間	北緯	東経	種別 主な時代 市遺跡番号	特記事項	主な遺構 主な遺物
H11 16	鎌祐(カマユウ)古墳群 2 地区 45㎡	試掘・確認	富士市沼本(ヌマモト) 1013-3 外 H12.2.28～3.3	35°10′49″	138°38′04″			なし なし
H11 17	舟久保(フナクボ)遺跡 41 地区 94㎡	試掘・確認	富士市依田橋(ヨダバシ) 725-1 外 H12.3.14～3.22	35°10′18″	138°41′40″	S-46		なし なし
H11 18	宮添(ミヤゾエ)遺跡 F 地区 142㎡	試掘・確認	富士市増川(ゾウガワ) 721 外 H11.8.18～8.20	35°09′38″	138°44′56″	S-67		なし なし
H12 1	沢(ソウ)東 A 遺跡 5 次調査地点 513㎡	試掘・確認	富士市久沢(クザワ) 174-1 H12.4.12～4.21	35°11′13″	138°41′04″	S-33		溝状遺構 土師器・須恵器
H12 2	石脇(イワワキ) 3 古墳群 1 地区 300㎡	試掘・確認	富士市石脇(イワワキ) 606-1 外 H12.4.24～4.28	35°10′57″	138°38′52″			なし なし
H12 3	中原(ナカハラ)遺跡 22 地区 224㎡	試掘・確認	富士市伝法(デンポウ) 547-2 外 H12.5.15～5.18	35°11′04″	138°40′23″	S-19		なし なし
H12 4	沖田(オキタ)遺跡 116 次調査地点 300㎡	試掘・確認	富士市比奈(ヒナ) 938-1 外 H12.5.22～5.25	35°09′48″	138°42′55″	弥生～平安・近世		焼土帯 弥生土器・土師器・須恵器
H12 5	瀬津(セヅ) 7 古墳群 6 地区 95㎡	試掘・確認	富士市瀬津(セヅ) 614-2 H12.5.24～5.26	35°09′23″	138°46′07″			なし なし
H12 6	中里(ナカザト) 2 古墳群 天神塚古墳 2 次 53㎡	試掘・確認	富士市中里(ナカザト) 1466 H12.6.25～8.4、H12.11.20～11.30	35°09′58″	138°43′58″	古墳・近世		前方後円墳 土師器・須恵器・陶器
H12 7	岩倉(イワクラ) A 遺跡 4 地区 28㎡	試掘・確認	富士市大淵(オオブチ) 7608 地先 H12.8.28～8.29	35°14′30″	138°42′16″	S-114		なし なし
H12 8	中原(ナカハラ)遺跡 23 地区 188㎡	試掘・確認	富士市伝法(デンポウ) 443-1 外 H12.9.5～9.7	35°10′53″	138°40′17″	S-19		なし なし
H12 9	伝法(デンポウ) 1 古墳群 伊勢塚古墳 4 次 50㎡	試掘・確認	富士市伝法(デンポウ) 3102-1 外 H12.9.6～9.8	35°10′10″	138°40′15″	古墳		土製品（埴輪片）
H12 10	善得寺(ゼントクジ)廃寺跡 2 地区 81㎡	試掘・確認	富士市今泉(イマイズミ) 5 丁目 15-6 H12.9.25～9.27	35°10′07″	138°41′45″	S-126		なし なし
H12 11	舟久保(フナクボ)遺跡 42 地区 380㎡	試掘・確認	富士市今泉(イマイズミ) 1982 外 H12.10.4～10.12	35°10′15″	138°41′29″	S-46		竪穴建物跡 土師器・須恵器
H12 12	富士岡(フジオカ) 1 古墳群 隣接地 72㎡	試掘・確認	富士市富士岡(フジオカ) 1527-1 外 H12.10.23～10.27	35°10′08″	138°43′36″			なし なし
H12 13	沖田(オキタ)遺跡 118 次調査地点 64㎡	試掘・確認	富士市今泉(イマイズミ) 3 丁目 158-1 外 H12.12.4～12.5	35°09′45″	138°41′45″	古墳・奈良・平安 S-53		大畦畔（奈良～平安） 土師器（古墳）
H12 14	土手内(ドテウチ)・中原(ナカハラ) 2 古墳群 10 地区 248㎡	試掘・確認	富士市伝法(デンポウ) 46-1 H12.12.11～12.13	35°11′05″	138°40′46″			なし なし
H12 15	柏原(カシワバラ)遺跡 3 地区 75㎡	試掘・確認	富士市西柏原新田(ニシカシワバラシンデン) 113 外 H12.12.18～12.27	35°08′12″	138°44′39″	古墳～奈良・平安 S-97		竪穴建物跡 土師器・須恵器
H12 16	大反(オゾリ)遺跡 1 地区 63㎡	試掘・確認	富士市大淵(オオブチ) 8553-1、8555-4 外 H12.12.19、H13.1.22	35°14′33″	138°41′53″	S-1		なし なし
H12 17	包蔵地外 56㎡	試掘・確認	富士市松岡(マツオカ) 10-1 外 H13.1.24	35°10′22″	138°38′22″			なし なし

年度	所収遺跡名		所在地		種別		主な遺構
所収	地区名		北緯	東経	主な時代		主な遺物
番号	調査面積	調査原因	調査期間		市遺跡番号	特記事項	
H12	沢(ハリ)東(ヒガシ)A遺跡		富士市久沢(クザワ)89-6				なし
18	隣接地（6次調査地点）		35°10′50″	138°38′59″	古墳		土師器片
	19㎡	試掘・確認	H13.2.8		S-33		
H12	富士岡(フジオカ)1古墳群		富士市比奈(ヒナ)2737-8　地先				なし
19	5地区		35°10′20″	138°43′26″			なし
	3㎡	試掘・確認	H13.2.27				
H12	東(ヒガシ)平(ナラ)遺跡		富士市伝法(デンプ)2879-3　地先				ピット（時期不明）
20	29地区		35°10′12″	138°40′32″			なし
	13㎡	試掘・確認	H13.2.27		S-42		

富士市埋蔵文化財発掘調査報告　第 53 集

富士市内遺跡発掘調査報告書
－平成 11・12 年度－

発行年月日　平成 24 年 3 月 31 日

編集・発行　富士市教育委員会
〒 417-8601　静岡県富士市永田町一丁目 100 番地
TEL 0545-55-2875　FAX 0545-53-0789
E-mail:ky-bunkashinkou@div.city.fuji.shizuoka.jp

印刷・製本　文光堂印刷株式会社
〒 410-0871　静岡県沼津市西間門 68-1

（富士市行政資料登録番号　23-60）